Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

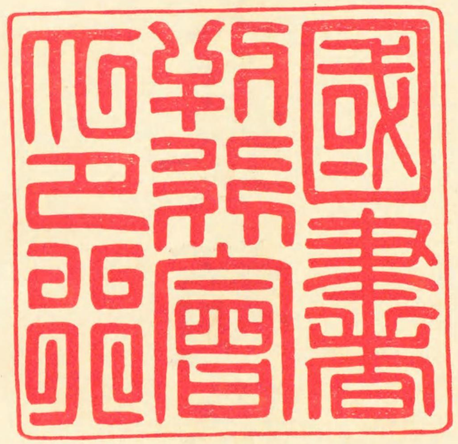
918.5
To426
K
0021638

0 複写

ㅋ4A78

德川文藝類聚　第一

918.5
To426
K



213638

德川文藝類聚序

一代の文學藝術が當該國民の內的生活と極めて密接の關係あるは今更道ふを要せざる所なるが、階級制度の國に在りては、其文藝におのづから二大別ありて、其一は少數の有權者階級を代表し、其二は無權力の大多數を代表す。而して前者は典雅にして、後者は鄙俗なるにも拘らず、其國の民衆生活の內情は、却りて其鄙俗文藝によりてのみ知らるゝの例尠からず。我德川時代の如きは其一例なり。專斷政治と峻別せられたる階級制度との爲に、幕政時代の國民の大多數は、殆ど全く國家の政權に與ることを得ず。隨つて其方面に於ける覇氣をも、希望をも、興味をも缺如せると同時に、三百年の太平無事に馴れて、醉生夢死の享樂生活に流れざるを得ざりし結果、一種特別の軟文學を創造せり。遊戯文藝とも特稱すべきもの是

れなり。東西の文化三千年、遠くは古代の支那、古代の埃及、古代の印度、波斯より、近くは今の英、佛、伊、獨、露等の文學藝術、其種類限知られぬ程なれども、又其目的を娯樂に置き、遊戯三昧を以て其製作の態度となせるの例も決して少からぬことなれども、我德川文藝の如く醇乎として醇なる遊戯文藝は、他にまた之有るを知らず。其類の豐富なるも斯くの如きは殆ど比なく、堙滅もせず散逸もせずして、外國趣味全盛の今日まで、兎も角も書籍の形式によりて保存し得られたるが如きは、最も珍らしき例に屬す。試に本集收むる所のものに就きて觀察せらるべし。其小說の部に屬する各種類が、文體か、構想か、表題かに、何等かの遊戯趣味を暗示若しくは明示せるはいふまでもなく、其歌曲や、脚本や、批評や、雜俳と稱するものや、一として多量の遊戯分子を含有せざるはあらず。かくの如きは明かに廢頽的享樂生活の反映にして、德川時代特有の産物たり。かるが故に、

我近世文明の裏面の消息、其餘所行ならざる不斷着の世態人情は、特り此等遊戯文學によりてのみ知るを得べし。かゝる不思議なる遊戯文藝の時代は、再び來ることあるべからず。之を文藝史の上より見るも、之を風俗史の上より見るも、社會學、國民心理學の上より見るも、特別研究の價値あるべきは、我德川期の文藝なり。國書刊行會が第一期に新群書類從を刊行し、第二期に近世文藝叢書を出だし、此たび更に其遺ちたるを拾ひて德川文藝類聚を大成せるは、主として此目的に副はんが爲なるべく、時機の宜しきを得たるものなり。何となれば、今にして此等の諸著を網羅しおかざるときは、盲目なる時勢の奔流は、遠からずして之を堙沒の淵に投ずべければなり。

大正三年三月下旬

坪内逍遙識

徳川文藝類聚

緒言

今や日々唯だ新を追ふに急にして、明治大正の國民を作れる因緣たる徳川文藝の寶庫は、研究未だ半ばならずして早く已に閑却せられんとす。今日古書の刊行甚だ流行するが如きも、其多くは時尚に迎合し、競つて同一樣の書類を重刊するに過ぎずして、彼の眞贄なる研究に資するの書類は、却りて常に等閑に附せらる。就中其珍本に屬する物の如きは、多く謄寫本の儘にして傳はれるが故に、今日之を蒐集しおかずんば、遂に全く堙滅に歸せんを恐る。乃ち新群書類從及び近世文藝叢書に漏れたる徳川期文藝書類の中、特に異色ありて、近年の複刊書類とは選を異にせると同時に、之を外國文藝書類に比するも尚ほ類を絶ち、我國獨特の産物として世界に誇

るに足るの珍書を、系統を立てゝ類別し、以て閲讀に便にせり。何れも得易からざるの書册なり。若し夫れ之を彼の魯魚の誤に充ちたる一部片々たる謄寫本として見んか、或は一顧の價値なきに了るべきも、之を其類に依つて綜合し、斯樣に一系を立つるに及びて、此に重要の意義を生じ來るの理は、多く辯ぜざるも明かなるべし。

以下本文藝類聚十二冊に就て、少しく其特異の點を述べんに、第一類の事實小說と總稱せるものは、言はゞ明治二三十年頃の新聞紙に連載せられし長篇の三面記事と稍や相似たるものにして、彼の全然たる空想より成れる荒誕無稽の小說とは類を異にし、當時の腕利き作者が、耳聞目睹せる市井の出來事の中、特に波瀾曲折ありて興味に富めるものに、更に多少の潤飾を加へて、世人の愛讀に供せるものなり。故に一は以て當時の人情風俗を知るべき材料たると同時に、其多くは當代の浮世草紙作者の洗錬の筆致に書き成されたるものなれば、行文將た味ふに足る。且つ事實と小說との交渉鹽梅も略之によりて知らるゝが故に、西鶴近松等の研究に從事する人々の好き參考資料となる事多かるべし。第二類の假に教訓小說と名づけたる者は、普通の國文學史などには等閑視せられたれども、德川時代の俗文學の一大部類に屬すべき者なり。類別の便宜上假に小說と名づけたれども、其形式よりいへば、小說たるよりも寧ろ小話と呼ぶを以て一層適當ならん。專ら平俗にして兒童婦女子にも解し易き譬喩體又は小說體に綴られ、彼の心學派の物より、一歩を進めて敢てくどくしく說法せず、感興に驅られて我れ知らず讀みもて行く中、自づと世俗教誨の効果を與へ得べき仕組なれば、其結構布置に於て、又何の束縛なく自由奔放なる想像に任かせて作れる、半ば娛樂的に肩の凝らぬ讀物なり。作者敢て心學を說かずして、書中自から心學教誨を浸潤し得たる好著、其意を今日に

取りて、新教誨小説を作るの參考ともなり得べし。本輯には何れも其傑作を收めたれば、以て德川文學史料の補遺たるべく、又一には、當時武家階級の下に壓せられたる市井人道德の一斑を窺ふ事を得て、武士道以外に立てる江戸ッ子氣質の養成せられたる根原にも遡り得べし。第三類の遍歷小説は、普通の紀行小説にはあらず、又諸國遍歷、巡禮又は武者修業記の謂にもあらず、概して彼のガリバー巡島記の如き結構著想に成れるものにて、實際には有るまじき又は到底往來出來まじき無何有鄉に旅行したる體にものして、種々の出來事を語り、樣々の光景を敍する間に、一種の寓意又は諷刺を含ませたる遊戯的小説なり。德川時代封建制度の下に手足も伸ばし得ざる市井人が、其架空想像の中に自由の天地を作りて、大海に放たれたる魚の如くに、少時の息拔きとせる趣もあり。又當代の政道などに不平ありても、正面より之を是非するが如きは、彼等の思

ひも寄らぬ所なれば、假託の事件人物によりて、わざと遊戯的に當代の棚おろしをなせるなど、壓制時代に行はれがちの寓意小説、諷刺小説としても特色あり。此種の物は、外國文學中には決して多くは見當らず。全く我德川期に於てのみ產出せらるべき特殊の遊戯文學也。明治以來我國文學史の編著せらるゝもの少からざれども、特に此種の作に着目して研究を試みたる者はなきが如し。今回收容する所は其代表作のみによりて見るも、如何に其種類の豐かなるかを知るに足るべし。第四類の怪談小説の如きも、其幾分は支那小説の翻案に外ならずと雖も、尙其種類と分量とに於て誇るに足るものあり。此集には、江戸式怪談の小話を取り入れ、各時代順に代表作と見做すべき傑作を網羅したれば、以て怪談に對する趣味の變遷を窺ふべく、更に之を江戸迷信史の參考として見ば、興一層深かるべく、延いて都會の迷信と、地方の迷信との比較、進みては、西洋

の迷信との比較研究に及ばゝ、民族心理作用の一斑をも窺ふべく、超自然力に對する民心の其の國土氣候風物歴史に如何ばかりの因緣を有するものかを識るの關鍵たるべし。第五の洒落本に至りては、特に一段深き意味にて德川期特有の文學なり。何となれば狹斜を以て肉の歡樂鄕とするは、古今内外共に其揆を一にする所なれど、之を以て一種風流なる理想的享樂地となし、普通人の卑しみ斥くる公娼中に理想の佳人を見出だし、之を歎美し之を愛慕すること、彼の歐州中古の騎士が其理想の女君に於けるが如くなるは、東洋、殊に支那、日本の過去に於て見る所の風俗なりとす。而して彼の高尾、薄雲の時代は狹斜文明の黄金時代にして、文化文政度は其廢頽時代といふべく、洒落本は實に其寫實的記錄なり。國民心理學の材料としても、斯くの如きは恐らく他に見出すこと難かるべし。又之を純文學の方面より見るも、其形式と内容とに現代の寫實派、

自然派の或作と相通ふ所あり。主として口語體を用ひて赤裸々の本能生活を寫したる點に注目せらるべし。さて第六の脚本は、江戸の部には、元祖團十郎已に三升屋兵庫と號して諸種の劇作あり。續いて富永平兵衞、宮崎傳吉、津打治兵衞等より、後の鶴屋南北、櫻田治助等に至る江戸芝居の脚本を集め、上方の部に於ては元祿期の狂言本、寶曆期に於る歌舞伎全盛期の脚本を集め、前者は其作者詳かならねど、後者は當時頓作の名人として知られたる並木正三をはじめ、近松德三、奈河龜助など、錚々たる作者の傑作にして、共に是れ默阿彌以前に屬し、之を併せ讀みて江戸上方の特徴を辨ふるに足らん。第八の淨瑠璃は、本會第一期の新群書類從の中に古淨瑠璃一冊、金平本一冊を刊行したれど、之は寛永より元祿迄の物多くして、其前後に於て之に洩れたる珍書少なからず。茲には其中の一粒選りを集めたり。第九、十の俗曲二冊は、所謂唄淨瑠璃と稱せらるゝ各

派、江戸唄の名著及び之に漏れたる佳作を集めたり。此等の詞章を以て、一概に無價値にして卑俗なりと貶するものあれど、德川の中世に成りしは必ずしも然らず。比較的近代の作は江戸文化爛熟時代の樣を窺ふに足る。第十一の雜俳は、本邦人の尤も小器用に文學を弄べる例とも見るべく、卑俗の事多けれど、之に依つて風俗は更なり、當時の衣服器物などの狀態を知るの便多々あり。又棄てがたき珍書なり。第十二の評判記に至つては、我國に於てのみ發達せる形式にして、今日の劇評など、其劇其優を見物せる者にのみ解せらるゝが如き附屬物にはあらで、全然獨立して文藝價値を具備せる批評文學なり。其及ぶ所、稗史小說狂歌の評判より、淨瑠璃能樂藝娼妓、果ては諸國の名物、魚蟲の評判に迄亘り、今日之を讀みて乾燥無味の失なく、其の甲論乙駁の駈合、頭取役の議長ぶりなど手に取る如く、當時の風俗の一端を識るの料となるべし。

之を通覽するに、以上十二册の文藝類聚に一貫する氣分は、總て遊戯的娯樂的にして、如何に德川の時代が太平樂の極に達せるかを思はしめ、彼の鎗を立てたる大名の行列と、賣文の腐儒が局小せられたる固定の教義以外に、德川期の社會風俗、人情の眞面目を彷彿し來り、以て我が國民性の如何なるものなるを窺ふに足る。閑文字を檢する事、豈必ずしも閑事業ならんや。

大正三年四月

國書刊行會

徳川文藝類聚第一　事實小説

例言

事實小説とは、所謂際物小説の部類に屬するものにして、其昔未だ新聞紙無き時代に於て、世人を驚倒せしむべき珍事出來せんか、先づ讀賣子は、之を瓦版に印刷して、其概略を報じ、尋で小説家は、其事件に多少の潤飾を施して、一篇の小説を脚色し、書肆は直に之を刊行して、以て世人の好奇心を滿足せしめしものを云ふなり。もとより小説なれば、關係人物には變名を用ひ、又其結構も事實と多少の差違あるを免れざれども、其多くは各作家の直接見聞にかゝりしものなれば、當時代の氣分全紙に充溢するのみならず、又史實の闕漏を補ふに足るべきこと多し。殊に各時代の作家等が、其耳聞目睹せし事實を、如何に詩化せしやを研究せんとするには、實に好箇の

資料と謂ふべく、後世作家の想像のみにて戲作せし、荒誕無稽なる實錄體小說とは、全く別種に屬するを以て、特に事實の二字を冠して、之を區別する事とせり。

事實小說の萌芽は、はやく平安朝時代の『伊勢物語』及び『源氏物語』に發し、鎌倉時代には『曾我物語』及び『奈與竹物語』出で、室町時代には『賀陽良藤物語』あれども、何れも寫本にて傳はり、當時直に刊行せしものにあらず。而して江戸時代に至りて、印刷術の進歩につれ、元和元年大坂落城の際には、『元和卯年之圖』刊行せられて、後世所謂瓦版の濫觴をなすとゝもに、寛永年代には、『大坂物語』『太閤記』『聚樂物語』『吉利支丹物語』『福齋物語』等出版せられて、刊本事實小說の權輿をなすに至れり。就中『大坂物語』と『太閤記』とは、後出の軍記體小說に影響を與へしといふのみにして、戲作にはあらず。又『聚樂物語』と『吉利支丹物語』とは、ともに戲作の體をなせども、前者は國民文庫

中、後者は續々群書類從宗教部に覆刻せられたれば、爰に除く事とせり。

福齋物語一卷（自一頁至十頁）　本書は、一名を寛永飢饉鼠物語とも言ひ、寛永十八年の暮より、近畿米價暴騰の爲に、洛中洛外の貧民飢餓せし光景を述べ、其原因を諸侯の米穀貯藏と士民の奢侈に歸し、幕府の貧民扶持として、川原普請を興せし事等を、滑稽なる文體にて戲作せしものなり。寛永廿年の刊本なれども、作者未だ詳ならず。

以上列擧せし所のものは、假名草紙時代（元和乃至延寶）に出版せられし事實小說の一斑にして、軍記體のもの比較的多かりしは、當時なほ戰亂を距る事遠からざれば、時代の要求に應ぜし自然の結果といふべし。かくて浮世草紙時代（天和乃至寛延）に入るや、天下太平を謳歌して、人心惰弱に流れ、隨つて好色本の流行となり、色道の取沙汰絕えず。されば事實小說も亦其影響を受けて、情死を描けるもの最も多く、不義成敗の女敵討之に次ぎ、其他町人の奢侈を寫せるもの、富籤の流行

を記せるもの、元祿年代の二大復讐、五人男の處刑、市川團十郎の横死等の新作續出せしは、また小說界の發達を證するものと謂ふべし。

事實小說の系統をひける心中小說類は、『諸國心中女』『風流夢浮橋』『心中大鑑』『好色入子枕』『心中戀の塊』等なれども、『心中大鑑』は既に近世文藝叢書小說部に收載せられ、『好色入子枕』と『心中戀の塊』とは、完本を發見せざりしを以て、本編には『諸國心中女』と『風流夢浮橋』とを掲げたり。

諸國心中女五卷（自一五二頁至二〇二頁）　本書は、[illegible]名を貞女白無垢と言ひ、貞享三年の刊本にして、從來西鶴作と傳へしものなれども、其自序に洛下寓居序とあるのみならず、其文章冗長にして、西鶴の簡潔なるそれに比すべくもあらざれば、恐らくは後人の附會說なるべし。而して本書名の心中女とは、情死女に限れるにあらずして、貞節女の意なり。卽ち當時諸國に高名なる貞節女の取沙汰を書き集めしものにして、是等の事

實は今や殆ど傳らざるを以て、對照すること能はざれども、書中に、世に住む人の上なれば名も漏しぬ云々、又さる子細あつて云ひつくさず云々などゝあるを以て見れば、當時の巷說を脚色せしこと明かなりといふべし。

風流夢浮橋六卷（自一一一頁至五七頁）　本書は、古手屋八郎兵衞が丹波屋おつまと無理心中せし巷說を綴りしものなれども、其事實は、從來口碑に傳はるのみにして、未だ古書に明記せしものありしを見ず。されば『南水漫遊』にも、元祿初年か或は享保二年の事にやと疑ひ、『實事譚』には、大坂說を非認して、寶曆年間江戸に在りし事と憶斷するに至れり。然るに『心中年鑑』には、元祿十五年七月の事とせり。何によりてかく記せしか、其出所を示さゞれば、知るに由なしといへども、亦『浪華劇場年代記』にも元祿十五年の事なり云々とあれば、大略この年代の事件と見て大差なかるべき歟。かゝれば本書の第六卷は、當時の風說を其まゝに綴りしものにして、八郎兵衞を彌兵衞とせしは、當時實名を記すを憚りての事なるべく、これによりて史實の闕漏を補ふに足るべし。

作者雨滴庵松林は、其傳未だ詳ならざれども、恐らくは西鶴門の俳諧師なるべし。元祿十六年の刊本なり。

當時心中に繼ぎて流行せしは、不義成敗の女敵討にして、『熊谷女編笠』『京縫鎖帷子』『雲州松江鱸』『女敵高麗茶碗』『亂脛三本鑓』等は此の部類に屬するものなり。就中『亂脛三本鑓』は近世文藝叢書小説部に、『熊谷女編笠』は帝國文庫中に收載せられたれば、爰に除く事とせり。

京縫鎖帷子四卷（自五八頁至七八頁）　本書は、森本東烏の作にして、因幡烏取藩臺所用人大藏彦八郎事中山傳左衛門が、女敵宮井傳右衛門を、京都堀川に於て討留し始末を脚色せしものなり。其事實は、『月堂見聞集』寶永三年六月七日の條に詳なり。

一因州鳥取松平左衛門殿に、大藏彦八郎と申臺所役人相勤罷在候處、去酉六月、主人參府に付供仕、江戸へ罷下り、當五月十五日鳥取へ下着仕候、留主の内女房たね、宮井傳右衛門と申者と密通仕候由、家中にて風聞仕、其上私妹くら幷たね妹ふう兩人相知候に付、早速吟味仕候へば、不義之段委細白狀仕候故、五月廿七日女房儀指殺、同廿九日組頭迄書置暇乞捨仕罷上り、同六月四日京着仕候而、右之趣昨日御斷申上候、右傳右衛門、下立賣通堀川東へ入角に住居仕候を見付、今朝五ッ過打留

申候、私父子儀去る六月より江戸に罷在、先月中旬に歸國仕候、外に親類も無御座候故、留主之内右くら、ふう度々異見仕候へ共、承引不仕候旨申候、私儀傳右衛門を見知り不申候に付、兩人の女を召連罷上り申候、

大藏彦八郎事　中山傳左衛門
家中伊丹甚太夫方に罷在候　大藏文七（十七歳）
傳左衛門妹　く（廿八歳）
鳥取正平屋與三右衛門妻にて當正月十九日暇取
たね妹　ふ（廿七歳）
家中田村折之助方に奉公致居申候
宮井傳右衛門（廿一歳）
女房　る（廿一歳）
傳右衛門父　清右衛門（六十二歳）
下人　七助
下女　なつ

右は御公儀へ書上げ之寫也、

これを本書と對照するに、其筋書に於て大差なく、殊に寶永三年六月七日の事を、同

年仲秋に刊行せしを見ても、現今の所謂三面記事に類似せるを知るべし。錦文流作の『熊谷女編笠』、近松門左衛門作の『堀川波の鼓』等も、亦此事件を脚色せしものなり。

女敵高麗茶碗三卷（自三三頁至三五〇頁）　雲州松江鱸三卷（自三五一頁至三七九頁）　二書ともに作者不詳なれども、出雲松江藩茶道役正井宗味が、女敵池田軍次と不義の妻とよとを、大坂高麗橋上に於て討取りし巷説を綴りしものなり。其事實は、『月堂見聞集』享保二年の條に、

一七月十七日夜五ッ時分、大坂高麗橋にて、妻敵討有之、雙方共雲州松平出羽守御家中、

妻敵　池田文次（近習中小姓　年廿四歳）
女　正井宗味妻　とよ（年廿六歳）
實夫　茶道役　正井宗味（年四十八歳）
とよ親　小林幸左衛門
幸左衛門子　同　彌市郎（年廿四歳）
宗味子三人　姉　く（年十三歳）
　　弟　鐵太郎（年十一歳）
　　妹　よそ（年八歳）

右は文次とよ兩人、六月八日に國元を欠落仕候而、同廿三日に大坂へ着、宗味は六月廿七日に江戸發足、七月十三日に大坂御奉行所へ相斷、同十七日討之、小林鐵太郎儀兩人之非道を怒り、宗味をすゝめて大坂へ同道仕、文次旅宿を尋出し、兩人をそびき欺き、方人顔して、宗味等ねらふ由を申、今夜の中に大坂をひらき、京都へもかくれ可申歟と諌む、兩人實と心得、高麗橋迄出る處を、宗味待かけ討之、文次が衣類は、越後ちゞみの帷子、黑繪萩の模樣、上帶黑繻子、下帶白縮緬、疵一ヶ所けさぎり、宗味は足に一ヶ所疵有、是は文次がとゞめをさし候時に、下よりなぐり候疵の由、彌市儀は兼て助太刀不叶故に、兩人相果候を見て、直に國元へ歸り候、鐵太郎は朋輩の玉井紹知預置、姉妹は祖父小林幸左衛門預り、

大坂御檢使　宗味大坂旅宿　小川甚右衛門殿　寺西市郎右衛門殿
天滿老松町　耕屋伊右衛門

文次大坂旅宿　本町絲屋町　紀伊國屋惣次郎

宗味儀、大坂御奉行所より出羽守殿大坂御屋敷留主居方へ引取候樣被仰付候へども、少々樣子有之候由にて承引無之故に、暫之内旅宿の町中へ預之の由、文次と

よ兩人の死骸は、一所に濱の寺へ埋む、

とあり、今二書を對照するに、其の發端に於て差違あるは、交通不便なる當時なれば、遠隔地の事を詳に知ること能はざりしに由るものなるべく、高麗茶碗卷末の切疵衣裳附の事實と異ならざるは、當時作者の目擊せしものなるべし。西澤一風作『亂脛三本鑓』近松門左衛門『槍權三重帷子』は、其の脚色に異同あれども、共に此の事件を綴りしものなり、

かく心中又は女敵討の如き、色道の沙汰に喧噪する太平の世の中なれば、天下の人心色慾の二道に嚮ひ、諸侯なほ富豪に面從するに至りしかば、町人の分限を打忘れて、豪奢を極めし果は、闕所追放の刑に處せられし者亦少からず、椀久の松山落籍を記せる『椀久一世物語』、淀屋の闕所始末を記せる『棠大門屋敷』、大黑屋の豪遊を描ける

『御入部伽羅女』、茨木屋の追放始末を記せる『傾城竈昭君』等は、此の種類に屬するものなれども、『棠大門屋敷』は、既に帝國文庫中に收載せられ、『椀久一世物語』と『傾城竈昭君』とは、百方搜索せしも其の所藏者發見せざりしを以て、本編には『御入部伽羅女』を其の代表作物として、揭載する事とせり。

御入部伽羅女六卷（自七九頁至一四三頁）　本書は其の自序に記せるが如く、京都の富商大黑屋九左衛門一代の榮華を敍する傍、忠兵衛刑後に於ける梅川の狀態、さては當時浪華に流行せし見世物等を交へて、戲作したるものなり。本書の主人公大黑屋は、一に富山とも云ひ、當時三井と比肩せし吳服屋なりし事は『好色入子枕』に、三井富山をさはがし、きれ〴〵を集め云々とあるにて知るべく、江戸本町一丁目に支店を設け、諸國に多く地所を有せし富商なりしが、三世九左衛門、天質豪放不羈にして、無暴に家業を擴張せしと、一擲千金の豪遊をなせしとにより、晚年破產して僧となりし事、『京鑑』及び『町人考見錄』等に見えたり。されば本書に七世とあるは誤りにして、三世九左衛門の榮華を寫せしものなるべし。作者湯漬甑水は、其の傳未だ詳ならず。寶永七

年の刊本なり。

かゝる富商等の榮華を見聞せし下民等は、歆羨の情に堪へず。さりとて俄に分限者となる手段もなければ、萬一の僥倖を冀ふ者多く、終に富籤の流行を來すに至れり、

富宮笥一卷自一四四頁至一四九頁　本書は、寶永三年より京都に於て、富籤流行の光景を戲作したるものにして、刊行年月を記さゝるも、恐らく寶永四年の版本なるべし。作者詳ならず。

斯の如く淫靡惰弱なる浮世草紙時代に在りても、尙ほ武士道の流れ絶えずして、元祿十四年に石井兄弟の仇討あり、翌十五年には、赤穗浪士の復讐ありて、遊惰武士を警醒し、天下の士氣を鼓舞せり。此の事件の事實小說に綴られしは、前者に『東海道敵討』あり、後者に『風流今平家』、『武道播磨石』、『今川一睡記』等あり。然れども皆既に覆刻せられたれば、本編には、著作年代やゝ晩れたれども『忠義太平記大全』を揭ぐる事とせり。

忠義太平記大全十二卷自二〇三頁至三三二頁　本書は、赤穗浪士の復讐事件を綴りしものにして、享保二年の版本なれば、事件を距ること實に十五年後の作なり。されば、これを事實小說とするは、やゝ失當なるやの觀あれども、前記の類書は、平家或は今川家の事に擬して、戲作せしものなれば、たゞ書中に其の事件を、仄せしに過ぎざるに反し、本書は年代やゝ晩れたれども、其の筋書精細を極め、事實と殆ど大差なく、後出の義士小說類は、皆本書を模倣せしを以て、特に收載する事とせり。

浮世草紙中の事實小說は、前記の外に八百屋お七、おさん茂兵衞、お夏清十郎、樽屋おせん等の事を記せる『好色五人女』、浪華五人男の刑死始末を記せる『達髮五人男』、白金の仇討を記せる『好色俗紫市川團十郎の横死を描ける『市川正德追善曾我』等あれど、追善曾我は既に新群書類從演劇部に、又『好色五人女』は、西鶴全集に收められ、他の二書は、其の所藏者不明なりしを以て、本編に收載すること能は

ざりしは遺憾なり。

當時是等の事實小說の刊行に對して、幕府の出版法令が、如何に規定せしやといふに、寛永年代より天和年間に至る迄は、「珍敷事致板行候はゞ、兩御番所え申上、御差圖次第に可仕候、若隱置候而新板開候者有之於は、御穿鑿之上急度可被仰付候、云々」（寛文十三年町觸）との如き、寛大なる規定なりしが、其の後密に出版せしもの多かりしにより、貞享元年に至り、「町中にてむさと仕たる小歌、或ははやり事は勿論、當座之替りたる事致板行賣候もの有之候、家主致吟味、何方にても左樣のもの、一切板行仕間敷候、御穿鑿之上賣候者は不及申、致板行候者迄、急度可申付候、云々」との町觸ありて、やゝ嚴重に取締られしも、密に法網を潛りて、刊行するの徒絶えざりしかば、元祿十一年二月及び正德三年閏五月にも、同文の町觸ありしのみならず、享保九年に至りては、「無筋噂事或は男女申合相果候等之事を、猥に致板行

又は、歌舞伎狂言等に作り候類過料、板行致候者も同斷」との禁令出たり、是と同時に町奉行所より、毎月與力同心を市中に派して、嚴密に書肆を檢擧せしむるに至りしかば、當時の巷說を綴りし事實小說は、これが爲に大打擊を受け、又振はず、終に再興の機を得ずして中絶するうち、文壇の中心地江戸に移り、從つて浮世草紙も亦自から廢絶するに至れり。かく文壇の中心地江戸に移りし後も、出版法令は依然として嚴酷なりしかば、讀本、洒落本、滑稽本に於ける事實小說は、他の種類の隆盛なるに反し、微々として振はず、僅に『操草紙』、『風來紅葉金唐革』、『川童一代噺』等の數種出版せられしのみ。尤も此の以外に『根無草』、『風流志道軒傳』、『當世虎之卷』、『妓者呼子鳥』等あり。又黃表紙本に『風流瀨川咄』を初め數種あれども、是等はたゞ事件を書中に仄せしに過ぎざれば、本篇には前記の三種を掲げて、其の他は總て除く事とせり。

操草紙五卷（自三八一頁至四〇三頁）　本書は、江戸名物として名高き冠髪香の本鋪、兩國橋畔五十嵐兵庫の妻が、其の妾を妬みて殺害せし事件を綴りしものにして、其の事實は、「街談錄」明和六年の條に、

五月廿三日、兩國五十嵐といへる髪の油店の妻、愛妾を妬みて殺害し、われも自害す、大に評判あり、堺町人形座にて、新淨璃瑠に取組、見る者多し、名題（上總國本妻　下總國忍妻）艶油戀の夜嵐、後に東金茂右衞門と改む。

とあり。本書に、五十嵐を五十屋、妻を妾に改めしは、憚る所ありしによるべく、結末おつや解脫の條は、當時淺草寺開帳の節、遊行上人龍燈を見給ひしとの噂高かりしを取入れしものにして、妾の名をおるんとせしは、同時代に高名なりし、踊子おるんの名をかりしものなり。明和八年の刊本なれども、作者淡海子は、何人の匿名なるや、未だ詳ならず。

風來紅葉金唐革一卷（自四〇四頁至四一〇頁）　本書は、卷末蜀山人（それの主人と匿名せり）の識語にある如く、風來山人平賀源内の事を綴りしものにして、當時化物屋敷との世評高かりし、神山檢校の舊宅に住居せし事より、エレキテル等を發明せし事を記せしは事實なれども、結末米

屋の丁稚の爲に密書を窺はれ、陰謀露顯して討手に取圍まれしが、役人の情により て、蝦夷へ落行く筋になせしは、『一話一言』平賀源内傳に、

安永八年己亥十一月廿日の夜、病狂喪心して人を殺し、（米屋の子なりと云）獄に下る、同十二月十八日病で獄中に死す、屍を從弟某に賜ふ、橋場總泉寺門内左に葬る、

とあるに相反し、源内蝦夷落說は、戲作者の慣用手段にして、奇を弄したるやの觀あれども、こは當時源内入牢の後、大老田沼主殿頭其の奇才を惜み、密に助命して蝦夷へ奔らしめしとの風說高かりしを綴りしものにして、この事のやゝ憑據あるは、『耳風集』『過眼錄』を初め、其他の雜著に、源内牢死非認說を載せしのみならず、其の遺骨を葬りしと稱せらるゝ總泉寺の墳墓も、實は其の遺愛の品を埋みし紀念碑なる事は、其墓碑の位置と、杉田玄白の墓誌銘に、

其諸姪相謀、斂君衣服履、以葬淺草總泉寺、

とあるとによりて明かなり。されば本書に據り更に一歩を進めて研究せば、庶幾くは源内傳に一生面を開くを得んか。本書の作者は不明なれども、源内の入獄後三年卽ち天明二年の刊本なり。

川童一代噺五卷（自四一一頁至四三七頁）　本書は、天明年間浪華に名高き崎人河太郎の惡戯を綴りしものなり。河太郎は通稱河内屋太郎兵衛と云ひ、大坂淡路町に住せし豪商なりしが、天明八年に歿せりといふ。一代の崎行頗る多かりしも、世俗筋目に無用の物品を贈答する弊を諷刺せんが爲に、日用缺くべからざる竿竹を贈りしの類にして、其の崎行多く訓誡の意を含めり。本書其の半面たる惡戯のみを記して、河太郎の本領を沒却せしは遺憾の事と云ふべし。作者後穿窟主人は、何人の匿名なるや詳ならず。寛政六年の刊本なり。

幕府の出版法令も、天明時代以後に至りては、嚴格と云はんより苛酷に失し、事實小説を綴りし戯作者、又之を刊行せし書肆にして、手鎖或は遠流の刑に處せられし者亦少からず。されば作家及び書肆等の大恐慌を來し、以後其の出版は殆ど絶無となるに至りしが、しかも世人の好奇心は、之が爲に益々盛なるに乘じ、射利の徒密に作家に囑して編述せしめ、之を貸本となして見料を貪りしも、法令益

益嚴にして、忽ち檢舉せられ、作者書肆は固より筆耕に至るまで、夫夫處刑せられたる事は、次に解題せんとする『觀延政命談』によりて、其の一斑を知るべし。

觀延政命談五卷（自四三八頁至五一六頁）　本書は、一名二重底享和文庫と云ひ、江戸谷中延命院の住職日道が生立より己が美貌を餌となし、院内に迷室を作りて、大奥を初め諸侯の奥女中と密會せしこと露顯し、享和三年死刑に處せられし始末を綴りしものなり。本書は刊本にあらず、當時貸本屋にて數部を複寫せしめ、顧客に廻覽せしものなりしが、此のこと間も無く發覺し、文化二年に至り、作者及び其連類者一同處刑せられたり。『開版指針』に、

戸田采女正殿御差圖、

此者儀は元奥御右筆仲澤達之助方に侍奉公致居候者　牛込中里村町家主喜右衛門方に居候　品田郡太

其方儀、主人供先等に而及承候迚、去々亥年御仕置に相成候、谷中延命院日道不如法之始末、御仕置等之次第、不取留儀をも取交、全部十六冊之讀本に綴、觀延政命談と外題を認、貸本渡世之者共へ賣渡候段、武家方勤中之儀、別而不屆に付江戸拂申

付之、

作者處刑と同時に、通新石町次助店喜藏外十四人は、貸本とせし廉により手鎖、又西丸御書院番頭山口和泉守組松波權平家來田中作彌外二人は、筆耕せし廉により押込の申渡ありたり。この處刑の他の例に比してやゝ苛酷なりしは、やがて本書の價値ある所以にして、多少の潤飾はあれ、其の筋書は事實と大差なきが上、大奥女中の醜態を憚る事なく曝露せしを以てなり。

斯の如く天明年代以後に於ける事實、小說は、其の刊寫たるを問はず、幕府の嚴禁する所となり、偶々法網を潛るの徒あれば、忽ち檢擧せられ、刑に處せられしより、文化年代以後に至りては、作家亦新事件に筆を採る者無く、全く剿絶して明治維新に至れり。

本編編纂の際、永田好三郎氏は、珍藏の『諸國心中女』を貸與せられ、又三田村玄龍氏は、材料に就て敎示せられたること多し、爰に謹て謝意を表す。

大正三年三月

朝倉無聲識

徳川文藝類聚第一　事實小說

目次

	頁
福齋物語	一
風流夢浮橋	一一
京縫鎖帷子	五八
御入部伽羅女	七九
富宮笥	一四四
諸國心中女	一五〇
忠義太平記大全	二〇三
女敵高麗茶碗	三三三

目次

雲州松江の鱸……三五一
操草紙……三八〇
風來紅葉金唐革……四〇四
川童一代噺……四一一
觀延政命談……四三八

目次終

徳川文藝類聚第一

事實小說

福齋物語

そも〳〵上京に、福齋といふやぶくすしのあり、友だちきたり、四方山の物がたりしをはり、たはむれいひけるは、福齋くすしをめされ、何ほど人殺させたまふ、不運なる者御身の藥を呑て、ひほうの死を致す事のむざんさよ、福齋申され候は、我等の藥にていまだ人を殺たる事なし、其故は、藥三貼まで呑人なく、能醫師に替申と語ける、友達のいひけるは、醫師になる人は、若き時より學文して、よのつね物をしらねば、脈とる事ならず、物をしりてだに上手下手の有、御身の醫書は、かたかな豆がなに書たり、脈をば何ととらせ候ぞ、福齋恥敷候へども、みやくの事すこしもぞんせず候、しかたにてこばし、長胴服に角頭巾、わざとおほへいにして、そろ〳〵揉手をいたし、頭をかたぶけ、脈をとり鼻聲をつくり、さて病の次第を、物しりぶりに問たづね、車びしの十三ほうといふ物の本にて藥をあたへ候、きくともたゝるともしらず、三貼呑人なきとぞ語ける、友達申けるは、それにてかやうの居なしはれき〳〵にて候、福齋のいはく、我等丸藥はやり、それにて醫師のまね致候、神仙解毒、保童圓、摩積圓、紫元子、五香に名をとり申候、友だち申けるは、福齋は藥の上書、はじめて呑人にても、加減同銘と被レ成候、それにて藥を人の呑ぬかとぞむじ候、向後は御藥とばかり能候べし、福齋醫師めされ候、冥加のために藥師しんがふあれかし、醫師はやり申べきと申されける、福齋もさやうに内々ぞんじ候、某生國いなばの國けたの郡の者なり、藥師も因幡の國の海中へ浮出たまひ、王城へ來りましますゆへ、因幡堂と申よし、御本尊などか御納受なからんとて、則寛永二十年正月十二日、參詣をいたし、佛前にむかひ、南無藥師、瑠璃光如來、我此名號、一經其耳、衆病悉除、身心安樂と廻向して、御堂に通夜をいたしける、夜更人しづま

り、御堂の傍震動す、ふしぎやとおもひ燈火のかげより見れば、鼠牛寅さま〴〵の生類を、頭にいたゞく者なみゐたり、おそろしく氣も魂も身にそはずまもり居る所に、鼠を頭にいたゞきたる老人ひとり出、吾はこれ本地金剛夜叉明王の化身也、藥師十二神の時は、宮毘羅大將とあらはれ、大黑天に使申ときは、則ねずみなり、唯今十二神おの〳〵會合させ申事別の儀にあらず、藥師へ訴訟申あげ度事御座候につき、御談合致べきためにて候、それ近年米高直にありといへども、取分寛永十八年の暮より、二十年の春まで高直にて、天下飢饉して、商賣人諸職人京中つまり、洛中のありさま見れば、乞食のいづる事、羽蟻の涌がごとし、路頭に死する事、水にひつまる魚のごとく、洛中にみてる貧人は、迷途にきく餓鬼道のごとし、辻々路頭に死する者その數をしらず、家々の門前にひとりかたり貧人のたゝぬ門もなし、町中飢饉なれば、誰慈悲する人もなかりける、しかれば我等の眷屬ねずみなどのしよくすべき物なし、櫃唐櫃をかぶらんも齒節に力なし、先年上樣より洛中へ、御慈悲の御借米下され、町中に米おほくありて、鼠の一門樂々と俵のかげに住、榮花いたしつるに、今は引替洛中に俵つみをくかたもなし、あまつさへ昨日今日まで祕藏せし猫をも扶持していかゞせんとて、追はなしければ、猫も飢饉にのぞみ、鼠をたづねありきければ、藏ちやうだい庭臺所へ出る事もならず、天井なげしけたうつばりなどへ出といへども、四足にちからなくふるひ落、猫にとらはれあるひは腰脚を打むなしくなる、會者定離の習ひ、生者必滅のことはりとは知ながら、生類の中にいま我ほどくるしきものなし、いにしへはねずみの婚いりとて、果報の者と世にいはれ、かく成行事のうらめしさよ、此よし藥師へ訴訟申度とぞ申されけれ、十二神の第二伐折羅大將とて、牛のかたちをいたゞき弓矢を持たる老人、すゝみいで申されけるは、むかし飢饉有しとき、訴訟めされたる例の候也、例なき事ならば、新義なる事むやく成とぞ申されけれ、然所へ十二神の第三迷企羅大將と申て、寅のかたちをいたゞき鉾をもち老人罷出、新義の事成とも事のしなによるべしと申されける、座中尤とみな同音にぞ申けれ、宮毘羅大將、さあらば某承及ところ申べし、人王三十二代用明天王の御宇より

已來代々の記錄、ねずみの頭領かくれ里と申所に御座候、飢饉餓死の事、

人王五十九代　宇多院御宇　寛平元年
人王八十一代　安德天皇御宇　養和元年
人王一百一代　後小松院御宇　應永十三年
人王一百三代　後花園御宇　文安五年
人王一百五代　後柏原御宇　永正元年
同　永正十五年

夫一千八百年已來の事、ねずみの記錄に書付申、飢饉餓死かくのごとくありといへどもうらむべきかたなし、安德天皇の御宇、養和の飢饉は、五穀の種をたち、金銀を枕として餓しする、粟をもとめて砂金と計替たるよし、一條より九條まで、洛中の路頭に死するもの、三月四月兩月の內に、四萬二千三百人といへり、河原邊土に死する者、幾千萬の數しらず、仁和寺隆曉法印のしるせりと聞、今度の飢饉國土に米みちながら、もとむべき金銀つきたり、京の町中に、每年米六十萬石を以て飯米とす、寛永十八年暮より二十年の春まで、米一石につきて銀子廿匁たかくしてみれば、一萬八千貫目、洛中の者くいついやしける、あるひは科足一貫二貫を種として、棒を荷ひ連尺肩にかける者、古錢新錢の替りに心うくおもひ、やう〳〵前の仕合にならんとせしに、米たかくなり、朝な夕なのけぶり絕々なり、商賣人、職人、町人、百姓、社家、出家までとぼしく、或は飢餓または餓死、われらの眷屬ねずみまで飢饉にをよぶ、この過分の金銀はいづちに納りぬらん、浦山しき事やといはぬ人こそなかりけれ、鼠いにしへの百が十にたらずとぞ申けれ、かゝりける所に末座より、猿のかたちをいただき劔を持、摩虎羅大將とてさかしげなる仁いでたまひ、宮毘羅大將に、何をなげき候ぞ、むかしより京童のいふ事、後におもひあたると聞、文德天皇の御宇天安の比、大枝をこえて〳〵といふ事はやりける、惟高惟仁御兄弟御位あらそひたまひ、御弟これひらのみこと、天安二年の十一月七日に御卽位ありて、人王五十六代淸和天皇と申奉る、惟高のみこひえい山のふもと小野といふ所へ、御幸ならせおはしますよし、大枝をこえてといひし事、後に思ひあはせたりといへり、慶長十八年の秋の比より、京童の、門や木戸や矢倉やと云はやりければ、十九年の暮に秀賴公むほんくわたて、俄に

門木戸矢倉を作りける、是も後におもひあはせけるよし、また寛永年中に、人の身に瘡のいでき、其名をたれいふともなしひぜん瘡といふ、見る人聞人ひぜんおこりたるといはぬ者なし、同じく寛永十四年に、西國肥前に吉利支丹といふ邪法の一揆おこり、武士うけたまはりて害レ之、これも後におもひあはせける、寛永十八年の比、御法度に何を仰いださるゝ、かを仰つけらるゝとおぢおそれて、世をせばく色々まどしき事をいひければ、其ごとくをのづから米たかく、飢饉の世となる、この比はまたよござりましやうなふと云事はやりければ、頓て目出度よき事のあるべし、待たまへとぞ申されけれ、しかる所に男一人きたり、十二神の前に座し、をの〳〵我をいかなる者とおぼしめす、三國にかくれもなき大黒と云者にて候、本地大聖不動明王の分身、福祿壽または布袋、吾朝にては大黒とあらはれ、七珍萬寶をこの槌にて打出、衆生に福をあたへ、甲子の日を緣日と定、おんまかぎやらやそはかと人にうやまはれ、みせ棚のわき、藏ちやうだいを住家と致、その家をまもる、使者はねずみなり、十二神の時は宮毘羅大將とて、鼠のかたちいたゞき、左の手に如意寶珠を捧、是みな眷屬に、男ねずみ、女ねずみ、白鼠、野ねずみ、小鼠、廿日ねずみ、こねら、おねら、おねの子、産屋のうちの赤鼠にいたるまで、みな是飢饉にをよび申事を、藥師へをの〳〵をたのみ、宮毘羅大將訴訟いたすべきために總中よせ申談合あるよしうけたまはり、我等罷出申候、藥師へ仰上られ候時、幸ねずみは大黒の使者なれば、大黒へ申せと仰出され候はゞ、かさねて申あぐべき便なし、結句それがし伺公いたし、直面にこのむね申上べく候、をの〳〵御肝煎の段かたじけなく候とて、大黒は罷たち、藥師のみづしをほと〳〵と扣たまふ、藥師出させたまひ、その以後久しく面談にあたはず候、某もえい山中堂の藥師へ、移徙年頭ふさねて御禮にまいり、昨日下山いたし申候、大黒は日比肥滿なされ候が、殊の外に痩候て、小糠くさくならせたまふ事、何たる故にて候ぞ、大黒のいはく、今の飢饉につき、宮毘羅大將の眷屬ねずみ總中より、我等賴まれ伺公いたし候、この度飢饉に及申輩、御本尊樣へ訴訟申あげ、御慈悲をめしくわへられ候やうにと、某たのまれ參候、我等も此體に痩おとろへ、御恥敷御座候へども、聞もあ

はれ成まゝに置出申候、藥師宣ふ、大黒天は日比の槌うたせ候方便は如何めされ候や、常にしはき福天とうけたまはる、たくはへおかれたる物、このたびほどこしたまへ、大黒のいはく、つねにたくわへをき申候ゆへに、今まで命ながらへ御前へもまかり出申候、世間飢饉になり、我等にぶく佛餉をくれ申者なし、あるものをのが食するはつを、毎日必某にそなへ申候、これも朝夕こぬか計くれ申候、それを某食いたし候也、よく御かぎしりなされ申候、日本一の御鼻にて候、犬ならば逸物とてうほう致候べし、えい山中堂の御藥師も、某よく御ぞんじなされ候、日枝山を傳敎大師、桓武天皇延曆の比御建立なされ、比叡山と號したまふ時、傳敎大師われらの像を、三面の大黒につくりたまひし身なれども、堂宮とてもいまだ一宇も持申さで、在家のみせ棚のわき、藏ちやうだいを住家と致申なり、御登山の砌御とり合たのみたてまつる、迚も慮外のつゐでに、某に灸を御おろし被二成下一候へかし、達者にまかりなり候て、うち手の小槌にて米打いだし申候べし、藥師宣、まことに草ばへよき時分にて候とて、肩井、風門、膏肓、曲口におろしたまふ、大黒さて〳〵冥加なき御事にて候、何かな御禮申度候へども、袋の内つかひきり、袋も質にをき、やう〳〵この槌は杖とぞんじ、腕いたみ候へども抱ありき申候、さて〳〵米國土にみち〳〵て有ながら、飢饉にをよび申事いかなるゆへにて候や、藥師宣、それにつき兩說の沙汰あり、いやしき愚者の申ことには、是は知行とりの被レ成事なり、米たくはへ藏につめをき虫を養、または朽て土になしたまふ、侍は物をたくはへぬ物と聞に、利分やすき借銀なされ、米たばひをきしめ賣被レ成候を、また隣國に聞、德分のあるゆへいづくもおなじ事に高直になり、天下太平なれば、猶さぶらひ慾心ありて如レ此なり、人間は申におよばず、人輪にちかき生類牛馬犬猫鼠までも飢饉に成、侍の金銀わきて悅び候へば、世界の者かなしみ死る、ことの外なる殺生をあそばす事やと下々は申ける、智ある人の沙汰いたすは、飢饉と云事天地人の三災とて、三つよりおこる者也、今の飢饉は三つのわざはひにあらず、人間驕を天道にくみたまふ、その天罰のなす所なり、それ天はみてるをかきたまふ、金銀もつ所は過去のしゆく緣なり、賤身ながらも金銀もちたる

者は、己が氏系圖をもわすれ、家れき〳〵につくり、切石を城郭のごとくつみ、屋敷をたかく、三階藏居間をから木のほり物に、梨地蒔繪を書つくし、庭のつき山泉水に海石山石を立ならべ、鯉鮒などをはなしをき、座敷數寄屋も金の間に瓔珞をかけ、常樂我淨の風ふけば、むみやう長夜の夢を覺し、庭の植木のはへしげり、入住玄門の鶯下化衆生を囀り、異國の繪づくし吾朝の古筆、代々帝の御筆跡、御公家衆の御短冊、金の屏風に押ならべ、をのが枕にたてそへて冥加なき振舞、いにしへけさまもりにだにも、もとめかねぬる綾錦を、はき物などのへりはな緒につけ榮華にほこれば、長生のしたき計が苦と成て、生老病死をかなしみて、四足の物を明暮と養生としては喰けり、金もちぬれば公儀して、御公家がたへも指出て、人をけがせど憚ず、かたじけなくも御免許の天子の御札打人は、冥加のためをおもへかし飢饉神に相ひ飢饉におよぶ、貧人ども堂の縁にて、後悔語りいたしける、我は田舍の者なるが、親のれき〳〵代を渡し、山林田畠おほくもち、牛馬下人をあまたもち、若時より樂をして、耕作がたへはをもむかで、小鳥をねらい網をもち野山にくらし、有時はまた河がりに身をやつし、早稻をかりては餅につき、おくてを刈ては酒に作り、商賣物はなけれども、立市ごとにかけもせず、酒肴をば求をき、御年貢まへに成ぬれば、四わり五わりの米かりて、つもればつゐに重代の、田地も山も賣すて〳〵、人のやしきにこやをかけ、在所の者のはごくみにて、今まで命ながらへける、遠國他國も飢饉して、木の味をひろい芹を摘、葛の根をほり、牛馬のごとく草を喰、のこせる春の物種を、御年貢がたへ指上れば、あすの餌をもあんじつゝ、牛馬うらんも人かはず、常に扶持する百姓も、はごくみうけたる某も、友なひ宮古へのぼり來て、乞食するこそかなしけれ、また若き男の物がたり、我は上京にて人にしられし親をもち、おさなき時より樂をして、謠や舞や鞠をけて、あそぶに隙やなかりける、春にもなれば東山、祇園清水四條河原や下京に、夜晝あかし暮しける、夏は丸山雙林寺、川狩相撲に舟あそび、秋は小鳥をねらひ紅葉見に、嵯峨や高雄にとまりがけ、冬は置火に高ごたつ、段子の蒲團を打かけて、ねながら夜食のじきだくみ、りんずやさやにはぶたへを、けんほう染に數をして、うらに紅

梅もみをつけ、花かいらぎの鮫ざやに、金鍔大小うち違、高麗ざしの木綿たび、おとがい頭巾で顔かくし、刑部梨地の印籠に、枝のさご樹に丸砂瑚樹、さげたる事をひき替、ばいの掛羅にてめんつをさげ、やぶれぬこもきてうれしがる、破笠にて去年までぬめりし、四條川原にたち出て、施行うくるぞ無念なれ、樂する者の身の行衛、京も田舍もおなじ事とぞ語りけれ、また歳のころ六十計の男、とをき田舍の者と見え、なまり聲にて、我國里な名字をばかたらずして、をの〳〵の物語くわしくきけば、一度樂をめされ、浦山敷もぞんずる也、異國大國うへたかき、御身も樂に侈人、天のにくみを御うけなされ候者、玄宗皇帝三千人の后をあつめ置たまふ、皇后淑妃とて二人を寵愛なされ、四海の政をもおこたりたまふゆへ、天にくみたまふ、二人の后もうせたまふ、其後玄宗は、御弟寧王の后にむかへたまふ楊貴妃をうばひとり、いにしへの皇后淑妃にまさり寵愛あり、楊貴妃が兄楊國忠を召出、上將軍の司下さる、安祿山は是をくやむ、ある時楊國忠に五十萬騎の兵さし添、敵をうたんがために指つかはしける、楊國忠大荒が峯に陣をとり、一戰も戰はずにげて、宮古へ歸らん事口惜くおもひ、味方一萬騎が首をきり、敵の首と披露してさらす、うたれぬる者の子孫是をうらみ、安祿山をすゝめ大將とし、楊國忠をうたんとよせ、楊貴妃をがひし楊國忠もうせ、玄宗皇帝の御代みだれける、君は船臣は水といへり、水はよく船を浮ぶものなれども、船を覆も水なり、天道ににくまれぬれば、あしき臣下もよきものとおもへり、楊國忠を上將軍になされしゆへなりときこえたり、また殷の紂王とて、榮華にほこりたまふ惡王あり、世界に我にそむけるものなし、天は我にそむく、雨風こゝろのまゝになき事をにくむ、かゝりけるところに妲己といふ美人を寵愛して、多の民をうしなへり、天罰のがれがたし、芥といふ所にて雷のためにうせぬ、秦の始皇帝御身樂におごり、內裏をまはり三百七十里につくり、あくをつくし儒書三千七百六十餘卷を燒すて、國中の武具刀劔をやき捨、榮花を道として政もおこたりたまふ、この上には生老病死のくるしみをなげき、蓬萊の島にある不老不死の藥をもとむるに、海まん〳〵と尋るにむなしくかへる、龍神のわざならんといかりたまふ、龍神鮫大魚とあらはれ、海上にう

かびたまへば、始皇帝百千の毒の矢にて射殺したまふ、その夜始皇帝夢に龍神と戰と御らんじたまひ、驚むなしくなりたまふ、運命天にありといふ事、わきまゑたまはぬこそうたてけれ、あるとき邯鄲といふ所へ、天よりまはり十二丈四方の大石落、一句の文字あり、秦の代ほろび漢の代になるべしと書たり、始皇帝きこしめし、石は天より降、書付は人のなす所なるべし、四方十里が内の者、老若男女一人ものこさず首を切たまふ、道にそむける人貴も賤もおなじ、おごるもの天にくみたまふと見へたり、ありがたや日本は神國といひ、政正しく天と君との惠にて、まことにつきせぬ御代こそ目出度けれ、むかし不思儀あり、文永二年のとし、大元より吾朝へ、兵船七萬餘艘に人數三百七十萬騎、津々浦々より船をいだし、大元の兵船日本の地につかんとせしに、五島よりはかたの浦まで、潮ひき陸地になりて、大元の兵ほろぶ、弘安四年のとし異國の夷、いまの吉利支丹兵船四千艘、人數二十四萬吾朝へ來、七月朔日に神風ふき出、一人も不レ殘海中にしづむ、開闢より已來、大元より吾朝へ七度きたるといへども、一度も日ほんの地へあがり得ず、勢州鈴鹿山に鬼神住よし君きこしめし、田村征夷將軍は蒙レ勅、觀音のちからを得て、これをほろぼしたまふ、武藏の國美田の住人渡邊のつなは、一條戻橋にて鬼神の手をきる、是も八幡大菩薩のちからをそへたまひてうつ、鬘切といふ名劔を指ゆへなりと語るとぞ宣けれ、大黑のいはく、天下太平に治り人あつくなるに、四年五年の古米あり、その故飢饉の代となる、目出度御代にかやうの事、年代記などに書とどめん事のうらめしさよ、京田舍武家百姓町人、天正以前の身持いたすならば、くるしむ事はあるまじ、ゆめ〳〵侈事なかれ、藥師の宣、病樂よりおこる、愚者も賤も金銀はもてり、かねを持ものをへつらへる者は智者といひ、必これを敬ひもちゆるを以て、その身おごり藥をこのむ、自病に痰氣のつき筋氣を煩ふ、身にあまり樂をするもの、六十の齡をおもつ人なしと見へたり、長命なる人は、是智者なり、智有人は自病ある事まれなり、洛中に醫師多ありて、病者短命の人あり、田舍には醫師なく身に衣うすく、食に萬草を喰、山野に苦勞して長命の翁あり、天は君をまもりたまふ、君は民をまもりたまふ、政たゞしければ四海安全なり、道

をやぶり侈樂をこのむ者、天道にくみたまふ、天にくみたまふ身は佛神もはなしたまふ、佛神に捨られたる者、現世はかくのごとく、後世も賴あらず、あはれなるうき世かな、河原や町の門かげに、親をすて子を捨、その數さらにかぎりもなし、おやとなり子となるも百生の緣ときく、貽内より十三佛の一滴とまると守護し、三十八なぬかにて誕生す、捨子あつまり鳴聲、迷途にて六道能化地藏菩薩にとりつきて、父こひし母こひしやと鳴聲も、是にはいかでまさるべし、上はうちやうでん、下は阿鼻金輪際までもきこゆべし、此中くらまの毘沙門天にまいり、飢饉に及ものどもに福をあたへたまへと申に、毘沙門天の福と申は、虛空にほどこしまたはぬよし、十種の誓願五種の福と申て、

第一に無盡の福、　第二に衆人愛敬の福、
第三に大智惠福、　第四に長命の福、
第五に眷屬衆多福、　第六に勝軍の福、
第七に田畠の福、　第八に蠶養如意福、
第九に善智識福、　第十に佛果大菩提福、

とてあり、この福まいにち燒すてたまへども、あたへ給ふべき衆生なし、毘沙門天の福と申は、一には父母孝養のめたのぐわん、二には功德善根のための願、三には國土豐饒のための願、四には無上菩提のための願、かくのごとく福ありといへども、今餓にのぞむとて中々福をあたへたまふ事あるまじとこそ仰けれ、唯今おもひ出たる事あり、地藏菩薩はもろ〳〵の菩薩のうちに、慈悲第一なる菩薩なれ、佉羅陀山にて大比丘一萬二千菩薩、三萬六千人諸天夜叉の中にて說たまふ、經にいはく、十種の福あり、一には女人泰產、二には身根具足、三には衆病悉除、四には壽命長遠、五には聰明智惠、六には財寶盈溢、七には衆人愛敬、八には穀米成熟、九には神明加護、十には證大菩提、又誓願に、一には風雨隨時、二には他國不起、三には自界不叛、四には日月不蝕、五には星宿不變、六には鬼神不來、七には飢饉不發、八には人民無病と說たまふ、此願いかでむなしからんや、近邊の地藏へ觸狀をまはし、このむね申入候べし、

御菩薩池地藏、　山科六角地藏、
福見油掛地藏、　桂川島地藏、
常磐要地藏、　鳥羽地藏、

壬生地藏、　無苦花地藏、
子安地藏、　腹帶地藏、
目疾地藏、　大江山地藏、
矢田地藏、

をの〳〵へ申入ば、飢饉神の祟をもやめたまひ、五穀成熟していよ〳〵天下太平に、天魔の障碍なく、上一人より下萬民にいたるまで、あまねく衆生まもりたすけたまふべし、相かまへて〳〵、向後樂をこのみをごる事あるまじ、侈者天にくみたまふ、天罰のがれがたしと宣ひける、大黑のいはく、爰にふしぎなる物語の候、都一條の西鏡石町の邊に、貧なる者母をもち、常に孝行なる事かぎりなし、父のをんは山のごとし、母のをんは大海よりふかしどうけたまはる、父母赤白二滯和合して人となる、まことに海山はかぎりあらんと、かう〳〵致といへども、家まづしければおもふまゝにあらず、我うへても母をはごくみ申所に米高なり、今この飢饉にあはせ申事をかなしみ、家財をうりてやしなひたてまつる、常にかずなき家財なれば、ほどなく家財賣つくし、如何は致べしやとあんじ煩ひける所に、川原ぶしんと名づけ、洛中の貧人に御ふちかたを下されける、おや孝行なる男、誠にかたじけなくおもひ砂を掘はこぶ所に、銀子過分にありて是をひろひ、おやをこゝろのまゝに養ひたてまつる、是天道よりあたへたまふと、見る人聞者ありがたきとも中々いはぬ人こそなかりけれ、むかしも今も貴もいやしきも道をやぶらず、親孝行なるものには天の惠ありとぞおもひけれ、藥師宣、宮毘羅大將眷屬のねずみ共へ、このよし能々申付られ候べし、人の祕藏の物大事の物、ゆめ〳〵かぶり喰事あるべからず、正直ならば天よりあたへあり、非道なるねずみには、世界に五穀みち〳〵たりといふも飢饉に及べし、このむね申つけらるべし、大黑おほせうけたまはり、鼠の總中かくれ里の鼠、おるひは一夜の旅のねずみも、此旨相心得べし、若右の趣相背ねずみこれあるにおゐては、猫鼬に申付、急度曲事にをこなはるべき者也、仍如件、

寛永二十年二月日　　大黑判

福齋物語終

風流夢浮橋序

春は華、秋は難波のよしあしを目に遮にまかせて、彼の分法師が硯の海、唐の揚雄が書殘したる筆のはやしに便て、予がなぐさみの睡覺しに書續れば、終に六つの文とはなりぬ、世のあざけりをおもはぬも我ながら笑止、

雨滴庵
松　林　印

風流夢浮橋目錄

緣の綱切ても切れぬ堀江の心中、

一之卷
一、黑谷門前が戀の始
「急なときには、こちき坊主も戀の草結、言葉に腰をぬかす水茶や、
二、在原寺觀音の夢想
「信實のねがひは陰陽の神感、
三、歸花は今樣の紅裏
「かしこ過たる腰もとの顏、戀の氣をさほすたしなみの伽羅、
四、時華出は女の歌書讀
「夢想のあふた伊勢物語の講釋、物のいはれぬ戀の中宿、
二之卷
一、別はつらき難波緣組
「忍其夜にあぐみしは横堀、印にかけし大はゞのしゆすの帶、
二、惡性金は戀病の內藏
「一ぷくでなをす傾城のごく、しんさうざしきを逸子太鼓の日拍子、
三、心中の見所は揚屋の口切
「夜中のさわぎは寐みゝに盜人、願書一通言分の眞中、

四、口のさがなき輪の物ざた
「哀や戀のはきだめは死出の山、一通の書おきは戀の增錢、

三之卷
一、無常を忘るゝ四條の水
「むごい程似た野郎の顏、夢中に見ゆる男女幽靈、
二、祇園の大寄歸の通路
「八幡や二階は無常のたゞ中、
三、八坂の遊幸神の引合
「ちやうちんで知るゝ笹やが心中、聞に物うき白人の咄、
四、鐘木町は口說の名物
「戸たゝく音はいもせの山颪、うその實はおそろしい起請、

四之卷
一、咄の多飾萬船の乘合
「いまは賴もなき跡の佛事、おかしきこと船中のばくち、
二、渡の種は墨染の振袖
「戀のむかしは香包の二つ紋、
三、うらみも戀も紙子一官
「わりなきいもせの中垣は古むしろ、人目をはぢぬ傾城の心中、
四、むかし戀しき時の花賣
「難波の輪は色のみなと、ふるひなじみは結柴小紋のぬのこ、

五之卷
一、廻逢しは相肩の友
「雪降の大盡はうらやましき顏、
二、待間一睡かんたんの枕
「いなりの茶屋ほむかしばなし、無色の酒は氣のはらぬ物、
三、むかしをあらはす實の心
「扨も立たり渡部ばしの高札、證據に讀し傾城の文、
四、堀江の瀨ぶみは因果の緣
「物はいわねどかたみの目貫。むかしに替る時々の姿、

六之卷
一、戀は物うき二度の勘當
「さつさつの聲にも通ふ堀江の心、色にせかるゝ晦日切の算用、
二、路銀は姥が情の旅立
「兄弟は心ざしの小判、十兩やるは信實のなさけ、
三、六つの袂のぬるゝ四橋
「みゝにこたへしてうちやくの音、人の心のおくのしれぬせいし、

風流夢浮橋目錄終

風流夢浮橋卷之一

一、黑谷の門前が戀の始

男は江戸、花は吉野、色は都の眞中に浮世の苦勞を仕まふたやうになつて、新在家の邊に大名かし仕て、空算用に積ても、一とせ利銀八百兩は慥にてごりの美濃屋子仙とて、一子を深六ことし十九をとこ盛、かたい親父のくせとして、小遣がね一錢もわたさず、されどもふたをやの仕合は、東西のあそび所ゑはのぞきもせず、心ざしのやさしく敷島のみちに心を寄、四季のかわり世の轉變たな心の內に納め、見ぬよの人を友として、さてもよひ老たちと、言折からは二月の十五日、けふは釋尊の御入滅、ねはんぞう拜まんと、黑谷の方へ心ざし、荒神の川原をひがし向になつて聖護院の森、たばこすひ付ながら直に岡野へたちこゑしに、老若の貴賤をびたゞしく行かふうちに、向より取々の評判、いまの娘は如何なる人の御息女、みやこ廣しと言どもまた有まじきと、鐘木杖のをやぢ立まで、ひたいにしはよせるもをかし、漸々黑門の內あみだ堂左にみやり、爰ぞ熊谷蓮性坊がざぜん堂なりと、右のかたを見れば、その御よはいも二九にはたらぬ御顏ばせ、あやめ染の大振そで、御所ぬり笠に淺き紐、ちやじゆすの帶引しめ給ふよそをひ、さながらてゐらずの御息女と見すきて、おくゆかしきはなさけらしき尻目遣、をち腰本二三にん取まわし、はるかのあとに久三が茶辨當かたげて行なご見よげにて、戀の重荷のをき所、只うか〳〵と御跡を、目のとゞく程見をくりて、長性院と言る寺の門前にたゝずみ、心をなやむ折節、南無阿彌陀佛〳〵〳〵と、こん〳〵のかねをちからに行木の人、おなさけ賴むしろの上に、なかき日をくらすも身すぎぞや、いまのうきよは念佛より小錢のとれるは色の道、源六主從門前にたたずみしを、かのせんもんかねたゝきながら、若旦那の御評判は、いまの娘のことならん、あれは三とせ以前より、此あたり岡崎とやらんに引込給ふ、奧州浪人衆の御息女、うつくしい生つきにて、命懸の戀病は數かぎりはござりませぬ、去程にうきよはまゝならぬこと、其浪人はいかいことの金持にて、むすめのかたちもいりませぬ、わしがむすめがあれ程の器量に生

付と、年寄までかねもたゝかず、樂々とくらすにと、述懷咄になるをよき幸と、かのぜんもんにちかづき、扨其浪人衆のけめうは、何と言ぞととへば、浦上玄番殿と語ければ、扨氣のかろき坊主目と、おあし澤山にとらせ、足ばやになり下岡崎へ立越、玄番殿の屋敷是なりと、物かなしく見入て、はや歸を催せしに、小者の關助、けふはのどかに候へば、是より祇園御參詣あそばせと、言をちからに祇園ばやし、かなたこなたとさまよへども、源六はいとゞおもひのはれまなきむねのけむり、俄に心地なやましく茶見せに腰かけ、香せん湯心よく呑ければ、ちと心もわつさりとして、はやしのうちの一重櫻、所々に火とぼしたる風情、猶見所多きに、咲ときは物の數にもあらぬとの詠歌、無下なる言の葉と獨無常を觀じ、四方をながめしに、何事もいざ白雲の霞かゝれるごときのかうせい紙に歌を書、茶棚のうちにさし入有を手にとり見れば、

七とせを過し今宵のかなしさも
　袖のなみだはかわらざりけり

と哀なる言の葉を讀しに、是はととへばかの水茶屋の女、しばしうつむきこたへかね、なみだぐみ云やう、七とせ過しきのふの夜、我こははづかしながら、よそならぬ御方みまかり給ひ、つくゞくとおもひ出し、月も日もおなじ雲井とながむれど、其方計かわりはてたる事よと、ひたすら哀もやるかたなく、腰をれながらせめてなき人の手向にもと、跡はこゑもふるひ物をもいはず、打しをれたる風情、見るににくげなき生付、其年も三十字にはたらぬと覺、猶しも道理とふかく感、余所のあわれになみだもとゞまらず、暫して、實二世とかわせし夫婦の中、御なげきはことはり、我々とても御覽のごとく、いまだ若きの身なれども、戀と言くせものに心をうばわれ、もうしうの海にしづみ、輪廻の波に漂こと、先にはなし給ふ御身の戀のくさむすび、おもひの種のはじまりも、わが身の上にくらべ、さきの世までおもひ過させ、梵腦則ぼだいと佛のとき給ふこと是なりと、いま身の上におもひあわされ候へども、さすが梵夫のかなしさは、兎に角忌れがたくさむらふと、黑谷のことありのまゝに語ければ、かの女なみだぐみ、扨は玄番樣のお姫さまにて候かや、わたくし親は代々の御家賴なれども、此十ケ年いぜん不慮に御勘當かうむり、其とし の春秋も

立やたゝずの霜月に終に相果、母には我幼少にてをくれまいらせ候て、二たりの親をさきだてゝ、其時のかなしさ、何と成行べきとおもひ候へども、死にもやられぬ身にしあれば、兎やかくいたせしうち、なき人をちらと見るより戀ぐさの、葉末通りし御心の情により、四季の替りも有明の、月の詠もさもしからず暮し侍りしに、なき人去給ひて後、かやうにてなれぬわざ、淺しき御ことにて身命をつなぎ兼ぬ、是もひとへにわが父のお主の御かんき故と、いま更淺ましくおもひ候へども、はるゞ遠きみちのくの御すまひとうけ給り、此年月をおくり兼ぬに、其お主さまさへ浪々の御身と成たまひ、同園生に住ながら、神ならぬ身とふししづみ、やゝあつて申せしは、扨世の中につらきは、戀の道芝ふみ分てこそ知ならひ、お主の御在家を聞まいらせ候も、かり初ながらの御えにしにて、御まへさま御心のなさけ故なれば、此上は何とぞえにしをもとめ、岡崎の御屋形へ參、父は岡田の何がしと名乘、せめて女の身なりとも、御勘貴をゆるされなば、草の陰にて父母の、さぞお嬉しふ思めさん、わたくし身さへ御勘貴をゆるされなば、御まへさまさほど戀させ給ふよし、一通りの御傳は申べし、今此すいな世の中に、さのみなげかせ給ふなと、ふしぎの緣の長物語、たがいに袖をぬらして其うちと、わかれて歸尻目遣、戀の面影西山に、殘る入日と諸ともに、さらば〳〵と歸ける、

二、在原寺觀音の夢想

おもひと色にまよひ、息女のことしばらくも忘るゝ隙なく、夜もすがらねもせで物をおもふ身の、けふとくれ明日の命も晩々に、熱氣ほか〳〵とさし、次第に食もならず、藥は玄達が智惠袋を振へど、一ばんせんじの芝々、もゆるをもひにつよくこそなれ、快き氣色もなし、へだてなき友達の來りても、あゝむつかしやと對面もせず、南向の障子明れば、うらゝかなる春の日、掉姫のまばゆきに、梅に木づとふ鶯は、友ほしそふに法華經と、鳴音もわれが戀しさも、おなじ色香と一入に、秋にはあらぬ哀さを、おもひまわせば世の中に、神や佛はましまさぬか、日比信心をこたらず、朝暮の獨經在原寺の觀世音、過し春ひがし山長樂寺にて、開帳有し折からも、毎日歩をはこび信心せしも、かやうのときの念願と、御影を懸奉り禮拜し、南無觀

世音ぼさつ、願くはわが心中のねがひをかなへたび給ひ、若また此戀緣薄くば、立所にて絶命し、盲執の雲を晴、速に佛果得達なし給へと、狂氣のやうになつて身もだへし、また打ふして寢入しが、ふしぎや虛空に紫雲棚引、神とも佛ともいざ白雲の上よりも、ほのかに拜まれさせ給ふ御姿を見れば、忍ずりの狩衣に、すきびたいの冠を召、難有も妙なる御聲を出し、汝むなしくも過世の業因つたなき故、戀暴の闇にまよいぬ、此戀じやうじゆするて立は、自レ是はるか東に當て、其よはひ三十にたらぬ女あり、此者いやしくも歌道に達し、二世とかわせしおつとも、生死の道遁がたく、此世を去てひとりすぎ、午頭天王の惠を請、參詣の貴賤ののどを閏し、其茶代を渡世とす、かゝる際にも歌をよみ、朝暮我を念ずる信心、佛神是をあわれみ、自然と其名洛中に廣まり、女ながらも歌書の講釋して、多くの人をあつめ、汝が戀する者も此女の門弟也、かれを尋て賴べし、いつぞや黑谷の歸さ、言葉をかはせしこと、是則結ぶの神の御引合、人界のかなしきは、かり初の色にまよひ身命を捨て、我に向ひて是を祈、此程の信心きもにめいじ、唯今夢中に知らする也、われは元より戀知りの、わけ在原のなりひら、今の世にては陰陽の神と仰もわれぞとて、東をさして飛去給ふと、腰もとのはるが、若々御膳がよふごさりますと目を覺す、源六はつとをき上り、扨もあらたなる靈夢難レ有々々と、彼くわんおんの御顏にむかひ、千度百度禮拜し、身振もなんのそこ〳〵に取つくろい、あしをはやめ祇園の社ふしをがみ、森のこなたに立やすらひ、彼水茶屋を尋ぬれど、似た顏とてもあらず、とわんとすれどむねせかれ、家名をだにも打わすれ、せんかたなさにそれよりも、せめて見し人の面影移る黑谷のあたりへ立越んと、智恩院の門前を北向になつて、白川橋野道に出れば、南禪寺光雲寺のひがんざくら、いまを盛の初はなと、いとゞはるの日のあたゝかなるに、猶掉姫の衣の色をあらそいて、よめ菜たんぽゝ土筆、手毎につみ菜の女中かた、野邊は錦をさらせども、いかな〳〵目につかず、駕籠いそがせて黑谷の、あみだ堂に參詣し、しばら〳〵四方を詠むれど、只みし人のをもかげ、今目の前に見るやうに、猶もをもひの增かゞみ、後の山の片邊、世を捨人の庵室に、入ても盡ぬおもひのやみ、ずんと氣のはなれぬもの、

三、歸花は今樣の紅裏（もみ）

あるじの僧の佛法ばなしもうるさく、かの庵を立出しに、たゞわすられぬ御面影、われながらをろかなこととおもひながら、過し比此あたりにて見初しが、後すがたは此やうにあつた、顏元はなぜゝとひしほ思ひ出し、黑門の外岡崎の軒つゞき、三歌輪屋と言茶やのゑんに腰をかけ、あくびして居る男、はて誰にやら似たとおもひ出せば、過し十五日かの人のお供せし、茶辨當持の久三なり、源六はつとむなさはぎして、扨こそけふも此所へ御出有しと心をつければ、うらざしきには大ぜい女ちうのこゑすれば、何となく見せのせうぎに腰をかけ、たばこくゆらすむねのけむり、くゆるおもひをうちつけて、言てみたしとおもへどもさうもならず、せめて歸さの御姿なりとも、見まいらせんと待いる折節、二八計のこしもと、かゝおたばこの火ともち出て、源六が色に氣をとられ、はづかしそうにおくに行、もしお姫樣、何國の殿かはしらねども、其うつくしさぢんぢやうさ、どうもいわれぬ若殿、おもてのせうぎに腰かけて、たばこあがりて居さんすが、いまなりひらとはあなたのこと、わた持の中將さま、のふおがはどのおつねどの、おせきもたれも見給へと言ば、お供の女中おひめ樣、皆一等（どう）に立さはぎ、あかりせうじに指まど明、あまりにつよくをし合て、あいの障子をおしたをし、互に目とめとを見合せて、手持無さたにはしり込、寺から里の戀仕かけ、おみゝに口をおしあてゝ、何やらかやらさゝやきて、がてん〳〵ととりあへず、火入に伽羅の空燒し、源六のおまへにいで、わしはかくのおざしきより、お使にさんじました、さておひめ樣のおしやんすは、一間の座敷を心なく、なが〳〵と居まする事、さぞたいくつに思召れん、さりながらとてもの事に、いますこしお待なされてくださんせ、さだめてそこははしぢかにて、いろ〳〵の草木の香、いやら敷もおぼしめされんと、名もなき木にて候へども、おなぐさみやら何やらにと、火入をわたし手をしめて、若お返事はと言ければ、源六おもひの外なれば、とかふの返事もあらざりしに、腰もとちやくと心づき、そこらはわしが能やうに、取つくろいて申さんと、ひんしやんとしてはしり込、なふおいと樣聞ました、おなは源樣それはその、

おそばで見てのうつくしさ、わらい顔まで見ましたと、わしらが智恵はかうしたもの、あゝ慮外ながらなりますまいと、ぢまんをすれば女ちうがた、扨も氣づよいおしゆんどの、あの美くしき殿達の、おそばへ行て其まゝに、生てはよふもどらんした、あゝしんきやともだゆれば、なさけしらずのおちの人、もふお歸と立出れば、おともの女中取まはし、かゝさらばと て歸るさの、人目を忍ぶ尻目づかい、跡はる〳〵と見おくりて、また立歸伽羅のすがり、はた身に添て其ままに、留てねまきの白小袖、總じてにをひはしばしのうち、覺てはつらき緣の道、いそげやいそげとかごに乗、茶代をかゝにさらば〳〵、

四、時華出は女の歌書讀

歸さの鴛籠いそがせてかはら町、其家居も小ぎれいに住なし、表のがうしの眞中にかんばんかけ、一番に小倉百首伊勢物語、右講釋いたし候、女歌書讀幾野と書たる筆のすさみ、いやしからざる風せい、さてこそ夢中の御告、うたがふことなしとあんないし、あるじに對面したまへば、彼水茶やの女なり、たがいに是はとつと〳〵のあいさつ、さては過つる比、祇園ばやしにての御はなし、如何なりゆき候や、若殿達のならい、淺はかなる御ことにて、おぼしめし出さるゝことも、あるまじきとたわむれければ、源六打しをれたる有樣にて、此ほどの心盡し、または觀音の御夢想、ありのまゝに語れば、幾野もきもをつぶし、まことに世は末世といへども、かゝるあらたなる御れい夢、ひとへに御心の實よりはつすること〻、東にむかひ南無觀世音菩薩と、心のうちにくわんねんし、此上は何がさて、さほどに戀わびさせ給ふこと、むなしくいたし申さんや、お主の御勘きゆるされしも、御まへさまの御はなし故、此身も今はあさましき勤を仕舞、わが讀覺しを幸に、歌書の講釋をいたし、世を樂々とくらしまいらせ候、さいわい今宵もおいとさま、伊勢物語のお望、またはお氣晴の御爲とて、わたくし方へ御入あるべしとの御こと、まづおふみひとつをあそばせと、りやうし硯をまいらすれば、懷中よりふうじたるふみとりいだし、兼てはかくと幾野に渡し、けふも黑谷に立越、またこそかの人を見まいらせ候て、かやうのしゆびとはなさるれば、此上はわたくしよきにはからひ申べし、しばらく是に御入あれと、おくの一間に

忍ばせたてまつり、最早七つも過がてに、くるゝまをそしとおいとのかた、腰もとあまたを供して、幾野が方へ入給へば、あるじ立出こはめづらしき御出と、さま〳〵もてなしたてまつり、色々の興を催し、腰元もはすはもせきも打込て、今宵はなんでも銘々の、戀のざんげのはなし講、我も〳〵と芝居ばなし、おしゆんはおくせず、わが戀は山本歌門、さて其次には辰三郎、此君達を引しめて、だいてねゝして居心、おもひだすさへぞつとして、どふもならぬと身もだゑするもおかし、お靜はどふでも竹のせう、はてわけもない宇源次が、其物ごしがいのちぞと口々の評判、めしたきのせきは末座より、わたくしなどは古今どの、あのはなもとが見込といへば、座中はどつと大わらい、幾野はおしゆんにさゝやきて、がつてん〳〵とうなづきて、もふ此次はおいとさま、お前の戀は閨所、彼人さまかと小ごゑになれば、外にはないと一くちで、ついしれましたと腰もと共、さゝやき付合笑ふ所へ、調子さかづき持出て、先さゝごとをはじめんと、さいつをさへつ手元のあい、これ初戀のたき付と、皆々よい機嫌になつて、幾野申けるは、今宵のおいでは伊勢物語の御望、夜更ぬ内讀申さんと見臺になをり、むかし男うゐかうむりして、ならの京春日の里に知るよしてかりに居にけりと讀最中に、おしゆん能出、若し幾野さま、むかし男は見ぬ世の人、けふ黑谷の三歌輪屋で、當世風のいまなりひら、ちらと見るよりうか〳〵と、いきた心ちは御ざんせん、其講釋は今度の事、是から生の業平ばなし、いやといわれぬしゆびになり、幾野も是を幸と、お姫さまのそばに寄、いまさらに申出んもはづかしけれど、去御方にげんさまとて、それはその〳〵やさをのこ、御まへさまのお姿をちらと見しより、戀わびさせ給ふ御心ねのいたわしさに、おふみの音信をひたすらたのまれしと、御ふみをさし出せば、はづかしそふにさしうつむき、御てにもふれ給はぬを、幾野さま〳〵と申、彼ふみを見給ふに、

過し二月十五日、御法の庭くまがへ堂のかたほとりにて、御姿のあてやか成に心をくみて、わりなくも一かたならぬわがおもひ、くどふは幾野に御とはせをこそねがいまいらせ候、

逢までのちぎりはいとゞかた糸の
よるもおもひの絶ぬ身ぞうき

御ながめもはづかしのもりで、おもひのあらまし腰折ながらも、御目に懸まいらせ候、めでたくかしく、

彌生後の五日　　數ならぬ身より

おいとの御かたさまへ上る

と讀終、何のいらへもなかりしを、幾野色々と此程のあらまし、ふるなの言の葉を延けれども、うちとけ給ふ氣色のなければ、古きうたにも、戀死ん身はおしからじ後の世にむくわん君の爲ぞ悲しきなど讀おきしこと、さなきだに女は後生のつみふかく、聞もけふとき妄執のつみ、如何遁給ふべきや、か程に戀わびさせ給ふを打捨給はゞ、かつは御身のむくひの程、總じて世の中に惡ふて人にはほれぬもの、兎角御心よき御返事をとひたすらに申せば、本よりも岩木にあらぬことなれば、御心に隨ひたくおもへども、惡事千里を行たとへ、岩の物言うき世、若も此こと父の御方へきこゑなば、如何なるうきめにかあわん、末も通らぬ御ちぎりに、浮名の立も氣のどく、よし何程に戀わびさせ給ふとも、おぼしめし切給へ、こなたとてもときはの山の岩つゝちと傳てたべ、たゞまゝならぬ浮世とのたまへば、幾野申けるは、わたくしかやうに申上は、御うき名のたつことにても候はず、そうしたことはむかしのこと、いま此すいな世の中に、何かはいらぬ是こと、腰元二たりも目引して、一間の障子そつと明、源六を友ない御そば近くよせまいらすれば、姫君も初戀のお顔に紅葉かつちりて、とかふのこともあらざれば、扨もとかしや此上は、いやでもあふてもこうじやとて、二たり一つに衣打かけ、灯火吹けしお次に出、さらぬ體にて打あつまり、酒を呑やら咄やら、兎角言間に短夜の、はや高臺寺の九つを、道で聞ましたとおむかいの、てうちん持てまいりければ、おしゆん御そばに行、名殘のそでを引わかれ、さらば〳〵と歸るわが宿、

風流夢浮橋卷之一　終

風流夢浮橋卷之二

一、別はつらき難波の緣組

玄番殿のお屋敷には、けふはおいとさまのお筆取のいわいとて、臺所にはこしきをたて、上から下の大酒盛、久三が醉ぐるひして、食たきのせきにだきつけば、せきははらたて、澤山さうにおをひてもらいませふ、あゝ慮外ながらとしさいらしい顔つきするも、それ〳〵のおもはく、是を肴にも一つと六助がちやわん呑、おざしきには碁打の久才と前手後手のあらそひ、大ごゑのけんくわ、これにおそれて久三がにげるなりのおかしさ、おくには舞子の小らんが關の小まんの笠をどり、おいとさまの琴しゆんがさみせん、にぎやかな最中へ幾野御見廻申せば、おちの人はひよろつきていで、扨も〳〵おそかつた、さきほどもおいと樣の噂、呼にやる筈であつた、けふは御心いわい、まづさゝまいれと、またお次での大酒盛、それから總をどりになつて、お物師のきよがあんどをけ返し、油を打まき、なむ三ぼういまが十二月ならなんとせうぞと、用心ぶかきあいさつもおかし、次第に千秋樂の聲も靜まり、おいと樣もおへやに入給ふと、幾野はおそばでのおはなし、過し夜のこと腰もとのしゆんが言出せば、はやふ智惠づく女の心、はやはづかしきけしきもなく、夕部は幾野のなさけにて、始て殿のはだふれ、かりねの床さへわすられぬに、せめて一夜とはだふればと、言にも餘る言の葉の、末も通らぬわがちぎり、また逢こともおもひのたねなどゝ語たまへば、そこらはわしがぬかりませぬ、こよひ爰ゑ源さまの忍ばせ給ふ約束と申せば、それは眞ことか嬉しやと、俄にざしきをとりなをし、こゝもと共に伽羅たかせ、二つまくらの今宵しもと、たわむれ給ふ所へ源六は、宵のまの朧月夜に身をそめ、やしきの外の藪影に、何やらしろふ見えしを、さてこそ約束の目印ならめと立よれば、白じゆすの大はゞ帶、竹にはさみて指出し、うたがひもなきあいづのしるしと、藪したをそつとくゞり内に入給へば、一丈計の横堀有、いかゞはせんと立やすらひ給ひ、寐鳥のうごくも人音かと、胸のとゞろく事幾度なりしを、やう〳〵におししづめて見れば、いづれ宵より待しと見えて、大きなる竹○

二本わたせしを、ふるい〳〵たどり、漸々むかふの岸に飛つき、ほゝとためいきつき、是までは忍びしが、此行さきの覺束なく、はるか向を見るに、ともしびのかげほのかに見へて、路ちの戸ひらきたち出る人音、あやしやと大きなる板の陰に身を細め、月影に能見れば幾野なり、はて嬉しやと小聲になり、内のしゆじ如何と尋給へば、氣遣ばし立給ふな、こなたへとて友ない行うれしさ、おいとのかたも出合給ひ、眞ことにはる〴〵の御しのばせ、御心うく候はん、こなたへいらせ給へとて、御しとねの上にいざない、過し夜のはなし、秋にはあらぬ春の夜の、ち世を一夜と契給ひ、源六は此程のおもひのきづな打とけて語給へば、おいとのかた宣ふやう、數ならぬわれ〳〵を色々と御心を盡され、誠に切なる御心入、化なるちぎりとおもひながらも、御心に隨ひまいらせ候、されどもまゝならぬ此身、親たる人の幼少より、難波とやらんに縁組の約束、はやちかき内に其かたへ下りさむらふよし、本よりわれは言の葉の末も通らぬ浮ちぎり、なまなかま見へまいらせ候は、兩夫のつみもおそろしく、色々いなみ候へども、幾野御身に替りさま〴〵申されれ、わが心一つにて、露の御命もきゑ給ふなどゝ聞まいらせ、女心のはかなさ、風と御げんになり、過しかりねのうきまくら、かねて聞しに增かゞみ、御面影の身にそゑて、なをいつまでもとおもへども、親たる者の心そむきがたく、不孝の罪にしづまんことのかなしさ、たとひ萬々歲をたもつとも、遁えぬ生死の道、おもひまわせば千夜とても、一夜もをなじかりまくらと、思召切給へとあれば、源六もいまさら兎角言べき言のはなく、さればとて此まゝに、おもひしづまんことも口惜し、はらかき切てとおもへども、姫君ね御難のかゝること、日のまへなればそうもならず、たがいに物をもいはず、きのふに替る世の中、ちぎりも今宵ばかり、じつとしむるをながき世の、別を急ぐ鳥のこゑ、かねもしきりに吉田山にひゞき、なみだと共に歸さの袂をひかへ、おいとのかた一首のうた、

わかれ路は物うきものと兼てより
聞しにまさるけふのあかつき

と白りんずのふくさに書つけ、袖よりそでにとりかわし、おもひの外の御わかれ、なみだにむせび御返歌

にもおよばす、源六は夢の心ちして、わきざしの小がね目貫かた〳〵引ほどき、是をかたみと御手にわたし、是ぞ此世を門出の庭もよも、かほどには有まじきと、幾野御手をとり、本きし道へ友なひて、とても言葉の末とげて、そひ給ふべきにもあらざれば、御うきなのたゝぬうち、別給ふこそましならめと、いさめたてまつれど力なき有さまにて、あやうきはしも漸々に、渡り給ふを見おくりてわかれぬ、

二、悪性金は戀病の内くら

世の中は皆よしあしの難波の縁組も、如在なき心から打明てのはなし、兎かふ言べき便りさへ、なく〳〵月日を一間に取込、わすれがたきは彼人樣と、はやり出しの古今ふし迄、わがことのやうにおもはれ、枕一つをたのしみと、打ふしがちの病となり、次第食もならねばやせが見え、物言こゑも自然とひきく、立居もそつととゞするぐらい、二親の氣遣やるかたなく、旦那山伏へ人をやり、當卦の八卦を見すれば、顏をしかめかぶりをふり、當年の卦たい絶體也、星は戀闘星にあたれば、きつふむづかしき御病氣と、俄だんをかざり、あせみづになつて祈れども、牛の角を蚊のせゝるほどもげんなし、生靈死靈かと、祈を替ても、心よきけしきなく、實に子をおもふ親の身、御袋は盧山寺の大師さまへはだしまいり、大せいの參詣、あるいは入むこにまいりますが、さきはよいかわるいかとのみ闘とるも有、また十七八のむすめ、とのほしそふにをとこのよいをはよふもちます樣にと、口の内にとなへ、似合相應のねがいごと、お内儀もわが子のわづらいの氣遣さに御闘をとれば、

戈 出奔機發レ色　おもふことも跡より出てぢうしよにふんなきぞ、
五 行先又如レ闇　たびにてもあてどころなくなるぞ、
十 晴天正朦々　はれたる月のにはかにくもるごとし、
三 春花未レ開凋　つぼみのうちにちりてしまふぞ、
凶

此お大師さま、天下にならびのなき生ぼとけさま、かなしきことは御闘も氣がゝりなれど、ならぬ所をたすけ給ふが神ほとけのお慈悲と、またふしおがみ立願かけ下向し給ふ、内には笠はら民下といふ醫者に脈を見すれば、なるほどくるしからぬ御病氣、追つけ御本ぷく成べしと、かろ〳〵敷うけ合ば、了仙夫婦悦

で、何分にも頼たてまつる、お藥をといへば民卜かぶりふつて、いや〳〵此病氣鬱性ろうがいの只中、藥で行水させても、人參をめしの菜にくわせても、役にはたゝぬやまひ、兎角氣のはるゝやうに方々への遊山、それに隨ひ本ぶくと言ば、尤の御見たてとにぎりこぶしの丁仙も、わが子の病の悲しさに、かびのはへたさ小判澤山に出し、此上は民卜さまをたのみまするとあれば、源六にむかひいやあふなしに引たて、けふは宇治の螢見、明日は萬太夫が替り見物、祇園よ清水よと方々乘物にてあるかせぬれど、さらにげんも見えず、珍しき事は壬生の狂言が、秋になつて頃日はじまりしと、手代の喜介が語れば、民卜がすゝみてまた壬生の地藏まいり、それから直に島原見物にと立よれば、色は目安きものおもしろ氣がつきて、心よき貌つき、直に揚屋は枡屋に行、民卜かくとさゝやけば、あげや婦夫は悦で、太鼓の傳吉諸ともに、それおざしきの障子はづせ、中二階のかみくづとれ、御酒のかんよおさかづきよと、ひしめきてお望は候はぬか、けふは名にあふ門日にて、はぎゝの女郎さまにおひまはひとりも候はず、文字屋のかしわぎさま、桔梗屋の三五樣、その外梅の女郎さま、けさより是に御入なり、もろふてなりとも見ませふか、まづかりましてと鑓手まじくらさはぎだし、花車はお調子持ながら、源六のそばはなれず、あたまからの山吹色、花に移ふ色里の、亭主が雲舞くわしやがれんとび、鑓手のすぎもまいだれあらため、かぶろもよいかみ結なをし、かねがさするめでたさ、それはその廻りやう、太鼓の傳吉申けるは、揚屋のざしきの無色界、どふ見ましてもすまぬこと、お氣にいろふと入まいと、はやふつかぬと言出せば、あつとこたえてどれなりと、はよふござるがこちのため、はしれいそげと言内に、大坂屋の八千代さま、かしわやの坂たさま、追つけこれへ御いでと、したれ引ぬに二たりの君、もつたいくそうふりかけて、けふの紋日ははづれ足と、いわん計の貌つきし、座敷になをらせ給へども、よんでおくぶんのこと、お座をはやすは太鼓の役、源さまは御病中、また氣を替て此里の、よねさまがたの道中ぶり、さあお供せん民卜樣、跡のお首尾はあやかり物、おうらやましやおめでたやと、さもやかましきたいこ口、たゝいて行ば揚屋町、いまだ時分のはやければ、たゞも居られ

すたて横の、局がかうしをさしのぞけば、中の町を北向になつて、是此さとの大臣と、いはぬ計の自まん貌、何れ田舍の出來大臣かと、跡をしたへば淺ましきつばね入、たがいにしつほと打とけて、お手うちちがいのお手まくら、かしわやからは氣をつけて、あくせう大臣のぬけ懸、後姿は室町の山さまそうなと、かぶろをつけて見すれば、いかいをはまり大臣ちがいと、しさいらしき顏つき、大ごゑして笑ばかぶろ共、終に見なれぬ神なり大臣、二階住居のお客でなし、家持女郎のおなじみ、高のしれた殿ぶりと、わらい〳〵立歸、其跡にては紋日一つを頼まれて、あせ水になつての大くせつ、諸はだぬぎてひざまくり、そば切色の古下をびによろりと出れば、われながら興をさませし風情して、かく申はざけう、紋日の二つや三つ、苦にする男にはあらねど、是に付ても五とせあと、芳澤あやめが勤ざかり、月切の揚詰、互にかわるなかはらじと、熊野がらすに血をそめて、我くわん桶の結綱にと此下帶を囉、一生の內身をもはなさぬかたじけなさ、あわれかたさまも、あやめが心中十分一あるならば、神ぞ根引に諸白髮と、古下帶の言わけに、紋日一つのをはまりぞと大わらい、はや道中もはじまりと、人だちしげき揚屋まち、八百屋が見せにもうせん仕かせ、太鼓の傳吉罷出、先一番に一文字屋の夕霧さま、其次には長門さま、かしわぎさま、跡の日笠は桔梗屋のかをるさま、あの君たちにお望は有かなきかと言內に、大坂やの道芝さま、花崎さまに高橋さま、言葉をならべそのあとの、むめから鹿のくらいは、一々申も事くどし、さあお歸とお供して、それから其夜の大酒盛、呑やらうたふやら、

三、心中の見所は揚屋の口ぜつ

戀の山のぼりてつらき人心、なをもおもひの增かゞみ、其面影はいつしかに、とんとわすれて島原の、かをると言る松のくらい、三十日は廿日のあけづめ、おやかたも此女郎はかねぐらと、朝夕の膳のまはりまで念入るは、實も傾城めうがぞかし、夜な〳〵ごとのうきまくら、流の身なれど源六が心入になづみ、常體のちぎりとは各別のわけ、友女郎のそねみも去ことぞかし、ある夜源六と一つ夜着きて、身のこと他の事まじりのはなし、よが更たやら、鑓手のすぎがねごとまじりのはぎしり、下の町の辻ばんがいびきまで物

さびしく、源六少まどろみしに、かをる夜着をそつとぬけて出るに、源六目ざとく覺て、ぬきあしのよるのさま心得がたし、横ばんのしかたうたがふことなしとやりすまして、跡からつけて見れば一間に行て、何やらさゝやきごゑして、うちよりかきがねしめるなど覺束なく、兼て聞にしなじみの客ならめと、見かぎりはたしたる心入、いま迄あの心を知らず、のめ〳〵と深入したる口惜さ、我ながらぬかりぬ、よし遊女にもせよ揚てをく内はをれがもの、いかにしてもふみつけたる仕かた、かんにんならぬとおもへども、やうすを見さだめてからと、楊枝にてから紙に穴あけ見れば、硯かみしどもなく引ちらし、伽羅のたきさしまだふすぼり、綸子の夜ぎ紅うら打返し、あゝ氣味よしといふも胸さわぎ、すがたは見えねども、たしかに人のもだ〳〵する體、いまはから紙けやぶり飛入ば、其いきをひにともし火さへ、やれ人ごろしとなきいだすを、やにはにから紙越におさへ、おのれ傾城め、よをも〳〵寐だまし、後くらきは弓矢八幡きかぬとのしれば、家内は寐みゝに盗人と心得、めい〳〵に鑓長刀、かむろのさんが火吹竹持たるもこと〴〵しく、やらぬのがさぬと口々にわめき、大勢二階にあがれば、源六はから紙に乘て言様、亭主も亭主聞えぬ仕かた、此女をひよつと買出すと、卅日は廿五日此源六があげづめ、何に不足のないやうに、心を付る甲斐もなくうしろくらきこと、きかぬと言出してからはずんどきかぬ、亭主とてもおなじ穴のきつねとわめけば、左兵衛もめいわくし、まつぴら御免、わたくしは夢にもぞんじませぬ、如何様ともお心の入やうに折檻いたさすべし、先此ふすまをおゆるし給われと言、然るうへは此下の二人は、其方に預るとあらけなく飛のく、扨ふすまを明て見れば、かをるとかぶろの早野なり、二人ながら氣をとりうしない、目を見つめてふしぬ、男のきれとては今年生たまだらねこ、ひらくたになつて死けり、やれ水よ氣付よとうろたへ、鑓手のすぎはかをるさまと呼もどす、めしたきのたつは早野早野、そつちや道がないといきの切れる程わめく、源六大きなおもはく違、あきれはて、物をもいわず、亭主は、源六殿かをるさまの死ぬると、こなたはたゞおかぬと、はやかさをかけておく、亭主くどい、そこへはゆかぬ、かをるが死ぬるとはらを切てめいどの

道連、一寸もひかぬとおもひつめけるに、小笹宗右の針にてやう〳〵せう氣付て、香織なみだをながし、身は傾城のつたなきながら、心はなか〳〵流はたてず、朝むくと起るより、夕部は本國寺の入相を聞まで、君御越のなき日はうか〳〵といたし、はうばひ衆の見てはおかしからん、是程に心を盡し、いまだ御氣色のすぐれ給はぬを悲しく、毎日法華經書寫いたしまいらせ候、それと見らるゝは信實のうすき心と、隨分人にもかくし、君にもいさゝかしらせ申さず、其上身はたゞならず、此月で三月火を見ませぬ、今宵も御經をかき、晝からの大酒にをなかをいたみしゆゑ、はやのにはらをとらせ、是ほど身のやせるをもかまはず、なんのかのと心を盡に曲もなや、われながらあつたゞ心中をひとつ無にした、おしや傾城の一分がもはや立たぬ、いはゞ言事は山ほどあれど、言ほど顔もにくし、しかし是を見せねばすまぬと、御經をとり出し是々、

願書のこと

一美野や源六様御氣しよくいまだ御すぐれなされず候、此くごくにて御心いさぎよくなさせ給へ、もしかぎりある御やまひならば、我が命に替て給わり候へ、依レ之法華經書寫いたしまいらせ候、うやまつてまふす、南無妙法蓮華經、

とかき、其上外の客に逢とき、一どもまことのちぎり忘てもせぬ心の誓文、月に二度づゝわが心から神々様へ、烏のおしたかみに指の先からあかいものだして、をそろしき起請、きいても身のぞつとするちかいを見て、猶源六が申ぶんすこしもなく、かうした心ちうとは夢にもしらず、身のおもきもいまが聞はしめ、此上はどふじやらふとかうじやろふとそなた次第、はらのいるほどたゝいてかんにんしてたもと、しゆろほうきあてがいけるも、信實の心、かをるもそうそううらみいふもぐちなり、おぼしめせばこそかうもなさるれど、髪を結なをなさ小袖を着替、かぶろ伽羅たけと言付たるおちつきやう、あつばれながれたつる女は、此君をよね守りに懸なば、傾城冥加もあるべし、

四、口のさがなひくるわのとりざた

壁にみゝ岩の物言世の中、かをるは間夫狂、はや此月で四月じやの五月じやのと、くるわ中の物ざた、聞も

中々うるさく、此身はとても浮づとめ、花見ぬ里で散はつるはしれたこと、さればとてかくされぬをなか、次第に月の重なる程人目うるさく、源さまのお爲もあしく、親子のてまへのしゆびも如何と、人しれぬおもひ、女心のはかなさ、いつしか地なやましく、鑓手のすきが氣遣して、かをるさまは食がならぬと、水雜吸しんせても、むかいけがあるとてならず、源六も氣遣して、内の首尾もかまはず晝夜のかんびやう、親かたも此きみなふてはならぬと、八卦を見せきとうをするやら、源さまからの日待、芳輩女郎も鑓手もかぶろも、替る〳〵の夜とぎ、あるときかをる、今宵は氣色もよし、熱氣もこなんだと快貌つき、何やらかやらのはなし、最早夜もふけ今宵はとぎもいらぬ、此程のくたびれ皆々はやふ休給へと、はうばい衆へもねんごろにあいさつ、鑓手のすぎにも何やかやの禮、只ひとりねられぬまゝに、はかなき行末などあんじ、かゝるつとめの物うきも、親のためとおもひし内は苦にもならず、ひとりのかゝさまにさへをくれ、また此樣に身持に迄なつて、はらのやゝ生だら、源さまのいとど内かたのしゆびあしきとのはなし、とかくながらへてもおもしろからず、兼て君のためならば、命にてもと言しは爰、いつまでいきてもかわらぬ浮世、兎角死ぬるに極て燈引よせ、かきおきしたゝめ守刀ぬいて、せめて此世の見納にと源六の寐貌、つく〴〵と見程いとしらしき男、今おれが死ぬるをば知り給はず、よふ寐ていさんすと一入物がなしく、あの人を跡に殘し、いやらしき鬼のそばへ行など、おもふほど心細けれど、兎にも角にも君の爲に死ぬるいのち、なげく事なしと、惜や廿の花盛、くれないの刀につらぬき、題目の聲諸ともにあけにそまつてたをれぬ、皆々是はと取付見れば、はやたましいはとんで足手も寒渡り、鑓手のすぎがよびもどす聲も、なく〳〵枕もとを見ればかき置あり、源六やう〳〵に披て見れば、

書おきの事

實去ものは日々にうとしと聞に付ても、とに角にうき身のあらまし、申も中々はづかしく候得共、また申さぬときは、誰あつて角と傳おかんよすがもなき、わが身本何某のむすめ、親たる人ははるかに遠き西國の太守に仕侍りしが、いさゝかのこと有て浪々の身となり給ひ、君臣の義を重んじ、二度

二君には仕へじと、伏見の里に引込給ひぬ、其折からはわが身當歳にて侍るよし、うらめしや父、世のならいとて朝の露と世を去、母さまの御ふと所にてよういくせられ、うき年月をおくりしこと、兒心に悲しく、はやふ人となり、母のめやすからぬやうに仕覽とおもふ願に、ながれ行とし十三のはる、みづから此くるわにしのび身を賣、只去御かたにみやづかへしたてまつるといつわり、母をはごくみまいらせ候、これほどにこゝろを盡まいらせしひとりの母さまにさへ、過し二月の比風の心地とうちふし、終にむなしく成ゆき給ひ、其折ふし兎にも角にもなり〳〵はんとぞんじ候へども、折しも君と相なれ、常ならぬやうにおもひおもわれ、よ所のちぎりはあらゆる神かけて、一度もいたしまいらせず、哀くるわをいでゝ心やすく、二たり寐の月見ばやと、佛神をふかく賴まいらせ候甲斐もなき、浮世とは成まいらせ候、われくるわの住居しながら、はらのややうみまし候はゝ、君の御名もたち、いとゝさへ内かたのしゆびあしきとの御はなし、日比命をかけてのちかい、此時にきわまりぬと、かくは成行まいらせ候、此身はとにもかくにもなら柴の、なれてなごりおしきは君の御貌ばせと、惜き筆を留まいらせ候、覺しめし出され候折ふしは、一遍の御廻光をこそねがひまいらせ候、かしく、

みのや源六樣參　　かをる

源六かたみを見て、絶入やうになげき、おれを殘しひとり行は連なき心入、日比同穴とかわせしこと無にはならぬ、おなじ道にともだゆれども、何程に思召ても叶はぬことゝさま〴〵いさめて、なきがらは本國寺の露霜となし、鳴々歸ははかない浮世、

風流夢浮橋卷之二終

風流夢浮橋卷之三

一、無常を忘四條の水

ひとり居て獨は見えぬ香織がおも影、有やなしやとはや四十九日に成ぬ、そう〳〵なげくも愚な事、されば、とて外に情の色もなし、うちに計も居られずと、ゑびすやが芝居、あやめが名殘の狂言傾城淺間が嶽、せめては是を氣晴に、けふも芝居明日も芝居と、古今がなごりの船うたも亦おもしろしと、萬太夫が棧敷三軒目にとらせ、わき狂言過て紅葉の賀の初獻、實がた敵役若女形それ〴〵のおもひ入、何も角も打わすれ、面白しど目もはなさず見物すれば、かわゆらしき腰もと役、面體物ごし目もとに戀をふくませし所は、生移して香織と、はや狂言も序の中入、鼠喜世三がおもひめさま、淺尾十次が手習の指南、伊せもの語のあばれ讀、あれは誰ぞと、日比はふつ〳〵やらう嫌ひなれど、藝のあいだを借り衣、袂ゆたかに大ふりそで、とんともたれてのあいさつ、盃の取廻ししやんとして、お名は花本和州さまと、聞と其まゝ移り氣の、はや狂言もそこ〳〵に見なし、追出しの太鼓諸とも、末社ども前後をかこみ、四條のかりばし足ばやに渡り、西石垣近江屋が方に入、末社が角と案内し、つちで庭はく大臣の異光、それ和州さま呼ませと、先此うちにおさかづき、爰をばちつと押へます、其あい此あい手本のあい、爰は亭主がお肴と、はりあげての加太夫ぶし、大臣御機嫌拠もでかした、これ〳〵ときなおさかなを被下ければ、かねにかたむく色の里、西も東もおなしてゞ、めつたに廻りてどつとぞつと、そりや太夫さま御出と、お吸物まで念を入、はやさかづきの數つもり、もふよい折とおとこをとり、おもひの外の色のそひね、互に替な替らじと、じつとしめよて寐る手枕は、長門印籠にあらねども、ぐわひのよいことしまふてまどろむ、時は八ツの過、醉覺にまくらはづれて高いびき、あやしやけしたる女のすがた、渾六のまくらもとに立より、のふうらめしや君故に、此世を去ておそろしき、劔の山のくるしみせしに、終に念佛のこゑもなく、香のひとつもひねりやせで、二たりちわしてしどもなく、誰がゆるしてのむつごとぞ、あゝ去とては曲なや、それのみならず花本に、いとし殿子を寐とら

れて、つらしきたなしねたましやと、忘執の角を振たて飛かゝりしを、誰となく白き小袖にすごき帶、ひたいに紙をあてたる若衆、若々と引とゞめ、さきほどより御うらみ、御言葉の末のいとをしさ、我々とてもうきつとめ、若女形の名を取し、松本兵藏が遊靈なり、御身はいかなる御かたぞと、問ふにつらさのますかがみ、其面影もかわり行、浮世に生を請ながら、士農工商家にさへすまで、ためしすくなき川竹の、ながれの身成にあまつさへ、やいばに懸りし其とがは、降もやらず修羅堂の、さもおそろしきくるしみ、少の隙を窺て、此世に殘る魂魄に移り替て來りしに、ふしぎに御目に懸事、是もおもへば他生の緣、互にうきを語んと、二人はそばに寄そいて、我島原に勤めし内、太夫とはよばれながら、内證のくるしさ、胸に火宅をはなれず、此やるせなき心遣、せめてはなし申べし、そもそも傾城と成こと、其身のいたずらにて是にはならず、大かた親の爲ぞかし、先十年のねん切は、水揚よりのさだめなり、勤のうちは姉女郎に引まはされ、萬親かたよりのあてがひ、先太夫ははじめ二とせ、毎日伽羅二燒、奉書五まい、中打半帖、封じがみ三まい、のべ五打に楊枝三本、月に雪踏一足、草履三足、其外禿の拵四季の衣裝、拠銘々さばきの身となれば、着類の外は手もめとなつて、禿にもおなじ樣樣もきせられず、色あげのそめちん、糊の錢、何からなにまでの物入、是皆客の心入にてすること、ねづよき客の有時はおのづからはりつよく、まだるき客はとばして置、言たいこと言ても、三十日賣づめにするかたじけなさ、親かた鑓手も顔もとよし、なんぞ少のあやまりにて隙日が多いと、はやお内儀の當言、それもきかぬかをせねばならず、おのづと世間の義理もかき、日がくれても油が入とて、くらがりに追こまれ、せんじ茶の呑たき折、遠慮しておのづから片身すぼり、たま〳〵揚やに行ば、何とぞ客の氣に入やうにと、諸對面のをとこでも、なじみの客より身をまかせ、半ずいな客のしこなしたる顔つきして、むりなさかづきをあてがい、色々のむりを言のも、親かたのかをもとをおもひだし、うつくしうつとめ、床の僞うそをかためてだませしを、なんぞ我が物とりにしたやうに、朝晩ゑんま王樣ににらまれ、夜る三度目に三度のかしやくのせめ、それは其つらさ、申もおろかとなみだにむせぶ、

いま一人の遊靈、なるほど〳〵御尤、いまさら申もはづかしけれど、さんげのくどくにはひとつのつみもめつすと聞、さあらばこちのうきつとめ、語り申さん聞給へ、まづ芝居にて我が諸さを大事にかくる心遣、多くのひとに顔をさらし、皮うすにてはならぬこと、内に歸れば客に出、諸事の氣苦勞輪の衆もおなじこと、身拵がをそひのはやいのとせがまれ、勤に行てのじゆつなさ、初めての客なれば、物ごとに遠慮して、呑たき酒も呑ず、言たいこともいわず、萬控心にすれば、無すい客のくせとして、我しこなしのわるきはいはず、もつたいを付るの位をとるのと打込れ、よい料理の膳をすえても、食汁のふた取計、うまいものもくはず、客によりてむりにくゐとしいられ、茶づけの一つもくえば、わる口な客の影ごと、あの若衆は大ぐいするの、くまでじやのと評判、いかに野郎なればとて、食をくわゐでなんで命をつなぐ物ぞ、知れた事なれど言たがる世の中、扨とこ入の情なさ、それは〳〵物うきことなれども、なんともないかをして漸々に勤、また床ずきな客に出合ては、かねさへだせばわが物といはん計の仕形、床の口ぜつとなり、其はらだちには極て、床があらいの、すばりじやの、口がくさいの、鮫はだじやとのわる口、此世のみかはめいどまで、あるいは諸人をまよはせしの、出家に物を囉ひしこと、是第一の罪人と、五色の鬼が追ありく、そのかなしさを夢にも知らず、此世に有し其時は、客の多きをてがらの様におもひし故、かゝへの子供に話すべしと、ゐんま様にしばらくの暇を囉、此所に來りしこと、おもへば互にうき勤、地獄もおなじかしやくのせめと、二人は經帷子の袖をしぼり、あゝかなしや修羅の太鼓と、言かとおもへば太夫様おむかいとおこせば、二人塞あせになつてをき上り、さあらぬ體にて暇乞、源六おもひけるは、かわゆや香織が執心、三津にまよひ爰に來りぬと、なみだながら歸ぬ、

二、祇園の大寄歸の通路

過し夜のそいね、現に見へし香織がおも影、かわゆや我故三津にまよいしと、なみだながら本國寺の墓所へ參、南無幽靈、成等正覺、出離生死、頓生菩提と、念比に廻向し、總て夢はあふもふしぎあわぬもふしぎ、たとい信實にうらむるとて、そう〳〵たゞは居られぬ、殊に衆道は色のくけ道、ねたむ心も嵐吹、此身も

おなじうき命、一日を樂ぬは一生のそんなりと、歸は四條を東向になつて、駕籠を急げば祇園町、さし入月もよしのやがざしき、酒もおもしろく呑れて遊びよしと、爰にいかりをじつとおろし、座付からの大酒、人のせぬあそびをせねば、氣がつまると言こゐに、のせかくる太鼓役、扨も〳〵能御思案、夜の月晝の花見、若衆を若衆で見ます事、是定りのさじかげん、芝居の姿を其儘に、此をざしきに引つかみ、花と紅葉の大寄は、仁武此かたなき圖なりと、はや段々に廻文したゝめ亭主を呼、きなものたんとなげ出し、是兩芝居の總づめぞ、そこぬかるなと歩はだし、西と南へ人ばし懸、こんなお客はまれなこと、取はずゝなと夕間暮、廿夕懸のらうそくを、爰かしこにかがやかせ、待ま程なく兩芝居、一度にどつと内こんで、亭主袴のこしねぢらし、先に進で番付持、たからかにこそ讀上ける、それ傾城大州になり給ふのが山本歌門さま、おとわのまへのお姿は瀬川竹さま、梅がえさまには嵐喜世さま、花よの前には市むらさまと讀折に、座中一度に古ひ〳〵、そうした仕懸は神代のこと、扨君達は二形にならび、是から花車がお引合申せば、時ならぬ顔見世の座つきもいらぬ大酒盛、誰からさした盃の、行衛もしれぬあばれ呑、うたふやら舞やら、わけもなきさわぎ、とこふ言間にお迎ひと、皆々さらばの聲々に、別々に歸ければ、其跡のさびしさたゞも居られず、石垣町上から下へさまよひて、家名も知らぬ茶やのぞき、先見せ懸のお敵、鹽らしい目本して、たばこあがれと吸付し有様、はやはしご坂しと〳〵と二階にあがれば、まるあんどうにたばこ盆、菓子さかづきを段々に、また氣の替るおもしろさ、われを忘て上調子の古今ぶし、色まじりの小歌、彼女おつとつてのばち音、はじめはざつと酒呑すてゝ歸がつてん、此女一つ〳〵しほらしきこと見えて、家名を問へば八わたや、わしが名はおさきと答し風情、むかし如何成勤と尋ぬれば、神かけていたづらにはあらず、親の爲とて兒ときよりの、茶やづとめとかたれば、よし何にもせよ寐ねばならぬ、まくら〳〵と手をたゝき、びやうぶ立させ二たり寐の、もふよい時分と起なをり、かるふ帶してともし火そむけ、さしうつむきてなみだぐむ、是はどふじやと寄そへば、いゝかにわれなればとてあんまりな、見たふもないとふりはなつ、扨もつよい

おはり、終に輪のよね達に、是ほどのはりはなし、いかにもこちのあやまりと、手をあわせてくどき、ひそかに此女の様子を問ば、われは本輪の勤鹿のくらいに、桔梗屋の通路と申せし者、とちの太夫香織さまとは深いお中、能々見ればお顔本を見知、あまりのはづかしさ、むかしをかくしまいらせ候、先おまへさまには悪性な、こんな所へきやんすは、どふしたことゝ尋られ、それからしつぽとむかしばなし、今の勤のうさつらさ、語るにつけてもかわゆらしい心入、何を聞ても無常のうき世、

三、八坂の茶屋は幸神の引合

光陰矢をいるごとく、昨日の大寄もけふのむかし、ふりみふらずみさだめなき無神月七日庚申の日、七色ぐわしの賣ごゑもかしましく、折節末社御見廻申、是から八坂の庚申参、皆々おともに寺町二條、川原表を見わたせば、夕日の西の山の端にかたむき、はやくれかゝるを相圖とて、馬とやら牛とやらん言男を連、紺のぬのこにさらしもめんの中はゞ帶、尻にまきたる女房星のごとく集、行木の人の袖を引、何やらかやらさゝやきて、上下とへ友ない行、石のまくらにふろしきのべ、寐ると起るといそがしさ、是はいしや坊ならぬとて、東をさして縄手筋、こつぼり町や藪の下、上八軒に下八けん、祇園ばやし下川原、茶見せもけふは軒をならべ、陽弓の夜見せ加太夫ぶし、扨もにぎやかな幸神参り、佛前にはおもひ〳〵の、役者の紋名をあらわしたる灯燈、あたりをかゞやかし、中にも一つのてうちん、火もとぼさぬを立寄見れば、願主笹屋内ちやうと書たり、書はどふやら聞し名と、かたへなる水茶屋の女にとへば、過し比此所にて心中せし、笹屋のおちやうのてうちんなり、いとしやおちやうは十八、男は廿一の時よりなじみ、此男五條あたりにかるたの繪かきて、細々と渡世せられしが、三年跡の三月より爰に通ひ、よいことせられし茶代のつもり、銀三百七十匁にさしつまり、あつたら命をついさしちがゑて死なれましたと語、眞ことに花は香と言ものに枝を折れ、人間は色と言くせ物にいのちを捨る習なれど、わづかのかねに命をすてしことの不便さよ、さらばおちうがとむらい酒、いで其笹に押よせんと、皆大臣の下知に依て、さばかりの太鼓なれども、一きも殘らず笹やの見世におめいてあがれば、其まゝにはや御酒

かんはつたりと、言かとをもへばざしきなりの御あいさつ、まづこなさんは見たやうな、よう見ぬかをしていさんすと、さうじて茶屋のふう俗として、あいのおさへの手本のさはるのと言こと、たゞ能御ぞんじは、先此さかづきはこなたゑ預ますと、常々くわしやう達の御指南、御尤とわるじやれの有程言、それから二たりのお敵達、戌亥のすみと辰巳の角に屏風押たて、どなたからなりとはや〳〵との御まねき、神ぞ松原通二條川原、ひとつに打込心地して、あしばやに立出れば、高臺寺前の茶屋女、くぐりにもたれ高いびき、人音すれば夜半ごゑ、是見しりましたよらんせと、呼懸られてうろ〳〵と、爰よあそこよと見くらぶるなりのおかしさ、また二八計の振袖、取あげ髪に後帶、六十餘りの祖母連て、下向するなどたゞものとは見へず、心にくしと跡をしたへば、下川原を安井の前、松原通にさし懸り、此細合へ這入しが、其となり妙立と申尼、わづか十帖敷の庵二間に仕切て、四帖敷はざしきがまへに取、佛壇に二帖敷、ふすま引たて行明とぼし、定香盤にけむりくゆらせ、見せ懸は世すて尼、晝はしゆせうに衣きての旦那廻り、お腰もとをそゝなかし、たくはつの次手には、あるいはうらだな筋小路、色よき小娘を見たて、町内の若衆にあてがい、精進酒てづから酌せて、是を渡世とするなど、太鼓の傳吉案内して、庵の戸ことゝ〳〵と、人指ゆびにて音信、誰さまじや、傳さま扨もおひさしや、おさきさまのたんとうらみていさんすなど、はやおもしろいはなし、なんぞよいものはなきか、どん栗のづしの小はるは、ほうかうにいたげな、おしゆんは息災なり、室町の甚六が花代は濟だかと、取集たる物語、先此うらの振袖はと尋れば、あの人は此九月からの勤、お望かとはや茶の下をたき付、お位は銀さん十二匁九分、鴨め尻にはねさせねばなりませぬ、それは〳〵からき世の末、白人の身もあはぬもの、わけを知らぬ衆は、本のいらぬあきない、金は丸取のやうにおしやんすれど、上着下着の借賃三匁二朱、帶二布まで一夜切の賃借、のべ二折も錢二十、我物とては櫛かうがいと、何やらばかりが有合、きも入の上前茶やのはね、さん用して見れば口すぎ計と、白人の内證はだかにして、聞程戀はなかりき、

四、撞木町は口切の名物

過しことどもおもひ廻し、我病氣にかこつけ、親の心をもそむき此程の遊興、凡都の色里見ぬ所もなかりしが、伏見の輪撞木町近年の繁昌、何此里の風俗も心にくし、是をあそびのうち留と、明なばなどゝおもへば、中々夜も寐られず、こ宵は殊さら夜長く、くだかけを待とけしなさとかこちぬるに、夜もほの〳〵と明わたれば、嬉しや皆々夢おどろかせと、手をたゝき末社どもを集、けふは遊びの氣を替て撞木町に歩べし、案内せよとの仰、皆々ぬかつた太鼓の無拍子、さいわゐけふは東福寺の開山忌、都遊參辨當おさめ、それから直にと言、日影は晝の過、三枚がたのをろせ駕籠、戀路の里へ行人、面々がおもはく有やなしやと、はや墨染の明芝居、うら向よりすだれあげ、はいらんせはいらさんせと、呼込こゑもかしましく、爰にも有は借あみ笠、うなぎのかば燒でんがく見せ、溫飩そば切鯛のはま燒、ひげ久よしがあぶら店、花屋が見世には菊紅葉、はやざきのすいせん梅の室咲、是をもとめて入口の茶や、すだれの内小ぎれいに、はや大門の行當、揚屋は簾や清左衞門、總じて此里の風俗、先目利をふれて立並、其家々のお敵ばち音を靜おしならぶ、おもひ〳〵の物ずき、西の鹿戀は此里太夫、七八人も約束し、あいの障子をとりはなし、先此里のおさだまり、かわしびの吸物、無色の酒も慰と、となりのざしきをさしのぞけば、西國がたの侍と見へ旅懸の裝束、亭主罷出、女郎樣はいづれと詮議すれば、待かねたる顏つきして、とてものことに少も早ふ呼でたまはれとあれば、さし心得て、毎も御隙の女郎取よせて、はやさかづきもはじまり、おてきが呑でお客ゑさせば、おしいたゞきて内儀の納とさしもどす、あまりみぢかいお酒振、も一つ上ませふと手をたゝき、何ぞお肴と申せば、いや〳〵御無用じや、國許にてすゞきも鯛も自由にたべる、寐所はまだかと言、兎角御心まかせと床に入るれば、先帶ときてはなかみ手本へ取まはし、いま一つのまくらちかくよせ、女郎の身拵のうち待かね大あくび、扨もおそしと舌打の百もして、國本の女房ならば、はよふ乞と呼にと獨言いふ内に、門の戸けわしくたゝき、何も御本陣へ御出と申、弓矢八幡殘念と歸給ふなり振、つとめの身の物うさ、高下共におなじこゝ、心根をあわれみし折節、す足にせつたの音高く、かぶろもはながみ目にたつ程入、揚屋入の

飛あし、のふれんの切おもて諸事のこなし、さすが都近く、少も見おとす所なし、それから酒ごとも各別になつて、おもしろさまたなきたのしみと、源六はたち花や遠州にをもひ初、かりねのまくらならべしが、床のうらしつぽりと、かりにもいやしき言葉なく、袖の留木もつねならず、じつと手をしめたる計にて、人こそ知らね上帶も、有のまゝなる仕形、遠州もおもはく違、いづれがつてんのゆかぬこと、おもひながらにくからぬはなし、またの日のしゆびも、前にちがわず、互に心の下紐は打とけながら、一度もわけたつる事なきなど、女郎も次第に身はじらはしく、なれてもつらき年月、はや一とせをおくり、いつしか打とけての物語、たがいに同穴と僞なきあいさつ、傾城の祕傳うその實、まことのうそを打明て、互に諸白髮と皆實事の床入、源六申さるゝは、それほどの御心入ならば、僞なきとの誓紙を望まれ、其まゝ書申べきを、是はいらぬ御望、御心に任せ千枚にてもかき申べし、去ながら爰が勤の實のうそ、かたさまを未塵もおいとしうは思はず、此程君の御異光にて、親かた揚やの爲とおもひ、外なきやうに申かわし候が、眞ことは御緣なきにや、それほどにぞんぜぬと申、そもや〳〵いわれまじきあいさつ、あつぱれ遠州なればこそ、前代未聞の女郎、我此女の心をひき見んため、四五度までは打とけざりし、是皆右の返方としばらく工夫して、然らばわれをおもはぬとの誓紙望と云、遠州なみだをながし、此輪へ幾たりの客も多けれど、女郎のかたより客をふること是さだまりごと、かたさまにははじめて相なれまいらせ候より、姿あでやかなるに、まして御心のなさけらしさ、勤の身にて言もはづかしけれど、此男ならば末かけてとおもひよりしに、にくや逢事の四五度には重なれど、御心の下紐打とけ給はず、其時のわしが心、口惜や客にふられて、最早傾城の一分もたゝぬと、おもひし心を取直し、うつくしう勤て、ながれ行月日のかさなり、角相なれまいらせ、此起請はこなたより望たき折しもなれど、爰が勤のあさましさ、皆初床の御うらみに、心にもおもわぬ御ことを申出し、大かたの客ならば、是がながき御別となることなれども、思ひの外におもわぬとの誓紙、われ勤の内にかうしたこと、はなしにもきかぬこと、皆かたさまの御心にほだされ、あつたら傾城の一ぶん

をすて丶、それから僞なき起請を取かはし、末は目出度ねびき松、ときわの色の大盡さまと、揚や一家は悅て、月々の紋日もつゞきも、皆源様の御請取と、末社の智恵も引て入心中、

風流夢浮橋卷之三終

風流夢浮橋卷之四

一、咄の多飾萬の乘合

實子を思ふ親の身、隨分見のがしにして、内證にての異見、度重りてもかいるの顏へ水遊び、兎角起請をかかせと、一門中の談合極まり、源六を呼付きびしき異見、畏て候と熊野の午王に七枚起請、身の毛もよだつ有様にと丶のへ、太鼓の傳吉に血判せよと頼めば、いやなことながらおなじみの旦那、是非なく血判、もふはやすんだと直におし込鐘木町、親達も我を折て、兎角子をもたぬとおもへばすむ、是非に及ばぬ世の中と、了仙ははらをたて、此上は未來までの勘當と、白晝に追出され、返す言も泣々立出、しるべのかたに立忍べども、世わたる業をしらぬ行する、はりまの飾萬に有人、惡性の出合に頼もしき言葉を殘されけるをおもひ出し、是をたのみに一先飾萬にくだるべしと都の別、へだてなき友または遠州が心入、彼是をもひ出す程なみだながらに、烏羽海道を淀の大はしにかかれば、日比目を懸し太鼓傳吉、茂兵衞、平四郎など

いへる者、都にかくれなき色の小太刀とて、終色里のつめひらきに、一度もふかくとらず、年比を目を囃し事、此時せめて見おゝり申さではと、皆々心を一つにして、跡をしたいて追付ば、日比を忘ず是迄の心ざしこそ嬉しけれ、扨は遠州は此事聞つるかと尋ければ、御身の難儀は苦にし給はず、なんぞや色の付とゞけはと御異見申せば、日比はきかぬ男なれど、是は尤と世に連ての有様もいたわしく、幸山崎への戻り駕籠、是より末は玉ぼこの足本もほこり埋めば、ひらに召給へと言へば、かた〳〵の心指は嬉しけれど、今此なりになつて乘べき所にあらずと、わらじにきやはん引しめ給ふ有様、皆々泪をながし、かゝるわけ知の大臣様、おもへば口惜の勘當やと、とし比たんと御恩に預しことなど、おもひ出してぞなげきける、扨はるばるの道、路銀などはと互に巾着紙入をさがせば、三人の中に二朱判五つとこまがね六匁三分、せめて是なり共とさしいだせば、此體になり候へば、先預おくべしとのあいさつ、此上は御身のつゝがなきやうに、隨分しまつの夜をこめて、知るべの方を御頼、末はめでたふとおいとま申、山崎の八幡ふしをがみ、漸ゆけば西のみや、爰の守護神ゑびす三郎殿も、たらちねの身捨たまひ、此所に宮作せしとかや、わが行すゑも何とぞ歸洛なし給へと、心のうちに念じ、世を浮旅の海山を越、はりまの飾萬に尋行、外の軒よりはむね高き、小松やの三郎四郎殿に尋、門のうちを見れば、此霜月髮をき比の子をいだき、さざんくわの一ゑだをもたせてもなきやまず、と丶さまのそばへ連てゆけとせむる、姥は泪をながし、と丶さまは佛さまになつて、やがてもどらしやると、漸にすかすを源六たち寄、こなたの御亭主三郎四郎殿はとへば、過し十六日食せうにて、おはてなされしと語る、實に中院と見ゑて、臺所には四十九の餅つく音、あぶらあげの香をり、あらめ刻音聞に付ても、世の中の無常今更驚べきにはあらね共、時こそあれかゝる折節まいり逢かなしさ、外に一夜を明すべきかたもなく濱邊に行、幽なる船頭のあばらやに船待し、大坂へ心ざし、いとゞ初旅の心細きに、旅より旅の用意、伊勢參宮の人も有、難波の米や、あたごのお札くばり、高野坊、京のごふく屋、うたびく尼、西國方の飛脚、十人寄ば十國の者、乘合船こそおかしけれ、船頭はさあ銘々の心いわゐ

船玉の御初尾と、ひしやくふつてあたま數よみ、呑ものまぬも一等に、七文づゝの集錢出し、かん鍋は無し小桶に汁わん入て、海老ざこのさかな、取いそぎて三ばい機嫌、皆々お仕合、此風まともにて御ざると、帆を八合にもたせ、はや一里半も出せしに、因幡よりの飛脚横手を打て、さてもわすれたり、島の才府に錢五百、下帶一筋うら口に懸ておゐたと、磯のかたをながめ、はよふもてきてたもとわめく、それが爰から聞ゆる物かと、船中こゑ〳〵に、あれさまは金玉は有かとわめけば、彼男念を入てさぐり、成程々々二つ御ざりますといふ、皆々大わらいして、りちぎは何やらのから名と言がまことゝ、おもひ〳〵のはなし、船頭は片はだぬぎての三枚かるた、皆々打寄ておせ〳〵と、けつきにまかせ錢の有切、跡先にはりこぶしをにきり、高野坊はねむり覺しとの言わけ、あたまに十文、跡ばり三十の錢も左の手を懸、一寸ならば中々はなすまじき風情もおかし、船頭はゐてに帆一ぱいのせうぶ、座中の錢は我がものと、札切手本もはしから、一貫の錢ばらりと亂し、洞前はつよしとはち卷して、まきちらす手前がるた、信心きもにめいじて三度いただき、南無かるた大明神と、ねがひをかくるもうたてし、そりや見たか三枚蟲、七兵衞は八寸、そこ引なととつてしめ、坊さまのは大名九寸、いとしやなんでもとどかぬと、兩手を懸て引込ば、興覺たる顏つきし、拙僧はばくち嫌らひなれど、何もめさるゝにすまして居るもいなものと、はりごとはつたれども少の錢、是をばわつとはづまれよと、所望するもおかし、ごさくさする内にはや大坂の川口、入日もずいけん山の松の葉にかゞやき、國々のなまりごゑもかしましく、船頭は船よそいしてじやこばに着、扨もまれなる順風、互に能仕合御緣次第と別ける、

二、涙の種は墨染の振袖

爰かしこにさまよひ、漸々ゆかりをもとめて、高津のあたりにうらがしやを借、世渡る業を知らねば、次第に内證さびしく、京を出し時親の慈悲とて、母のかたより山崎まで人を追かけさせ、金子十兩給わりしを、何までも有物の樣におもひ、近所のうばかゝにも毎日食くはせ、扨もよいお人と有内計はついせう、はやなくなるとしやばで見た彌十郎、是がうき世のおさだまり、昨日と暮しけふとくれ、明日の身の上かなし

くはやくはねばひだるき事を覺て、古合羽の多葉粉入、百を七文の縫賃、心ぼそき糸仕ごと、是も命のつりをと、ひとしほ古郷なつかしく、いとゞ雪毛の空さむく、ねられぬまゝにわれいままで遣捨し、金銀算用して見れば、わづか二とせの内に、小判七百兩銀九十貫目也、心のまゝにまきちらし、殘る物とてはわけ有ふみ傾城の起請、京に居る内夢にも知らぬ、しち物といふことを覺、今は功者になつて、まげると言異名までを習、金物とては陽弓の露までをはづし、何もかもまげ盡して、身のまゝになりはて、たな賃もはや五月分重なり、跡先おもへば夜の目もあわねど、男は氣からなますはすからと、手拍子打てあわぬ謠も壻のあかぬ世の中、浮世小路に宿を替、疊二疊に鍋一つ、是でも住めば住ものと、あかしくらせしに、はや近所から指ざし、あの人は都島原祇園町をおどりありき、川原の左大盡とよばれ、色にもかねにも親にまで、見はなされし人と貌を見知所から、口のさがなき浮世小路、爰に通ひし若人ども聞がけにしたいきて、やりくりのふみ賴めば、われもむかしは此道の、ひよく連理の根心をわきまへ、皆色ごとに身を捨し者、いか成女の心をも、文がらに腦ませる仕懸、いかに玉章なればとて、僞がちなるはおのづから戀も叶はず、誠を盡せし筆のすさみには、自然と肝にこたへ、もだ〳〵さすること、執行がなければならぬことゝ、あたまからぢまん、わが賴れしふみにては、如何成心なき相手なりとも、おそらくは此戀おもひのまゝにと請合、一通を十文づゝの筆代、兎角捨らぬ浮世、いつとなく時花、此所の忍び色、付屆のふみまでを賴、其日を輕渡りしが、あるときおもへばけふは霜月廿日、かをるが三廻忌、せめて幾玉の寺町に立越、無緣の寺の手向水も、我心ざしの一ぱいと、たち出行ば難波女の仕出しも、かゞ笠のうしろつき、御所染のかつぎなど、都も替る事なしと見すてゝ、鹽町にさしかゝれば、幾玉の八幡境内の見世物にぎやかなこと、丸やがせうぎに腰を懸、さても氣のはれたこと、是は〳〵ととなりのせうぎを見れば、年比五十餘りの尼、いまひとりは十五六と見えて、色白くゐりつきのじんじやさ、いかにしてもたゞものとは見ゐず、あの黑髮を何國のなさけ知らずがすりしなど、人もやとはぬこと案じて居れば、通り懸りし糞付馬、ひざを折て打まきしにをい、是は

ならぬと皆々はなつまむ、折節彼あまはなかみ袋より伽羅を出し、火入の火合能してたかれしに、其香包の紋三つらてうと丸がしわなり、あれは三とせ過にし三月に、小車と言木を入て、かをるにやりし香包と、氣を付て見ればかぶろの早野なり、われは早野ではなきかとあみ笠をとれば、源さまかおひさしや、太夫さまの死なんしては、ふつ〳〵御音信もなく、おまへばかりかたみさまも見ゑずと、袖にすがりてなきいだす、扨なんとして姿を替しぞ、御ふしんは御尤にて候へども、太夫さまの死なんしてわしが便なさ、何事に付てもかなしさやるかたなくおもひ、ある夜の夢に太夫さまは、あさましき白裝束、我やいばにかゝりし罪遁がたく、修羅のくるしみ、われは何とぞさまを替、跡よくとむらへ、またわがみだれ箱に、かすがの御作のくわん音樣、是を大坂の蓮性寺とやらんにおさめてくれよ、此御寺はとゝさまの御てらと聞及び候まゝ、返々もわが跡念比にとむらへと、其まゝ夢覺まいらせ候ゆへ、色々と心を盡し、過し比輪を忍出、是成尼君をお師匠と賴、かやうに姿を替、幸けふは御ねんきと、師尼諸共蓮性寺にまいり、香華を手向たゞいま歸さにてさむらふが、御まへさまには何とて、かやうの御姿にはと、互になみだをながし、老尼も墨染の袖をしぼり給いぬ、さて住家は何國と尋ければ、是なる師の尼のおはします御庵室、都のひがし師子が谷に候故、是にかしづきまいらせ候、御姿を見るに付ても、大夫さまのこと今更おもひ出し、むかし戀しやとなげきぬ、源六も泪をながし、あさましき姿にて、あい見ることのはづかしけれど、わが身もしさいありてかやうにをちぶれ、けふはかをるが三年忌、せめて無緣のお寺へなり共と心ざし、ふしぎに廻逢こと、互に命もあらばとわかれぬ、

三、うらみも戀も紙子一官

扨もすまぬなり振、我ながらはづかしきは、寸くわんの紙子に丸腰、むかしの物とては名こや織の帶一筋、因果と器量も人のめだつ程の生付、八軒やの留女、をなご食乞までうるさきほど見返せば、猶あみ笠をふか〳〵と、此なりになつても都なつかしくそれよりあしの乘物手のやつこ、心のまゝに歩、平かたの南良茶もおもふ程はくはれぬ身上、漸々くづは橋本の里に一夜をあかし、夜の明るを嬉しやと立出しに、宿は

づれに親子三人の食乞、男は四十餘り、女は廿二三と打見へ、いとけなき子を中に寐させ、古きむしろを男とわが子に引きせ、女はだのあらはるゝをもかまはず、けはしき朝風につや〳〵寐入しを見て、實に夫婦いもせのかたらひとて、あのむしろをさへ二たりにきせ、わが身をかまはぬ心入、わりなき中こそ見よげなれと、なみだながらに伏見の里、いなりの道は人目もはづかし、此身を忍ぶ竹田越、とろ町のやねつゞき、あげやのうらに晝床の、あせくさきふとんほしたるもほのかに見へて、爰も輪のゆかりとて一入なつかしく、むかしのなじみをしたい、みゝ塚のをろせが方に忍び宿、爰の繁昌むかしに替らぬ有さま、夜船心懸ての早駕籠かと見れば、是も入日の忍大臣、まことに中位の遊びには、鐘木町なくばことのかけるなるべし、爰撞木町のたちばたや遠州といふ女郎、京の大臣新在家のげんさまと言客に二世とかたらい大かた人も知るぐらい淺からぬ中なるに、此お敵いかなることにや打絶て、はや一とせも音信なく、逢見ぬことをふかくなげき、諸神をいのり、外の勤のさわりとて、内よりの異見、ながれの身にも信實の戀は各別と、かどの六助が語れば、それをまだしらぬか、源と言客は都にかくれなき大盡、此方などゝ友だちなりしが、かわゆや親の勘當にて、いまは行衞もしれぬこと、幸けふは遠州に、一はいすゝらせ慰まんと、はや彼里の出口の茶屋、人目を忍ぶ深あみ笠、局かうしに立懸り、たばこのめとはかたじけない、によほい〳〵とうたふこゑ、〳〵らさまさうなとはしり出、扨おひさしやげんさまは、何としてやらふつ〳〵と、此里などゝはきさんせぬ、文をやりても返事なし、かわる事はなきかと問ば、其げんさまは島原の太夫といへるくされ蟲、互に替なかわらじと、最はやね引の御相談、あんな男をうか〳〵とふかいり仕給ふ遠州さま、ちとをはまりと言捨て、揚やのかたへあゆみ行、遠州はしばらく泪にむせびしが、なをもおもひのほむらをもやし、硯引よせ筆を染、先うちつけに同穴とかはせしこと、はやくもむにはなされしと、おもへば泪のながれの身、いかに增花有ばとて、是程まではよくも御見すて、御音信のなきことを、若や内かたの御しゆびもあしきかと、毎日佛神をいのり、外の勤も身にそまず、にくや其心を知らず案じわづらい、兎角戀といふく

せ物、つとめの身をもゆるさぬことゝ、口をしおもはれ候、わしは此夕暮、兎にも角にもなりまいらせ候まゝ、隨分御さかんにて増花のね引、末はめでたからんと認、かぶろが傳にをろせやどへ遣し、くるゝまおそしとはし居して有ければ、はや八わたやの目利をふれ、われも〳〵と押并、其折節に紙子着て、古あみ笠に竹の杖、便りなき風情してさしのぞきし顔、遠州はつとおもひ、禿を付て見すれば、うたがいもなきげんさま、爰は人目の重ければと、中戸のこしかけに呼込、御手を取なみだ組、何とてさほどまで御身を持さげ給ふぞ、御音信のなき事をうらみ、此程御ことにあこがれ、いま一度の御げんをと、所々のかねの緒に、御長久を祈まいらせ候甲斐もなく、かくとの御知らせのなきこと、今更恨ても專なし、御身のつゝがなきこそ何寄の嬉しさ、兎角ゆるりと逢まして、何事もつもるつらさを語らんと、毎の揚やへ人をそへ、はやふをこしと言ば、打しをれたる聲して、かくまでなりはて逢見ること、はぢを知らぬと外のあざけりも身にしみ侍れども、けふはをろせの七兵衛方へ忍びて行御ふみを見るに、われ此體になりはてしこと御ぞんじなく、數々の御うらみ、此夕暮は露のいのちも消給ふとの御こと、若けがばしありてはと、はぢをもすて爰にまいり、是非なき對面、よ所の見るめのはづかしさよと、かけ出給ひて姿も見えざりき、

四、昔戀しき時の花賣

ひとり居て果報を寐待と合點しても、次第に朝夕のけむり、たちぎへのするくらいになれば、いたましからぬ友達も、見ぬ貌するが世のならい、げに地獄にも近づきと、わが幼少の折から見覺し、姥がをとゝの權兵衛、谷町の邊にうらだな借、うへずかつへぬしんだい、是に便りて朝夕は付食の約束、腰ものされぬ二階住居、隣には火打の音あか子の鳴こゑ、紙帳をもりて夜もすがらくわれし蚊をうらみ、二布ののみ取片手に、佛段の小錢をとり出しつまみな買など、諸事物せわしきうらだなにも、夫婦有者はたのしみに、南まくらに寐むしろしどけなく、過し夜のきのへねもかまはず、よい事したやらかゝは體卷して、枕重げに見ゆれば、人にかゝる身のかなしさ、花房德庵老へはしり、藥代のあてはなけれど、せんじやう常のごとくのかざぐすり、やくわんに水仕懸、まづ頭せんじのあが

る内、近所の酒やに行、ならづけの瓜かた船とゝのへ、はすの葉に包で、口がわるかろふ、茶づけのさいにと氣を付、頭痛がしまするか、腰を打たふかと言ば、鬼のやう成かゝも、源六がやさしき心ねの嬉しく、諸事に心を付ていたわり、何とぞ身すぎの有べしと、割松をあきなわせ、隨分情に入ても、仕なれぬ業のはかどらずゝある時天滿のくさ花やに行、時折節の花賣と、破れぢばんに茶せん髪、ほうかむりして貌かくし、昨日のもけをちんちろりの小半酒、一ぱい呑でよい機げん、新町の通り筋を賣行ば、職人の手間取と見えて、正月ぬのこに借り着の羽織、小倉の帶を前結、盆せつた取出し、はな紙おもひ切て折込、是々花とゝのへませふと、折からの草花二三本調、此花はこちの花畠に有といふて、お敵をだましますとあしばやに行もおかしく、跡をしたへば東の方より、扇子やの靜ゆりかけて道中、おれなしの二つ折髪さきながく、うりざね貌のうつくしく、禿に源平香の道具もたせ、ゆかたに歩なり振、またなき姿と立とまらぬはなかりしに、彼お敵わがおもわくは粟野に有、なんの太夫も見たふないと、貌振て行過れば、是々丁子小紋のあさぎ染、いまのはたしか七藏樣と、鑓手を付て袖ひけば、けふは九軒に友達共が大寄の言合、是へ見まふて戻りにと、しら〳〵しいあいさつ、先あはんしてからと引留れば、漸くに立歸り、局の口に立ながら、米のねは高けれども、よふふとらんしたと、似合相應のあいさつ、女郎はきかぬ貌して、羽織をさしやんした、とてものことにゆきがみぢかいと言ば、扨は借ぎとおもはしやるかとはらたてるを、隣局より取持、いやあふなしに戸をさしけるもおかし、いま此なりになつても、いやらしいははし傾城、わきから見てもあせがでると、ひとりわらいして、日毎にあきなふ花賣も、埒のあかぬうき世、

風流夢浮橋卷之四終

風流夢浮橋卷之五

一、廻り逢たる相かたの友

寒菊や今年の花の賣納と言發句、さてもよい口と、都の物さたなりしが、いまは此身にひつたりと、降雪の下の錢、花に心のうつらぬ諸人、比は極月廿日餘り、毎の輪に賣行しに、折しもはげしき寒風、雨まじりのみぞれ雪、あし手も涼わたり、出口の小間物やにたゝずみけるに、物の見事な御大臣、よい機嫌になつて立出るに、たゆふ引船やりて禿の門おくり、跡より料理人が年頭の獻立もち、若白魚がござりませずば、お吸物はかるふしゃみ、御本汁は鳩のすましにいたしませふと、物せわしき折節も、仕まふたやの大臣、扨もうらやましや我もむかしはと、ひとしほ口をしく、鹽町をひがしへ、寒菊は〳〵と賣行しに、必せつきの夫婦いさかい、四十計の女の聲して、もちつく事はとてもならず、せめて正月三日のふちかたと、薪のあてはござるかとわめく、其隣には人けわしくはしり廻り、氣付よ水よといふ内に、もはやかなはぬと泣いだし、極樂を忘りやるなとすゝめ、人間一度はとおもひながら、余所のなげきを聞すてゝ行に、南側の酒屋には、松ばやしの稽古とて、寒聲をつかい、哀いにしへをおもひ出ればなつかしや、我も都に有ならば、おそらくはと、おもふ所へ、拾貫目箱のかたをならべ、二三十程つゞきぬ、これほどまれなる雪の下の金も、有所にはあるものかなと、無用のよく心も出來しに、跡より是々と呼懸る、誰じやと見ればむかし都の惡性友達、替名をしげとよばれし者、何とて此なりにはと問へば、今さら語もはづかしけれど、そちも知らるゝとほり、何に不足もなくくらせし身なれども、世の中にせまじきてあそび、わづかの事よりかうじ、大分の身上を打込、金銀諸道具は宵の口に打まけ、二ヶ所の家屋敷まで人の物となし、ひとりの母をさへはりまの伯父の方へ賴み、もはやこもかづくより外はなく、せめて京の地をはなれ、行先は天道次第と、過し比大坂に下しが、實に性に食絶ずとかや、太鼓の平四郎去々年のくれに、わづかの借銀に似判して、京を夜ぬけせしが、ふしぎの緣にて廻り逢、此者の請合にて、西横堀ざいもくやる、木引に有付しとはなせば、源六

なみだをながし、互にあさましきなれのはて、此上は隨分身をすて給ふべし、かせぐに追付びんぼうなし、と、またせうばいを替、行當りの與介を賴、新町口の夜駕籠中間に入、忍大臣のつまみがね、是をめあてと語ればさいわいかたも能棒組と、けふよりかごのかたぎ初、互にわらいて行末は、扨もうき世じや戀の道、うらが氣まゝになるならほんにとはおもへども、世渡りとおもふ心にうきことなく、またくる春の花の姿、角も替物にや、

二、待間の一すいかんたんの枕

難波江やあしのかりねの新町は、さても自山な色所、其上松は七十三、梅より鹿のおきふしの、うきを重ぬる局女郎、二寸一寸五分どり、いまのうき世の人心、わが分限を打わすれ、むめのまつのと至りせんさく、是皆きん花のたのしみ、いつしかいまは九軒町、闇の夜にさへ通られぬ、人の心の玉作、いなりの茶やを隱居所と、はやらかししもむかしになり、たゞも居られず清水の、一日切のかし座敷、色はなけれど氣のはらぬを取ゑと、みな〳〵よい機嫌になつて、おもひ〳〵の藝盡、たのしみつきて哀情多しと、たちまち入相のかねにむねを驚かし、提燈のむかいに歸を催し、中にも町のおしよくと見へしをさき立、丸頭巾に撞木杖、言てもいわいでものことにでつちをまねき、何とけふは誰もこなんだか、手代の長左はもどつたか、猫にめしをくわせたか、ことしの天滿祭は九月じやと、跡先あわぬ事をとりまぜて、よはぬふりを仕ても、かくされぬちどり足、今宵計か明の夜も有にと、たつみあがりにうたいつれ、太左衞門ばし筋の色茶やを、顏に扇子をさかさまにあて、あそこよ爰よとさしのぞけば、若衆どこへも寄ますまい、おれは酒にはゑひませぬぞと、おしよくのあいさつもうたてく、漸々疊や町にさしかゝれば、酒のゑひも覺はてゝ、花の雫か身を知る雨か、ばら〳〵と降出し、空眞黑に車軸をながし、ちやうちんの火も消る計になり、むかふよりかさ四五本にぼくりそへ、引かたげ〳〵、くれ共々よそのむかい、是はならぬとかけ出せば、駕籠やりませふ駕籠々々といふ、まことや錢はてうはう、はやをうやうに乘付たる風情、是大盡さまと、うその源六先がたをしめ、お所は何國、北濱過書町、合點そりやかたせ、お影でなければたゝぬわれら、よきやうに御了簡を賴ます、こ

れやまたげじや、みぞじやと言内に、約束の門に駕籠をすへ、かごにはなにもござりませぬと、先おさだまりのあいさつし、ふところより合羽のたばこ入、五寸にたらぬきせるをくわへ、おうばさま火一つと吸付、駕籠錢待て居れば、何の間にかは相かたの與助もうせ、乘手の旦那も見へぬ事、是はふしぎと樣子を見れば、其家居世に有人と見へて、口うとが包丁、丹波守がうすば、まなばし、鐵がはらけにとうしん一筋より入ず、諸事其ねつさ思ひやり、藏の内のきんぎんはかびてあらふと、人もやとはぬ心遣に時移、十二三なる腰本はしり出、わが賴まいらせ候御かた、朝夕御まへさまのこと、御わすれなく候に、ようこそ御入と手を引て一間に行を、是はふしぎと能々見れば、われ世に有し時、島原にて大坂やのかしわぎなり、あんまりで物がいはれぬ、先そちは何とて爰へはきたられしぞ、さては三とせ過にし春の比、はじめてそもじさまに相なれし事、御覺なされ候や、それよりのち御ことにあこがれ候へども、桔梗屋の太夫に乘替られ、口惜くおもへども、さすが勤の身のかなしさ、甲斐なき月日をおくりまいらせ候、先こなさまは、何とてあさましき御なりとことへば、源六も此返答にあぐみ、さればそもじなど御ぞんじの通り、こうした業は言に及ず、終にさもしき事けがにも覺ゑぬ身なりし故、としも月も忘ず、去々年の七月に、輪中の町にて、道念がをんどをとりしをどり場へ、太夫達を友ない、くわりんの胴のさみせん、かたにかけし計なるが、下しよくはなりやすく、われ親に勘當請、身の置所もなく、所々のゑしきに出、よい〳〵ぶしの讀賣、とき折々の替り番付、または幸神の七色ぐわし賣ても二月に一度、何をしてもからき世の末、地獄にも近付と、われ高つにての相宿や、行當の與助と言者を賴、かご中間となり、八けんやの總右衞門でも乘てと名が付けば、旦那さまとうやまい、心にはおかしけれど、何もおひげのちりくさばなしするも、わらじの錢でもはづませんとの心遣、それは〳〵錢ほどもうけにくき物といま身に覺、此智惠が二三年はやふ出ると、かふはなるまい物をとこしかたのざんげばなし、今宵中にはつきぬことと、兎角ゆるりと寐もの語りと、ひさし振の床入、むかしがおもはれいな物じや、何と八千代かかぶろは居寐むりして、鼻へこよりを入くさめさせてわらい

しが、いまは勤にも出るかと、此なりになつても、そこ〳〵に氣のつくはなしも鹽らしく、次第に夜も更はなしの聲も聲まり、枕二つに一つ夜着、しどろにうごきてなくやらわらふやら、うんすんとそのこゑただならず聞へければ、やれ〳〵源六夢見たか、目をさませと言こゑに、驚きて見れば駕籠の内にほう杖、大あせになつて扨は夢か、南無三ぼうむかしをおもひ出し、つく〳〵寐入し内に、おもへばかんたんのまくらかなとなみだながら語ぬ、

三、昔をあらはす實の心

順慶町を西手へ切、わたなべばしをせり合ほど、人多くあつまりしを何事ぞととへば、さればこそいまの人間は、慾に手足の付たる物かとおもへば、あの札を見給へと言捨て行、まことや橋の上にたてし高札、夜前上町より此所へかごにのせ申候御人、御貌は見しらず駕籠よりおろし、そのまゝ宿に歸見候へば、紋びろうどのかみ入、金物はくいちやうの一つ紋、此中に金子百二拾切、龍の金目貫、女筆のふみ五つ、その外花車道具品々、態書殘し申候、此主さまへ無二相違一有のまゝ戻し申たく候、いつによらず高津の花町、うその源六と尋給へとよむ折ふし、爰に有合人の内、其まゝ高津源六かたへ尋行、夜前ひろはれし紙入の中に、新町かしわやが式部、十五日より十八日までのとゞけぶみはあらずや、萬のものは惜からず、其ふみ計を給はれと言へば、文にかぎらず一色とてもとるべきことにあらず、皆々返し申べし、うたがふにはなけれ共、十三日の日付の文言はと尋ける、それは愚覺なれど、たしか打つけて、今日は御ぞんじの通り約束にて、住よしやに居申候、京の衆のよし一げんにて候、一座には扇子やの靜どの、その外枡やの、鹿戀二人、宮子路、筑前、太鼓五人、其さはぎやう常ならぬことにて候、われらあい申男、替名を吉とか申候、本名は知れ不レ申候、床のおかしさ、もはや此あとはゆるせ、いわれぬとあれば、源六も大わらいして、扨も〳〵面白き御あそび、此道のとゞけぶみならば、人に語られぬ事のみと、彼紙入をわたせば、ふみ計給わり金子はそちへと言ど、いや〳〵無用の御しかた、此方へ取べきことにあらずと、さらにほしがる氣色なし、尤札たつる程の心入、さも有べけれど、外におとしては手に入ことなし、此ふみさへあればと、金子遣しても幾度も

返して取合ず、さても珍しき心入、常の者にあらずと、むかしをとはれて、今こそかゝる駕籠かきなれど、本は都の住居して、色里のつめびらき、次第に功者なる程、親父に見はなされ、世わたる業の是悲なく、淺ましき諸作をすればとて、筋なき物を取申べきやといふ、むかしを忘れぬ心入、あつばれ男とやうすを尋、われは天滿の志水町、帶や甚兵衞といふ者の世悴甚右衞門と申者、扨々いさぎよき仕かた、末たのもしき心入、此上は兄弟のけい約すべしと、取あへずのさかづき、千秋萬歳といわゐ、貴殿の身のうへは拙者引請申べし、さりながら我々とても親懸りのこと、心のまゝにもなりがたし、先そのうちはいつまでもと我が家に友なひ、いにしへをおもひやり、何かに心を付ていたわり、そうじてうき世は當分しのぎ、馬に乘までの牛の網と、ふら〳〵日數をおくりし内、ごせう谷のふる手屋に、見世をまかする手代を尋、後々はよろしき事と、甚右衞門が世話やき、末たのもしき事なれば、隨分氣に入やうに勤給ふべし、人たる者の生付いやしからず、心ざしすぐれてかしこく、人の氣に入かねぬ風俗と、甚右衞門も悦て、追付めでたふ立身をと、吉日をゑらみ、はじめて奉公の身とはなりける、

四、堀江の瀨ぶみは因果の緣

實世の中に旅は道連世はなさけ、人の心は眞ことをあらはし、日比はつらき世わたり、うその源六とよばれし身も、帶屋の甚右衞門が情にて、其名をいまは彌兵衞とあらため、何ごとをまかせても仕かねぬ男、萬勝手の見まつめまでかしこく、庭の角にはき捨る、紙くずまで集て、それ〳〵によりわけ、能かみはじぶかみにはり、あしき紙はくわんせより、諸事に氣をつけ、少の買物をも血のたるほどねぎり、たゞも貰やうに調、古手屋の白鼠とよばれ、いつしか孫兵衞の氣に入、器量はよし、追付身をもつべし、何をしてもはぢにはならぬ、人たるものかん難をせねば、後がわるきぞと念比のあいさつ、身に入て嬉しく、女の好る男ぶりも、いつとなく身にかまはず、戀にはふつ〳〵あきはてし心から、明暮律義にお爲第一とつとめ、かねのたまるを嬉しく、萬事彌兵衞にまかせ、近國買出しに行ども氣遣氣がなく、大分の金銀をわたし、後々は彌兵衞を養子にする内談なりしに、孫兵衞むすめおさんとて、今年二八の振そでも、ふさがで通す秋風の、

いまださだまる緣もなし、いつとなくおさん彌兵衞に思ひつき、明暮心を盡し、魂身の内をはなれ、いたづらは言葉にあらはれ、何とぞしゆびもあれかしと、付々の女もあわれにいたましくおもふ内にも、銘々に彌兵衞を戀忍び、物縫はりに血をしぼり、心の程を書つかはし、はすはのたねは人頼して、男手の文を袂になげ込、うばはおこさまをかこつけに、彌兵衞にちかづき、わがおつとをそしり、日本一の役にたゝず故、家をやぶりし時暇の狀をかゝせ、いまは氣さんじな男なしと、いやらしいとはず語、下女はまたそれぞれに、ちやをあがれのたばこの火のと、彌兵衞に氣を付るもうたてく、あなたこなたの文の返事にあぐみ、うちの勤も身にそまず、有時彌兵衞志水町に行、色々のはなしの次手に、内のしゆびをかたれば、本より甚右衞門は惡性者、さてもうまいはなし、たゞは寐られぬをせ〳〵と、はやそゝりだす茶やばなし、彌兵衞はすゝまねど、いや〳〵堀江の丹波やは、外の茶やとは各別にて、ことにむすめのうつくしさ、今宵計は是非々々と先にすゝみて四つ橋の、夜るのけしきのおもしろさ、月は一つに影四つ、四方へ移る月の夜駕籠に乘つれて、はや丹波やの門口に、亭主も華車も立出て、甚さまお出ともてはやし、二階にあがれば、はじめてのおつれも有と地そうぶり、花車はざしきに罷出、是成者はわたくしむすめ、名はおつまと申ます、それさみせんよ、おさかづきよと、能々見れば黑谷にて、我初戀のおいとのかた、はつとおもへどふしんはれず、おつまも今更きもをつぶせし顏つきなれど、それかととはんよすがもなく、勝手に行て工夫をし、おもひ出せば四とせ跡、かたみに囉しこがね目貫、守袋より取出し、ちやわんに入て何となく、彌兵衞にさし出せば、ただせんじ茶と心得て、何心なく呑口にそと取なせばふしぎやな、むかし手なれし金目貫、今はうたがふ所なしと、互に是はとうさつらさ、さきだつ物は泪にて、おいとのかたいつしかいまは茶やなれて、かみも身ぶりも物ごしも、堀江の水にしやれてすむ、うきふしの身は四とせ跡、親のめいそむきがたく、御身とかりねのうきまくら、あかぬ別の難波に下り、日比召遣し腰本のしゆん、わが連相の目をかけられ、てうあい有しをそれとても、ねたむ心もなきものを、いつしかわれをにくみそねみ、御身とわれ

とのうきちぎり、幾野が事まで取そへて、殘ず語あまするさへ、われを都の親里に、おくり歸さん談合、聞にこゝろも心ならず、おのが身はづだ〳〵に刻まるゝ共、古郷のかたへは歸まじきと、夜にまぎれて忍出、さすが女のあさましさ、行かたとてもしらざれば、ある人のきも入にて、中々勤の身にてはなし、只娘分にと約束し、爰に月日をおくり、あさましき御げん、今更のはづかしさと、互なみだにむせび、彌兵衛も身の上つゝまず語りければ、甚右衛門も手を打て、是はふしぎの對面、それがし角てあるうへは、猶末々はめでたきやうにと、さかづきの數重なりて、明方のわかれをいそぐ鳥のこゑ、とかく浮世は戀の道と、うたいつれてぞ歸ける、

風流夢浮橋卷之五終

風流夢浮橋卷之六

一、戀は物うき二度の勘當

よしや浮世は夢のうち、きのふとくれけふと暮して、はや古手屋に二とせをおくり、諸事を律義に勤けるゆゑ、孫兵衛の氣に入、むかしを尋ればよしある者、兎角彌兵衛を養子にして、跡式をもわたしうらざしきに引込、後の世の便をもとめんと、吉日をゑらび町内への廣、さつさつのこゑにぎやかなうちにも、彌兵衛は堀江のかたへ、通ふ心のとげしなく、有時孫兵衛彌兵衛に申さるゝは、其方年月の孝行、我々が嬉しさ身に餘り、さいわいおさんも有ことなれば、末々は一所に互に孝行を盡されよと、ねんごろのあいさつも嬉しかなしく、つく〴〵おもひけるは、暫も孫兵衛の下人とよばれ、三世の緣をむすび、其上親子の契約、ことにおさんと婚禮の談合、身に入てうたてく、義理と恩をおもへば、中々心にも背がたし、されども堀江に身を捨し、おつまも見はなしがたく、古郷よりのなじみ、其うへこの程ちぎりを重、此世あのよとちかい、行末夫婦になるべしと、誓紙まで取かはし、いまさらおさんとの祝言、いかにしてもならぬ所と、戀と儀理との二つにせまり、おのづと内のしゆびもあしく、夜ごとに通ふ丹波やの拂も、はや三貫目におよび、孫兵衛も彌兵衛が心入替りしぞと諸事に氣を付、晦日の勘定をもきびしくせりたつれば、過し比南良の買出しに渡せし銀子四貫目、行方の知れざれば、其座をさらせぬ吟味、猶うき事の彌兵衛が身の上にかさなり、二度爰も勘當の身となり、うきが中にも堀江に行、おつまに角と語れば、ちつともくるしからぬこと、氣遣し給ふな、おまへひとりはわしが才覺にて、うらだなにても借、二年三年はいかやうともなること、頼もしく言へ共、總じて茶やのならい、彌兵衛勘當のことを聞、亭主もくわしやも取合ず、いつしかおつまにもふつ〳〵とあはせねば、せんかたなさに日比心やすき兩替やの作左衛門へ行ば、はや古手やの孫兵衛より手代をまはし、世悴彌兵衛儀此間不屆成仕かた、殊に四貫目の銀子をわたし、南良へ買物に遣候へば、其銀一錢も殘さず茶屋ぐるいに遣、親旦那かんにん仕かね、一昨日公儀へ出、勘當帳に付申候まま、若此方へまいられ候とも、一夜の宿も御無用とふれければ、行先々のあしらいもかわり、よふござつたと言に、物は入まいとおもへ共、あいさつもせず、志水町に行甚右衛門に右之樣子をかたれば、何がさて其方の事なれば、一寸もひかぬと着る物、羽織、わきざしまでをやり、何角氣を付ていたわれば、甚右衛門親の甚兵衛は、孫兵衛より勘當せられし彌兵衛をはごくみ念比すること、扨々むふんべつとしかれ共、甚右衛門聞入ねば、甚兵衛ははらをたて彌兵衛に向ひ、内々そなたの惡性では、勘當がおそかつた、爰にもそう〳〵はならぬ、何方へもはよふいきやれとせりたて、其うへそなたのきる物わきざしは皆おれが物、だれに尋て自由にめさるゝぞ、おふちやく者の大ぬす人、内々あの彌兵衛との念比、合點のゆかぬ事とをもひしに、みな甚右衛門めがぬすみだし、たわけと一身をするかとわめけば、甚右衛門はばらをたて、おやのものを子がとらぬ物か、そなたが死ぬれば皆おれが物、いかにしはいとて年たけたる子に、金一歩も自由にさせぬ親が、大坂中にある物か、いかにわしじやとても、月に一どや二月に一度は、新町へも堀江にも

行ねば、わかいもの〻付合がなし、また彌兵衛も互に男づくのねんごろなれば、勘當請しとていまさら見捨られず、あのわきざしも着る物もおれがやりました、總じて親のものは子のもの、こなたの長いきしやる故暫預て置、道具の番をしやれと言ば、甚兵衛はこらへかね、おのれわがま〻物きかぬと、町衆の異見も聞ず、甚右衛門も彌兵衛へも、此家にはかなわぬと、きる物わきざしもとり返し、終には甚右衛門も勘當の身となりけり、

二、路銀はうばが情の旅立

堀江の茶屋丹波屋久右衛門は、娘おつまをてうちやくし、家内うちより取さへても聞入ず、となりの井筒屋には、器量のわるきむすめでも、あのやうに客も多くはんじやうするに、こちのはいつからやらすつきりと客もなし、けふはあろふかあすはあろふかと、さかなをこしらへてもくさらかしてしまい、是皆おつまがあしらいからおこる事、かんにんせぬとしかれば、おつまはなみだにくれ、扨もむりな事計、わしが勤はせず、客のないことはしりませぬと言ば、さればつとめをせいではなけれども、大かたの客衆むすめを望は、三年になるもの〻の木と、茶屋のむすめがおなじ事、もふなろふか〳〵かと通ふ物、其上彌兵衛がうせると、うれしそふにびつたりともたれて、何やらかやらはなしくさる、外の客衆には馬のはねるやうにぴん〳〵しをる故、皆客衆もはらをたて、言合てござらぬ、是みな彌兵衛めがうせる故なれば、重てはふつ〳〵物も言まいと、せいもんをたてよ、あの彌兵衛はな親の勘當を請、いまは一夜の宿する物もなしと、口がためをさせ、成程よいがてん、其心なれば隨分客の氣にいりだましてくれよ、物もくはぬそふな、茶づけでもくはせと、悦てうちに入ければ、下女どもは茶づけをこしらへ、おつまさまいれと言ば小ごゑになり、誰にも言てたもんな、夕部夜半過にをもてへすゝみに出たれば、彌兵衛さまのかたびら一まいにてしよんぼりとして、御ざんしたによつて、をきませふ所はなし、そつと二階へあげ、長持のわきにをきました程に、此茶づけをしんじてたもれと頼ば、下女は心よく、のふをいとしやと二階へあがりければ、門口へ十六七の若衆六十計のばゝ、帶や甚右衛門さまの彌兵衛さまは見へませぬかと尋ぬれば、そんな衆は

爰へは見へませぬといふ、ばゝは力なき體にて、傳四郎さまもはや何くに御ざろふ所もおぼへぬ、是から新地の邊を尋申べしと立出れば、甚右衛門にはたと行合、是は傳四郎かと丹波やが内に入ば、傳四郎言やう、此中うち方々尋候へども、御有家もしれず、さだめて何か不自由に候半と、金子十六兩さし出せば、是は過分にはおもへども、そなたも何としてか用意いたされしぞ、されば親父の心なれば、内からは出されず、隣の與右衛門殿にて借ましたと言ば、兄弟のこと〻てさりとはうれしき心入、然らば此かねは留おくべし、扨あのばゝはととへば、わたくしは京のものにて、彌兵衛さまのうばでござります、彌兵衛さまの御ざり所は、知れませぬとなげ〻ば、おつまは甚右衛門に、二階にきてござるとさゝやけば、彌兵衛は甚右衛門がこゑを聞、二階よりをりければ、うばは取つき、のふ御ひさしや、まづ此なりはとなき〳〵言ば、おまへは京を出給ひ、はりまとやらんへ御越と聞、朝夕あんじて此やうに、目もくさるほどなきくらし、此中は天王寺さまへまいるとて、四五日跡に夜船にて下、谷町の六兵衛かたへ行候へば、源六さまは帶やの甚右衛門さまとて、志水町にござる人のなさけにて、いまは名も彌兵衛さまとて、けつかうなる仕合と聞、扨も嬉しやとおもひ、其まゝ志水町の甚右衛門さまへ尋行、様子をとへばまた不仕合、殊におまへにかゝつて、甚右衛門さまも勘當と、是なる傳四郎さまのねんごろはをはなしゆへ、此中毎日尋ました、またもまたもの勘當、もはや大坂にもござられまい程に、はやふ江戸へござれと、うばがかい〴〵しくすゝめければ、彌兵衛もなるほどそなたのいやる通り、江戸へ行たけれど、路銀はなしと涙をながせば、うばもなき〳〵じゆず袋を明、わしが廿五年奉公せし内、一匁二匁づゝのけて、死ぬる時の用意にためましたと、小判一兩一ぶが三つ、銀が廿匁ござる、是を路銀にして、どふぞ江戸へござれと言ば、いや〳〵是はもらわれまい、おれが人なみなれば、そなたには樂をさせて、養はづを、死にりやうとて年々ためたかねを、何としてもらはるゝ物ぞと言ば、はて合點のわるい、しんぜるではなし借ますが程に、隨分仕合をして大分にして返し給へ、然ば此かねを借、一先江戸へ下、立身せずば京へも大坂へも、中々歸らぬと言ば、甚右衛門是を聞、

なるほど〳〵尤の心得、其心でなければ立身はならぬ、江戸にはおちつく所も有るとゝへば、いや其心當もなし、然らば其かねにてはなるまじ、幸をとゝがくれし金子十六兩、是を持參いたされよとわたせば、いまにはじめぬ事ながら、信實成心入身にあまりてかたじけなし、されどもそなたも勘當の身、かねがなふてはなるまいと六兩は返し、十兩借申べしと懷中すれば、夜が明ては人目もいかゞ、兎角今宵中に、谷町の六兵衞かたまでおこしなされよ、旅だちの事なればせめてさかづきにてもしませふ、わしは先へ行、むかいにかごをおこし可レ申、甚右衞門さまつれだちて下されませと立出る、おつまは彌兵衞にとりつき、扨は江戸へ下給ふか、おまへをやりてわしは何としませふとなげく所へ、久右衞門ははうきをもつてはしり出、おのれまた彌兵衞のそばに居るかと追ありくを、甚右衞門彌兵衞に言やう、そなたの居やる故しゆびもわるし、うばも待て居やふほどにはよふ行れよ、追付跡よりまいるべしと、おつまをてうちやくするをとりさへければ、久右衞門はきかぬとわめく、はておつまもがてんじやと言からは、かんにんしやと漸漸引わけ、いよ〳〵夫婦じやと言ば、おつまもなるほどいやではござんせぬと言、久右衞門は悦、甚右衞門さまはわたくしの聟じや、聞ばおまへも彌兵衞どのそばつぶてに、當分勘當のよし、かならず外へは御無用、いつまでもわたくし方に御入と申せば、なるほど過分の心入と悦ば、さあ二階へおこしなされと、つまが手を引てゆくは、がてんのゆかぬと誰に見せても有殘（うさん）な物、

三、六つの袂のぬるゝ四橋

彌兵衞はおつまがてうちやくしらるゝ音を聞、無念にはおもへども無二是非一立出、門口にやすらい此よしを見て、扨も〳〵口惜や、あの樣子なれば甚右衞門も、日比おつまに心を懸しが、此彌兵衞が大坂に居ては念比する事もならず、拾兩の金子をくれ、むりに江戸へやるつもり、甚右衞門は甚右衞門、おつまめがにくし、此上は起請もほうぐと紙入より取出し、すんずんに引さき、わきざしのはゞきもとをくつろげ、飛かゝらんとおもへども、まてしばしわが心、角とわ知らずうばがまつて居やうと、かれをおもへばなみだ、是をおもへば無念、とふかこふかと思案をする内、甚右衞門はおつまを連、四つばしへ涼に行とて立出るを、やりすまして跡をしたへば、甚右衞門がこゑして、そなたの起請はよいか、おれもしたゝめしが、うちにては人が見る故なりがたし、もはや夜も更人通りもなければ、四橋の上にて互に心を靜め、血判すべしと言、彌兵衞いまはたまりかね、覺たかとうしろより甚右衞門を切付、返す太刀にておつまをさしとをし、甚右衞門は何やつぞとぬきあわせ、散々に手をおい、おつまくるしげなるこゑして、彌兵衞さまではないかと言ば、おのれちくせうめ、一度言かわせし我を見捨、甚右衞門と夫婦のせいし、よふも〳〵と言ば、なふそれは聞ちがい、樣子があると言のをやにはにさしころし、すでに自がいと見へし所を、甚右衞門深手をおいたをれしが、漸々に起なをり、誰かとをもへば彌兵衞か、扨もおのれはそさう者、成程起請書しが、それは丹波やの久右衞門、我を聟にせうといわる故、勘當の身のかなしさは、しばらく爰に足をやすめんとおもへども、おつまと一所に居ては、その方が江戸より歸、聞てもうたがふべし、互にのちの身ばれなれば、それがしは言に及ばず、外の男とも枕をならべまじきと言きしやうをかゝせ、それがしも一所には居申とも、不儀成事は言に及ばず、言葉にても申間敷ととゝのへ、互に血判をすへ、二通共其方にわたし、心よく江戸へ下すべしと思ひしにと、終にむなしくなれば、彌兵衞はいまさらのこうくわい、歸らぬ事とふゑかき切、三人ともに枕をならべてふしぬ、京も難波も是ざたの心中、

元祿十六年未正月吉祥日

堀野傳右衞門開板

風流夢浮橋卷之六終

京縫鎖帷子序

醍醐の處士、愚が机上の京都女曾我を見て曰、凡名實正しからぬは君子の惡む所、微物といふとも名は愼むべき事也、兄弟同心して父の讐を報るをもつて、元祿曾我の名あるは可也、汝が此書何爲曾我を稱するや、不レ如京縫鎖帷子と題するのやすらかならんにはと、愚唯して忽處士の言にしたがひ改るものなり、

洛散人　森本東烏書

京縫鎖帷子目錄

一之巻

一、正說御前かゞみ　并洛陽二川の水筋
　附り、ながれよる戀の立賣鼓のなるおと

二、奥村長尾口論之事　并因州山中越女の生膽
　附り、色をしらべて宮井氏うき名立事

三、高名千里の追風　并名代下女が請もつ梯の數
　附り、内儀は引しめる役鼓のどうぼね

二之巻

一、七夕相生の松　并梶の葉の踟戀のかけはし
　附り、宮井傳右衞門早部源内養子と成事

二、酒ゆへ流す顏紅葉　并天神御祓野郎帽子とお山下紐
　附り、宮井傳右衞門京丸屋とめぬすみ行事

三、ふとき首切備前刀　并笹部折右衞門妻假寢枕ものがたり
　附り、因州笹部より備州の飛脚遣す事

三之巻

一、色香の增る後咲の梅　并おむめ花木が坂まで立出る事
　附り、安井金右衞門敵討の願指出す事

二、松島源左衞門書置の寫　并顯照寺にて源左衞門切腹の次第
　附り、東條伊織金彌に熱心の譏の事

三、櫻井金彌書置の寫　并金彌切腹顯照寺女郎狂の事
　附り、安井金助お梅因州へ行事

四之巻

一、乘懸たる武士の一言　并金助お梅因州より大坂へ上る事
　附り、京に花の宿三文字屋おしまの事

二、此段紅うら鼓のちらし　并五條の金九郎折右衞門に對面の事
　附り、敵討をふせたる妹の祝言千秋萬歲

京縫鎖帷子目錄終

京縫鎖帷子卷之一

一、正說御前鑑

夫山城の國は、東北近江若狹を環り、西南は丹波攝津河内、大和、伊賀に連り、而て西北は山嶽の嶮に枕り、東南は洪河の衄を帶、地勢廣濶、風氣和暖、田宅豐饒にして、四民安逸なり、平安城巍然として中土に立、前朱雀、後玄武、左青龍、右白虎、四神相應萬世不易の地なり、東西に二川あり、東は賀茂川と號す、北の方雲が畑より出て、水上村を經上下の賀茂に出、其間に石川蟬の小川等の名あり、糺の杜の南におゐて高野川と合、これに依て糺を或河合と稱す、二條三條橋下を過、大和橋の西におゐて白川と合、第五橋下を歷て、難波の津に出て海に入、此川水源至て清し、宛も中華渭水の清に似たり、京極の中川は其支流也、西にまた川あり、是を堀川といふ、上は洛北二股川より出て、一條反り橋に至り、九條を歷竹田に出、其間大小の橋勝て計べからず、其内中立賣の橋と下立賣の橋と、破損ごとに所司これを改造しめ給ふ、此邊にして寶永

三の六月七日に、或女姉の敵を討し事、都鄙擧て其沙汰まち〳〵なりといへども、百足蜈蚣の違ありて、本説は九牛が一毛だになし、まことに漢の武帝の、香煙の中にして李夫人を見給ふがごとく、彷彿として確ならず、されば此書は洛の東烏證據正しきを集、京縫鎖帷子と題し、自これを樂けるを、予聞傳へてこれを求、櫻木に花を咲せ、千歳に傳たしと請、東烏笑て、汝大津の馬路にそだち、牛の角文字ひきもやらで、音聲を調へ一部とせん志おかし、總じて詞章に力を盡せば、本意は悉なくなるものなり、只此まゝにて書とせよ、俚言を正し文辭を美する事は、僕が及ぶところにあらず、まことに染色おかしからぬ手織帷子なれば、見る人聞人腹鼓のかわのいたからんも恥しけれど、汝が强て求れば、固辭しがたく與るぞといへり、予其正説の違ぬ事の嬉しくて、かく梓にちりばむるものなり、

二、長尾新六奥村平藏口論之事

京堀川の水清く、たへぬながれは今もかはらぬ商賣は、色の染きぬ立賣邊に、吉野屋喜右衞門とて、花かうしたのふれんに枝葉さかへ、女子一人男子二人、總領は喜七郎、是には跡をゆづり葉の、羨ましきは弟清六、器量も兄にむまれ越せば、寵愛もいやまし、第一は藝さとく、一をうつて番數おぼへ、小鼓の名を都にたれ知らぬ人もなく、岡田氏の弟子分、其名を宮井傳右衞門とはり札は目に立ちながら、自然と色にそまりついて一日も宿に居ず、東西の惡性つのりて、親の金銀うち出せば、今は只京染やめさせ、田舍もやうをのぞむ折節、因州の御城下へ御奉公の末、立身を松風一番、御目見への時うちしより、首尾よく相濟、元祿のすゑ因幡へ下り、あなたこなたへ指南して、一家中へ宮井の流義をなびかせ、いづれの御屋敷にもはやしかた御稽古ありて、御城下の賑ひ、總じての藝能も、一國のはやりものにて、とりわき宮井は都そだちの花車男、京見ぬ女中色にうつりて、上手々々ともてはやし、けふも有本佐五右衞門屋敷へ、長尾新六、田村重内、島村平八、那須四五右衞門など六七人もよりり合、高砂のしてわきをあらそひ、新六鼓、平八太鼓、大かたに拍子もあへば、門前に耳をそろへ行歸人是を聞ぬ、爰に同家中に奥村善左衞門とて、智勇を兼し士の、殊に戸田流兵法の家として、殿樣ひとしほ御懇意にて、年ごとに家さかへ一門衆中のよろこび、まづは武藝あつきしるしと、一家中猶此流をしたひぬ、中にも一子平藏、父よりの劔術を得て、其器量ふそくなく、殊更强力拔群なれば、其心たかぶりて折節の無禮も多かりけり、されども人ごとに無事を好む世の中にて、聞ぬものゝ眞似して許しけり、されば有本佐五右衞門いさゝか平藏とよしみありければ、常にしたしかりき、此折から佐五右衞門が門前を通りける故、門内を見やれば唯今はやしを仕舞と見へて、どさくさしける音を聞て、遠慮もなく座敷へつゝと行き、又こりやぬるきはやしかた、武士たるものが戰場へ出て鼓太鼓で高名もなるまじ、當流のはやしかた我等が家の重寶、此腕先を御目がねに頃日も御加增、慮外ながらと氣儘つくせど、皆弟子分の士なれば、其座を面白おかしうとりなし、既に夜食の舌鼓うちおかず酒過て後、をの〳〵輕口もんさくばなし、中にも島村平八はなされけるは、松岡太平治殿若黨用事ありて田なべへ往、山中越を通りけるが、常さへも淋しき道、としの比十八九なるいとあてやかなる女、向ふより來たりしが、今四五間にもちかづく比、彼女何かはしらず懷中せし紙包みを取出し、右手なる谷へすてぬ、若黨何心なく其塲をうち過ければ、彼女此男を呼もどし、ちか比おむつかしながら、あの紙づゝみを我に取たまはれといふ、此男不審して、あの紙包は唯今御身捨給ふが、いかなるゆへぞといへば、此女かほをあからめ、はづかしながらあの捨しは、我道の用意にいたせしむすびにて候が、さだめし御身我を直に通しはしたまはじ、もし御身そばにもよりなば、いとはづかしき事に存じ、扨は捨候と語るに、この男氣もつかず、我はさきの用事急なり、御身取たまへといひ捨て走りけるとはなすに、いづれもおかしく、其若黨は男の道具かけたるものよと、大笑ひのどよみもやまぬに、奥村平藏申されけるは、何も此比宮井傳右衞門が噂、あたらしき事聞き給ふや、笹部折右衞門が内儀と戀慕の沙汰もつばらあり、こととさら折右衞門留主なれば、虚説にてもあるまじと、何心なくはなしける、時に長尾新六色を變じ、是平藏殿先刻も過言あれど、いづれもの前をはゞかり、其分にいたし置所に、又只今の御咄聞捨になりがたし、折右衞門は拙者よしみのものにて候、其儀は誰に聞れつるや、折右衞門

儀もと歴々の筋目なれども、先年備州を立退き、外にたよるかたなきゆへ、愚父かくまへ置、輕き事ながら御料理奉行に出す、又宮井傳右衞門は賤しき役者の事にて候へども、拙者鼓の師と頼むものにて候へば、最負に存ずるものにて候、然ども彼が儀はいふにたらぬ事、折右衞門儀におゐては、一命を投うちても吟味いたさねば一分立ず、是非いひ出したる人をうけたまはるべし、さて又貴殿不義の沙汰世上もつぱらにして、聞ぬ人もあるまじ、拙者は交友の親みを思ひ、女童のつぶやくをも急度聞とがめ、いはせぬやうにいたし候ぬ、人の非を正さん隙に、身を慎みたまへといひもはてぬに、平藏刀をつとり、某が不義とはさては御自分のいひ觸されしやと切てかゝる、一座の人々立ふさがり、互に時の座興なるにと左右へ引のけ、遺恨を殘したまふなと堅く制して、兩屋敷へ遂りとゞけて、最早別儀もあるまじと、各私宅へかへられけり、

三、高名千里の追風

女御更衣簾中御臺所など呼ばるゝ、やごとなき御かたは、凡婦とは事かはり、とばり帳などかけまく、搔上の箱に朝夕の色をつくらせ、錦のしとね綾のふさつき、梅咲春の鶯の初音のと慕ひたまふまでなれば、御思ひなんどはさしてあるまじきに、人の戀さへ妬しきものに憎ませたまふは、下臈よりも深かりしと聞けば、末々の女房のはしたなき悋氣もことはりなりとぞ、さる程に平藏新六口論の時、平藏が不義と聞へしは、平藏が罪にはあらず、其子細をくはしく尋るに、平藏幼とき母死けり、父の善左衞門妻の別を歎き、一子をかたみと袖のみぬらす、やたけ心もいつしか老の寐覺淋しく、みめよき妾をもとめて足腰さすらせけり、此女もとは御城下ちかき河崎といふ所の町人の妻なりしが、あまり嫉妬深くて、常に目にかどたて、夫に纏ひまはりければ、うるさがりてやがて追出しぬ、此時女の親里は日々月々に貧くなりければ、せんかたなくかやうの奉公に身を隱しけり、されば此女前の夫のおとしだねあれども、いまだ腹ふくれねば善左衞門夢にもしらず、安々と初聲あぐれば、我子なりと悅でそだてけるに、世の人のさがなさに、此子はまさしく平藏が子にてあらん、父と兩作にて念の入たる子なりと取沙汰、千里を一日に惡名たちて、

生ても死ても と思ふ平藏が悲しさいはんかたなし、是その身持正しからず、孝心うすく、家人を愛する心なきゆへ、人にうとまれけるにより、憎しと思ふもの無實をいひ出せるなり、さて平藏思ひけるは、新六が一言にてもはや人前もなるまじければ、新六と討果んと思ひ極め、さら〳〵と一ふで書置て、唯一人新六が屋敷の東なる藪の中に隱居て、夜深るをぞ待ける、すでに夜半の鐘も過れば、時いたれりとそろ〳〵はひ出て、塀を越んとすれどもたよりなければ、いかゞはせんとする所に、一犬吠て六七疋鳴懸り取まはせば、夜番にとがめられては叶はじと、刀をぬいて追ちらし、堀際まで往ければ、爰に捨石多あり、是天のあてがひと喜び、四五人して持ほどの石を、かる〳〵と引抱へ、もとの塀下にをろしてふみたつれば、塀をゝひのあなたへ手のかゝる程なれば、やす〳〵と乘り越へ、新六が寢所の案内は知たり、やう〳〵と忍び入、聲をかくれば心得たりと、枕に立たる刀を拔き合せ切むすぶ、有明の燈は消る、兩戸ひきたれば障子のあかりさへなし、嵐窓のそと白めくまでなれば、たがゐに目くら討に切合しが、兩方深手を負て切死にぞしたりける、母儀小便に起て此音を怪しと思ひ、末子の十三郎九歳なりしをゆすり起し、手燭燈して新六が寐間に往てみれば、八疊二間あけになりて、目もあてられぬありさまなるに、甲妻〳〵しく下人をひそかに起し、屋敷の西隣井上岡右衞門を呼につかはし、樣子を語て其體を見せければ、先組頭へいひつかはしけるに、兩方の組頭幷に大目付長谷部外記、淺田與右衞門馳付、手疵相改御仕置中へ早速達しける、夜明て御耳に入　兎角被二仰付一のなき間は、兩方遠慮可レ仕との儀にて、其後被二仰出一は、兩方相果申上は別儀なしとて、善左衞門にも其儘役儀被二仰付一、新六跡目無二相違一弟十三郎に被二仰付一、此喧嘩の本は先月廿三日、有本佐五右衞門宅にての、口論よりをこりける故、其一座殘らず首尾書を組頭へ出しける、それ故折右衞門妻の沙汰も、ひそ〳〵世上にいひけるにつき、傳右衞門立のきけり、されば折右衞門去春より在江戸にて、留主には七になる娘と、普代の長右衞門といふ六十餘のしかも耳はむまれつきのつんぼ、又二三年は目をやみて晝もさぐる男ばかりなれば、あまりの不自由さに、此はるより十六七なる下女をおきける

に、いやしからぬ爪はづれ、可愛らしきなりふりにて、心をかくる男多かりき、傳右衞門召出され、折右衞門が隣屋敷を拜領しければ、始より折右衞門と念比にて內外心安かりける、それゆへ長々の在江戸の事なれば、萬端留主の儀賴むと傳右衞門にまかせぬ、晝夜の差別もなく、一家のごとくしけるに、彼下女に思ひこみ、手にさわり足にふれて、あわれにいひくどけども、人なれぬ女なれば、はづかしがりて埒もあかぬを、內儀氣を付て、やう〳〵取持ち、つゐにものにいたせし後は、憚からぬざれごとひたものつのりて、下女は外になり、大事を思はぬ鼓の胴骨引しめてふときせんさく、たれおそるゝ心もなけれど、長右衞門が茶の間にいぢりつきて、苦き顏をにこともせねば、くらがりの鬼のやうにて氣味わるく、さつぱりといにて見せ、さかいの塀にかくる、はしのこの數かさなりて、二人しづかにうちあかしけるに、新六平藏が喧嘩ばなしのあと口わるく、我身の難儀遠からぬと、悟る內儀のかしこくも、長右衞門能留守しやと、寺まいりすると見せかけ、門へ出て娘に下女をそへて、出入の市がかゝよびてこよとよ、いかげんの智惠を出し、其身は傳右衞門かたへ往、件の事をかたり、とても御驗議あるべければ、我等を連れて立のきたまへと、路銀の用意ぬからぬ才覺出せば、傳右衞門驚き、さては遁れぬ所、さりながら一所にのきては不義を名乘るなれば、追手もかゝりてあしかりなん、我等一人立退べし、こなたは言譯うま〳〵と、下女に一はひくわせて、公儀をすましたまへ、やがてひそかに迎ひを下し申さんと、かたく約束して其夜忍び出て、明る夜播州しかままでにげのび、明る朝は幸の便船ありて、順風もまだるく、難波までの海路も千里の遠がごとく、唯ひととびとおもふ、虎の口をのがれぬ、

京縫鎖帷子卷之一　終

京縫鎖帷子卷之二

一、七夕相生の松

若ゑびすおわかゑびす、あふぎ〳〵の賣こゑ、難波の正月あけぼのゝ空長閑に、いづれも袴の折目たゞしく、是は早々かたじけなしと、何方も同じことぶき、中にも鴻池諸白の、根づよき此津の町人、自然と大氣に金銀は、淀川より流れくる水一荷を、貳分三分或は五分の所もあり、此流れを飲む大腹中さ、賴むといへば我身體の疊の上でもその心底、岩崎龍左衞門といへるは、傳右衞門が父と交ふかく、殊さら手跡の師なりしが、此男も子細有て、生國江州彦根を立のき、七八年以前より當地浮世小路にて、早都源內と其名を改め、渡世のため筆の指南してくらされしを、傳右衞門賴にたづね來り、因州のものがたりすれば、流石くちせぬ武士の果、其段は心やすかれ、我かくありし上は鐵の城郭、たとひ樊噲來たればとて、恐るゝにたらずともてなし、たのもしくぞかくまひぬ、其後國の風聞手をまはしさぐるに、さして御僉議沙汰もなければ、うちくつろぎてきのふけふたてば、はや一とせをぞ暮しぬ、爰に源內娘にふさといへるは、まだはつ紅葉色そまぬ、としも二八の春の比、すがたの花やふり袖の、內にわかなの卷おもふ、比は文月三つ二つ、過る夜かざる七夕の、歌を書んと梶の葉を、手にふれし時女郎蜘、あゝこはやとなげやれば、傳右衞門折節次に居合せ、あはたゞ敷傍により、いかなる事にてかく恐れたまふといへば、ふさほゝゑみて、嬉やよくも問せ給ふ、月をまち日をとふけふの梶の葉に、色をつくりし女郎蜘、いたづららしいあれ見たまへと敎ゆるに、傳右衞門その蜘を手にすへ、まことにけふは七夕の、星のちぎりと聞からに、我もねたまし朝夕に、袖のみぬらす戀衣、それとは知らぬ人さまの、姿みるのもうらめしや、今はこの戀思ひ切、命をとんと篠すゝき、なれにあやかり蜘となり、戀しき人の閨にゆき、今の思ひと涙を流せば、ふさ傍にゆき、これおそろしい、誰に聞けとてのろひごと、人の心がまことなら、我もこの手にすへかけて、契を深く染ぎぬの、蜘になりたかなりたまへと、顏に紅葉の色はじめ、是よりかはらぬ中となりしが、母これを聞つけ、もつての外に腹をた

て、源内にかくと語り、世になし人を聟にとり、世の聞へもよしなし、急ぎ傳右衞門を何方へと追出したまへと、鼻ふくれ聲ふるへば、源内暫くありて、いかにもいひぶん尤なれども、傳右衞門それがしを力に、身をひそむるものなるを、あからさまに惡名立て追出さば、自害するより外はあるまじ、さある時はふさめも其ぶんになりがたし、若き時のいたづらは、さしてにくむ事にもあらずと、當世風のさばき、かゐとりあげ髪を其儘に、三々九度を二階座敷で、さゞんざの聲一てう、鼓の師をせよ傳右衞門、聟に取すまいたしやん〳〵、

二、酒ゆへ流す顔紅葉

鳥は林にすむゆへ其羽木の葉に似たり、獸は山野に居ゆへ其毛草のごとし、魚は水に生ずるゆへ鱗波の紋にひとし、人は天地の生理を全具て德とする故、善を好み惡を惡む、この心にもとれるを不肖の人といへり、されば宮井傳右衞門、因州のいたづら身を亡すべかりしを、ほう〳〵大坂までにげのぼり、早部源内が情ふかく、あまつさへ聟となし、枯木の花の色おもしろく暮しけるが、生者必衰まぬかれがたきは、世のつねならぬ病氣にて、俄にふさ物狂はしくなりて死ければ、人々の歎きいはんかたなし、母とりつきて離さぬをもぎはなち、野邊の送りの悲しき梅田の煙の中に、因幡のおげんほのかにあらはれ、いかに傳右衞門久しく對面せず、我は是笹部折右衞門が妻、口おしくも汝が千束の文に迷ひ、うき名を國に流せども、夫の留主ゆへ命の氣づかひなきうちに、連れてのぼれといひけるに、上方の首尾をつくろひ、そろりと迎ひを下すべしと、神々かけての一言、まことなりと嬉しく思ひ、草ふく風もおぼらしく、灰うら辻うら疊ざん、烏の啼もたよりかと、一夜も夢をみすまさぬ、我が心ねをはやくも忘れ、難波津にさくや此はなこのはなと、うつたる鼓もうらめしきに、みづから今は不義の名、立やかたなの刄にかゝり、あらゆる責のいと苦さ、胸の烟の汝につきそひ、この女もわがとり殺せしぞ、めぐる因果を思知れと、恐ろしくにらむ眼に、傳右衞門正氣をうしないたをれしを、皆々いたはり立歸り、祈禱醫藥の力にて、やう〳〵本復いたしければ、今よりは色といふ字を、彌陀の六字に悟りかへ、二人のあとを弔へと、勸められたる傳右衞門、兎角に

およばぬ珠數のいと殊勝なりしも、七々の日數をふれば天滿の御祓、是日の本の大みなと、我一と花麗を盡す遊船は、天滿橋より大江橋、むすぶ水なきばかりなり、中にも大夫のせたるは、優に聞へてまぎれなき、今宵は各別天神さま、御詫宣あれ何にても、大盡樣の御寄進と、御機嫌とりが追從、にあひ〳〵に五三人、風呂屋白人茶屋女、暮れば萬燈天に耀き、星の光ちろりのいきほひ、酒過ての亂淨瑠璃、山衆野郎もはじめのほどこそ、後には客への遠慮もなく、重箱肴のあとをあらし、野郎帽子のゆがみも直さず、亂れし酒には盃の、取はづしなどある事にて、よしなき事より戀もさめぬ、傳右衞門もさる田舍衆にさそはれけるが、殊さらの大よせ、野郎茶屋ものうちまじり、前後あらそふ戀の中、口きゝ山衆、ひつしごき帶しごけなく、舟ばたにての水遊び、ぬけるもしらぬ酒きげん、もへたつけふの晴ゆもじ、つゐちら〳〵と流れゆく、あれとも人にいはればこそ、顔に紅葉の沙汰なし、それよりもとの座になをり、身をひそめたるぞおかしき、誰知る人もなきに傳右衞門、早く見つけ小者にいひつけ、ちかづきの呉服屋へ走しらせ、それよりまさる緋縮緬、しばしの間に紐まで付て歸りしを、ひそかに山衆が袖に入けるにぞ、嬉しさこと葉に述べられず、それより變らぬまぶとなり、勤めのうきめ涙ぐみ、生國丹波の何がしかたりければ、傳右衞門腰ぬかし、日ごとに通ふ千鳥足、身代にふらつき見へ、難波の住居も心に叶はず、此女を盗み出し、かたに引かけ京へ上り、下立賣堀川邊に隱居て、鼓の弟子のうちはやしにて、年月をぞ送りける、

三、太き首切備前がたな

鳶飛で天にいたれば、上見ぬ鷲の恐れあり、古代に變る人の風俗、次第々々に奢つよく、第一女のなりふり、當世ほどおかしきはなし、惡女の美女を似せたがるは憎からず、美女の惡女をまねするは、興のさめたる世のさま、髪の多きはむくつけなりと、中を摘み丈を短かく、青黛を笑て額をはがす、兼好法師も髪のめでたからん事をいひ、詩にも雲のごとしと詠ずるを、かくしなすはいかに、是さへうとましきにちかき比は、妻の娘のいはるゝ若おんな、後家風とていやらしく、奥樣と呼るゝもいみじき事に思ひ、身にはぼつとりとかたつかぬ黑小袖なんど、物に構はぬふりにみ

せて、心は遊君をうつしてんとの浮氣、家並に密夫沙汰のなきは仕合なり、ぬかつた男と笑へども、男の油斷にもあらず、大かた女の幼きからのならはしあしきよりいたづらになりて、親はらからの首に繩をもつくるあさましや、笹部折右衛門箱根峠にて馬より落、左の足を強く馬にしかれて、行歩自由ならず、道中駕籠の狹に身をくゞめ、寶永二年の秋因州に歸り、江戸にて聞しに違ぬ沙汰、長右衛門がありすがたの物語り、並に拾ひ置し戀書ある上は、くはしき吟味にも及ぬ事と、頭痛氣とて寢間に晝より引籠し女房をすかし起し、件々の事いひも果ず、取て引よせ胸先を突き通し、憎さも憎しと飛あがり首ふつと切る、長右衛門下女走りゆき、其身のいたづらとはいひながら、おいとしやとあたりの人などやとひて、よきに野送しまひけり、生國備州安井金右衛門の妻は女房の叔母、ことさら金右衛門娘分にして、仕付られしなれば、委細に書狀認、傳右衛門が戀書をも證據のため、一封にして早速飛脚を遣しける、備州にて金右衛門披見を遂て、女房にも讀み聞せければ、驚やら歎くやら、取亂したる有さまなり、念入し書面兎角申べきやうなき仕合、御尤の至と金右衛門返答ありて、使は鳥取へ歸りけり、折右衛門早々御暇を申て、女敵傳右衛門を討べきを、落馬の痛強き上に、女房を切し時またふみくぢきければ、座をもいざりまはるていたらく、中々行歩埒あかねば、牙をかみ拳をにぎりて、足の平癒を待心底の無念さ云はんかたなし、

京縫鎖帷子卷之二終

京縫鎖帷子卷之三

一、色香のまさる後咲の梅

萩薄所によりてかはる名の、同じ武士にも關東はするどがちにて、北陸道九州四國、中國風殊に邦畿にちかければ、公事武藝のいとまあきあれば詩歌の翫び、中にも備州の御家中は、儒教の遺風ふき殘す、大和小學女四書、讀まぬ娘も耳にふれ、義にいさむ名の梅といふ、二九に一とせ足ざりしは、因州笹部が女房の妹にて、安井金右衛門が養育し、貞操の聞へあれば、宮本何がしが一子に、娶たきと望まれて、内談事濟どもいまだ頭へも達せざりき、然るに笹部が飛脚來りて、姉不義ゆへ夫の爲に討れけりと聞、愁傷なきにはあらねど、親兄弟の顔をよごしたまふ、あさましのおげんさまやと、當季居のはしたものに逢ふもはづかしく、納戸にうちふし朝食までにて、叔母のいひ慰めるにもいらへなかりしが、姉さまの敵は鼓打の傳右衛門とやらん聞へぬ、折右衛門どの腰のぬけたる人にもあらぬに、いかゞ延引して女敵討に出られぬや、いぶかしき事なれば鳥取へ立越、樣子を直に聞ばやと思極め、金右衛門どの夫婦に談合せば、女の身にて出しやばれると、しかられてあしかりなん、ひとりは路も覺束なし、乳母をだまして連れゆかんと、乳母茶をひとつといへば、嬉しがりて持きたり、なんぞちとあがりませぬか、かうこのよいを出しましよかといふを、そなたにおれが命をかけて賴む事ありといへば、なんじやといふて、おまへの御用を聞きませいでは、さあなんでござるぞと耳を傾けければ、どうでも行かねばならぬと涙ぐむに、乳母うなづきて、長屋のまんがかゝを賴み、急に在所へやらねばならぬ、銀じやと冬のもの取あつめ、直に金銀の兩替までのみこませて、これでは通し駕籠も自由じやと、寅の刻の柏子木鳴り止むと、忍門の鑰は宵よりふところにあり、お梅を誘ひ花木が坂をたどりのぼれば、東はやうやう色のわかるゝ比しも、跡より大せいはしりくれば、これはと見れども恐ろしき谷へ飛れもせずあはてるうちに追付、おとなの五左衛門をはじめなにたる御心にて御座候や、まづ〳〵御かへりなされませねばなりませぬと、うばを口々に叱りて、とかくも聞ず

お乘物にをくりやるな、いそぎや〳〵と町口より五左衞門きづ歸り、かくといへば夫婦よろこび、のりものこゝへと叔母手をとりて、泣々奥へ往、いかなれば相談もなく、はる〴〵の難所といひ、しらぬ旅路を思ひ立、さきの近きみづからが、腹から出たより大切に、よい生たちのうれしくて、しはしも忘るゝ事なきに、あとにて死ねとの心かと、恨みらるゝ其中に、金右衞門涙をはら〳〵と流し、武士の其名もたかき陸奥や、松島しらぬ人もなく、義理ふかき源右衞門と呼ばれしものゝ娘、さすがの書置感ずるに堪がたし、其志をいかでむげにはいたすべき、さりながら某むすめぶんの事、其上敵討とは輕からぬ儀なれば、御年寄中まで申上、御指圖次第いかやうともいたすべし、女子の敵討に出る事、例すくなく、もしまた仕損ある時は拙者が一分立ず、第一公儀へ達せざる御咎もはかりがたし、御願申上忰金助に同道致させ、本望遂らるゝやうにはからひ申さんと、一家の人々を集め相談の上願書相認、番頭の何某殿へ組頭相伴ひ、始末曲に申入ければ、何分にも明日の御評定に出すべしとて、翌朝評定所へ持參いたされける、御仕置以下諸役人、次第々々に列座ありて、金右衞門が願書披見せられ、女敵は夫の在うへは、外より手を出すべき事にあらず、其上女の敵を討事、外に討べきものなき上にての事にこそあれ、あまりはやまり過たる儀と、是非を付る人なき中に、大目付の何がし末席より進出、それは先追ての御沙汰、深き御憤ありて切腹仰付られし、松島源左衞門が娘を隱し置養ひ申事、上を輕んずるに似たれば、此御吟味有べき事と、もつての外なる難儀出來いたし、金右衞門が身上浮雲しと、かたづをのむ口の下、金右衞門を召ければ、早速御仕置中の前へ罷出ぬ、右の旨をもつて御尋ありしに、金右衞門申上るは、松島源左衞門切腹仰られし後一年を經て、兩人の娘を手前に養置申度と願申處、女子の儀なれば苦しかるまじと仰を蒙り申故、私娘分に仕養育いたし置申候、御留帳に御座あるべき儀にて候、其上源左衞門儀は、讒人のいひかすめを御承引ありて、實否の御正しなく、死罪に御つけあそばされしと、遠慮もなく申ければ、餘り卒爾のいたり、たしかなる證據あるにやと仰出さるれば、いかにも所持仕候とて、いそぎ私宅に歸り、源左衞門金彌が書置、封のまゝにて番頭へ渡し、御仕置中諸用人中披見にて驚れける、

二、松島源左衞門書置の寫

私儀今度御惡之儀依レ有レ之、松田兵庫に御預被レ遊之旨、於二御評定所一被二仰渡一、直に兵庫宅へ引取申候、定て御吟味之上、實否御尋可レ被レ遊と相待居申所、終に無二其儀御座一、今日切腹被二仰付一、顯照寺へ被二召出一候、如何成御惡にて御座候哉覽、私身に省所、聊死罪可レ被二仰付一非儀覺無二御座一候、萬一櫻井金彌と兄弟の契約仕居申事、惡く達二御耳一申候て之儀歟と乍レ恐奉二推察一候、金彌父平馬病死仕候節、金彌儀十一歳に罷成申候故、死後の氣遣は金彌が成長而已にて候、拙者新參者之儀にて候得ば、跡目如何樣に可レ被レ爲二仰付一も難レ計候へども、小扶持にても被レ爲二成下一候ば、外に一類も無レ之儀、諸事引請被レ致二世話一、金彌を其方弟と思給り候はば、可レ爲二本望一偏に賴と、平馬病臥の枕本へ呼、金彌幷に普代の家人を傍に置再三申故、不レ及二兎角一心得申と受合申候、依レ之如二實弟一無二遠慮一引込し申候、金彌生立宜被二開召一由にて、去々年御小姓被二召出一、忝御意にて御前詰被二仰付一候、私儀不材の者にて御座候處、御兒小姓御預被レ遊、不二似合一大役にて御座候へ共、難レ有御意の上は、御斷可二申上一樣無二御座一相勤申候、役儀柄世上の見聞も如何に候へども、平馬が一言難二默止一、彌懇切に仕候、如レ此子細にて御座候得ば、戀慕の心可レ有中にても無二御座一、殊更御兒小姓引廻し之私、不義が間敷儀士たる者の可レ有儀にて無二御座一候、於二于此一毛頭虛言御座候はゞ、子々孫々永可レ蒙二天神地祇御罰一候、死後讒者を御正し、無實之條々乍レ憚入二御耳一候ば、此上の御厚恩と奉レ存候、委細書記申度儀候へども、時刻延引に及申條、不レ及二是非一仕合にて御座候、恐々頓首、

貞享五年丑の三月十八日　松島源左衞門判

三、櫻井金彌書置の寫

今月十五日御評定所へ可二罷出一旨、朝比奈六之丞申越、卽同道仕罷出候處、如何樣之罪惡も不レ被二仰聞一、福内宮内へ御預被レ成候、宮田家來共の次の間に番仕候物語を承候得は、松島源左衞門も松田兵庫へ御預け被レ成候、是は兩人の不義故と、竊に私言申候へども、立聞候を以吟味仕候事、士の仕間

敷儀、其上御僉議も可レ有レ之候得ば、無罪條々可二申上一と安堵仕居申所、今朝宮内被二申渡一候旨、被二仰付一様も可レ有候へども、御前近く被二召仕一候故、以二御慈悲一顯照寺にて切腹被二仰付一候間、用意可レ仕旨にて御座候、此節罪之程尋度存候へども、死を被レ召上にて兎角申上候も、御取上無レ之時は、却て腰拔の様に死後之沙汰可レ有哉と、乍二無念一不レ及二是非一候、今晝顯照寺へ參申所、老僧亡父が馴染を思ひ、暇乞の盃被レ致候後、一昨日松島源左衞門當寺にて切腹被二仰付一、其節一通書調、公儀之首尾を窺、御用人中迄咄し申様に被レ申候、如何様之儀は不レ存候へども、貴殿と二人の間不義も有レ之様に被二思召一、如レ此被二仰付一候旨、無念之儀也と被レ存、死後に成共實の相顯、殿様御憤解申候はば、此上の本懷と被レ認ものと存ずるよし語り被レ申候、左候へば彌世の風聞の通と奉レ存候、扨々讒口を御用被レ遊、御吟味も無レ之段、乍レ恐御恨に奉レ存候、讒者は御出頭日の出、東條伊織にて可レ有二御座一と奉レ存候、去春より伊織數通越申故、同心不レ仕事申切遣し、二度被二申越一候ば可二討果一覺悟にて居申所、又候哉松島が懇意は各別にてなど、被二申越一候故、源左衞門に前々よりの首尾、幷に此紙面見せ申、我等が料簡語申候得ば、如何様に申共不レ苦事、兎角堪忍仕候得、常々高知拜領仕候は、自然の時御馬前にて御奉公可レ仕爲なれば、私の事を以犬死仕候は不忠甚敷、武士の義を失と異見仕候故、尤と其分にて御奉公仕候、源左衞門と兄弟の契約仕候事、亡父が遺言、召仕之家人共も能存知申候、義理正き源左衞門は、無罪に切腹被二仰付一、不義不道の伊織は、御出頭之長と成申事、御僉議の不レ足歟、源左衞門幷私武運之盡申所歟、畢竟殿様の御損と奉レ存候、則伊織書が狀も一封に仕指上申候、哀願くは此趣達二御前一候はゞ、死後之面目不レ過レ之奉レ存候、乍レ憚書置申旨如レ件、頓首謹言、

貞享五年丑の三月廿日　櫻井金彌判

御仕置中御不審被レ成るゝは、如レ此證文ありしに、何とて今まで出されぬや、金右衞門にむりより、されば此二通の書置は、去々年我等手に入申候、子細は顯照寺後住預置、時節を以早々御奉行所へ指出す約束の所、伊織が勢に恐れ遲滯仕候、其後顯照寺遊女請出し申惡名身に迫りかけ落仕候、跡にて只今の顯照寺文庫にありしを見出し、松島源左衞門書置と上書のあるゆへ拙者へ越申候、然共伊織も疾立退申候へば不レ及二是非一、せめて二人の娘に伊織を討せ、源左衞門が墓所に手向申さんと、思慮をめぐらし申内に、江州邊にて伊織病死候と聞ければ、無念ながら沙汰をも仕つらざりし、首尾くわしく御上へ達して、金右衞門始終尤の仕方と感せられ、今度の願も其通りに仰付られ、早速因州へ遣し、申やうにとの儀にて歸りぬ、

京縫鎖帷子卷之三終

京縫鎖帷子卷之四

一、乘懸たる武士の一言

好(えしみ)をむすび禍をまねく、ことの葉の重きを知て愼むは、行もたゞしく嗜もよきものなり、いかつけに臂はるを武士の作法と思ひ、人の非をいひ罵しるは、却て常の威儀を失なひ、士たるの義に疎きものなり、吉田何がしが家にて、勸進的の下稽古ありて、若手多寄合ける、晝休の酒中半に、ある人笹部折右衞門はぬかつた男、行歩叶はぬならば致しやうあらんに、をくれをつたものよなどゝ耳籬につく、詩人の戒を忘れ笑ひしを、折右衞門聞ぬれども、大事のまへの小事なれば、聞ぬ顔して唯足の療治をとのみ心を盡し、やうやう歩まるゝ程になれば、頭まで御暇の願さし出しけれども、仰付られ遲引になりぬれば、願埒明ぬとてふら〳〵しては、腰ぬけ沙汰の口もふさぎがたしと、寶永三年五月の末、夜にまぎれて鳥取を出ぬ、かくとは知らで金助お梅、下人少々召つれ、折右衞門が宅を尋來れば、家には長屋もの夫婦までにて、かやう〳〵

といふに驚き、大坂の宿知るべき、たより求めてくわしく問ひ、直に駕籠の人まして夜を日につぎ、中の島中國屋喜右衞門所へ尋ゆけば、はや船こしらへましてと、はだかばらの男が走りかへるにぞ、さても天の惠みありがたしと、折右衞門にかくといへば、大に驚き、まづこなたへと二階にあがり、お梅殘らぬ國もとの次第語れば、御もつともには候へども、女中を敵討にともなふ事、世間のとなへも濟ぬもの、ことさら傳右衞門ふせいを討んとて、大勢づれもこと〴〵し、御志の程は知れました、御上京は御無用になされ、當地に御滯留ありて、風次第御下り候へ、拙者は片時も急ぐべしと、喜右衞門に、此お衆を下りふね聞立、乘せましてくれよといひつけ出んとするを、金助袂をとりて、仰いかにも至極いたし候へども、國もとにて用人中の耳にも入たる事、梅こそは女儀の事、それがし是より空しく歸らるゝものか、歸りて士がたち申さうか、御自分の義を立んとて、人の分の立ぬはおかまひなきかといふに、折右衞門返答なく、成程誤りました、世の評判はいかやうにあるとても、此上は是非に及ばぬ事にて候へば御供申べし、しからば船に乘りたまへと、三人に下人丸平仁助もろともに三十石に打乘り、伏見に着くと宿みつくろひ、爰にておむめ熊谷笠の若衆ぶり、兩腰つんざし名護織を吉彌むすび、もゝだちの仕出し、あつばれ都の名とり水、小野川氏のながれ男も、いかなおよばぬ後つき、六月朔日三條小橋三文字屋に宿をもとめ、それより毎日の物見遊山、若き男さへ見れば、あれかこれかとめつそうに、京の住居は一條か二條三條河原より、門跡大佛の殘りなく、人のあつまる祇園、嵯峨、賀茂、黒谷も見ぬ所なき、島原のつぼねのぞきて、今日もまた空しく三文字屋が二階小座敷、暑やとて心苦しき三人の、中にもお梅は草臥の、行水のちにとかゐころぶ、宿の娘におしまとて、ことし五々の脇詰姿のやさしくも、京產れのものごし、はねもどりの男えらび、親のあぐむもことはりなるが、おむめが二皮眼の見かへし憎からで、われに心のありすがた、いとしらしいと思ふより、さま〴〵知らせて見けれども、更にそれともきこへねば、田舍衆の埒も明かぬと、打付けにいひくどけば、あゝこはやとにげて寄りつかず、それより茶さへ手に取らねば、おしまもはや是までと思ひきり、さら

さらと書き認め、二階を見れば三人前後も知らぬ晝の疲れ、よい折なりとふところへさし入るれば、お梅目を覺し、恐ろしい夢を見てをそはれをつたに、誰じやぞと見れば、おしまぬからぬ顏、お行水でお草臥はやみましよぞ、とらしましたとさきにたつ、是から浴衣着てゆこと帶をほどけば、これはさてなんじやと見ればおしまが文、八年このかた愛染さま、ならざ命をあげますと、いのりし戀のかけまくも、そもじさまぞと嬉しくて、この程心づかひいふまでもなき事なるに、つゐにおいらへなきからは、とんと死ねとのことなりと、悟りまいらせ候ゆへ、今宵はかなくなりまいらせ、思ひしらせ申べしと、血を惜まぬふみの中、お梅さあらぬていにて湯どのへゆき、せなかたのもといひければ、おしま來たりて、うる〳〵涙つくり顏、おむめいひけるは、思召の嬉しさ、われも岩木にあらねども、この間も聞かれしごとく、參宮の志にてあるなれば、下向の時はかならず〳〵かはゆがりてたべといふに、おしままこと〻嬉しく、忘れさんすな若衆さまと、ほと〳〵たゝくせなかより、前にまはる手のつらさ、やう〳〵知られず二階にあがる、心の中のおかしさ、

二、此段紅うら鼓のちらし

未熟兵法は町人の大疵、もとは江州水口に、代々富優をうけつぎし町人、商賣事よりいさゝかの口論し、右左方討果す折ふし、助太刀の申わけ幾重にも立がたく、所御追放の後、京都五條わたりに身をひそめ、手なれし櫛もしにせなければ、毎年因州の御城下へ、絹ものなど拂りける身も次第にくろみ、近年は因幡にて、歳もとるほど廣く商せしが、とりわけ屋敷がたは出入ぬ所もなく、内證まで見通しの金九郎とて、武士がたの氣に入しが、當年も春よりくだり五月前に上る、用事も仕舞かね五月中京に暮し、とてもの儀に祇園の會涼に一日望ありと、都の名殘思ふまゝに、けふも四條のおたびを東へ小橋の詰にて、折右衛門をちらと見つけ、是はまさしく笹部樣、別てお目を下さるゝ御方なれば、金九郎憚りながらおそばへより、わたくし儀はといひもあへぬに折右衛門、金九久しや、身どもゝ參宮の志にて、一昨日當地へ上り、宿本はそこ〳〵なる、ちと出られよと挨拶して、別れる足もとより、金九郎も身の爲なれば、御宿もとへ見舞のしし、鯛屋の折に念を入させ、翌朝三條へ見舞ければ、折右衛門滿足して、こなたへと奥の一間へ金九郎を呼び、四方山の噺、下向なら案内たのまんものをなど笑ひ、何となく役者の傳右衛門、因幡を浪人して後、當地に住居するよし聞ぬれども、何町に居るやら知らず、其方にも存じのごとく、隣家ゆへ心安いたせし事なれば、尋度おもふが宿所をしられずやといひければ、金九郎きほひかゝり、其傳右衛門は當地生れにて、上立賣に親は花屋喜右衛門とて御ざ候ゆへ、傳右衛門御國に勤られし時は、書狀など屆申候、御國浪人の後はいかゞめされ候や、私も存じ申さぬよし、さらば追付國にて逢ひましよ、過分々々と次までをくり、さては親本聞上は、もはや此方のものじやと、三人悦び上立賣本屋がのれんを目あてに、近所にて紙入なんど多くあつらへ、よいしほを見て花屋喜右衛門の子傳右衛門といふもの、因幡に扶持せしが、簡略ゆへ浪人して、當地へ上り親と一所に居ともいひ、別宅して鼓の指南するとも聞しが、知られずやといへば、只今は下立賣堀川の角に借宅して居る、くわしき事まで語りければ、しすましたりと、金助殿おむめどのは三條へ歸りたまへ、たしかに見屆やがて歸らんと、折右衛門ひとりゆきて樣子をうかゞひ見る所へ、傳右衛門十三四の童僕にあみ笠持せて家に歸りければ、しかと見すまし三文字屋へ歸り、兩人にかくと知らせ、早々御公儀へ申達し、明る七日の朝用意して、金助お梅熊谷笠、下着は各鎖帷子、折右衛門先づつる〳〵と朝支度する所へ、案内して通りければ、傳右衛門興をさまし、是は江戸より誰とおのぼりなされまするか、よくお尋なされましたと、お茶よ煙草盆よと馳走ぶりなりし所へ、金助お梅つゝと來り、お梅はやく言葉をかけ、いかに傳右衛門、みづからは折右衛門女房の妹なり、汝が不義ゆゑ姉は既に討たれぬ、しかればそちは姉のかたき、覺へたかとずはと拔く、傳右衛門はつといふて飛びしさり、拔き合する所を、折右衛門走りかかりて、拔き討にめつかう伐れば、太き胴、眞紅のしらべ亂れたごとくなりにけり、これを見て傳右衛門が女房、長刀拔いてまくりかゝるを、金助ひらりとかゐくゞり、兩手をむずととる、くいつかんとしける所を、おむめひたいをとつてうしろへをさへ、初終りをいひ聞かせければ、さては是非に及ばぬ事、お恨み申

さんやうなしと、倒れ伏して啼く所へ、町の人々あはや喧嘩とかけよるを首尾いひ聞かせて、討おふせし旨又御公儀へ申上、殘る所なき敵討、目出度し〳〵ちくほ〳〵と、はやしたて丶ぞ歸りける、

時寶永三年丙戌仲秋吉祥日

書肆　綠竹軒榮秀板行

京縫鎖帷子卷之四終

御入部伽羅女序

富と貴とは是人の欲する處、蓋其道を以てこれを得ざれば、豈自レ天不レ降二生民一、みちをもつて人性を琢ときんば、天運正に循還す、爰に洛陽長者町に大黑屋宗善とて、代々繁榮の人あり、慈心ふかく佛神を敬ふ事前代未聞也、且其一生を爰に記、これを見ん人、琥珀の朽たる塵をそむき、磁石の曲れる針を吸ざる心底ともなりなんと、是を綴り侍る者歟、

于時寶永七寅九月吉祥日

湯漬氏甑水書レ之

御入部伽羅女目錄

卷之一

一、津國池田に一番の　ふしぎは神風しづが丸　萬願寺屋酒くめども　つきせぬほりぬき　分限者の後生れがひ

二、都に一番大黑屋宗善　美女輩に御隱居一人　家來は二百九十人の內　女中が半分のうへした共に　不斷鹿子に紅裏やましい身體

三、江戸に一番の材木藏　智惠より根引冬木櫻　浮世に名高くつれ引の　三昧線でうしのよいに　乘たりや京屋の雲居

四、伏見に一番の御船頭　飛駕（はやかご）いそで希代男　むまれは撞木町のあと先　ふみそこなふたり丸た船　以上五人のかくし女郎

卷之二

五、御前一番の缺落　僉議は花崎二枚手形　千話文五ツが十九匁二分亡る　年は廿九水性なれど　ひでり男に渡したり金五十兩

六、島原一番の目安書　戀風引込唐津茶碗　筆の命毛あぶない所を吟味　にあひの町宿老が分別一ツ　は後生の種蒔ゑ屋宇八が仕合

七、日本一番男山の　正直は二度めの御夢想　御詫宣きいたよりかたじけない　十二疫神の內身體破めつ　明神の御ゑんぎまち〳〵成事

たのみは乳母が詞一種に　神のお身にも耳たぶのよいと
八、三國一番の御佛　わるいと京中男女願文を
かけ奉るにしきの下帶

卷之三

水損のない牧方小判
九、道中一番の前金取　爰は脇つめ御法度のながれ
女それで川端ふたりころり
山桝みそよりからい心底

飛脚は月にお三度大臣
十、大坂一番の智惠男　何成ともむづかしい事そんなら
梅川におよぎついた亀はいかに
是は忠ゆるさせそんせず

榮華は一時千年の樂
十一、西國一番の忠臣　實は御家老職脇見に
緋縮緬は下女が仕合
殿のお目がれお國腹十三人

氷室の二字が一字萬金
十二、天竺一番の名言　吟味は暦の中段〳〵と
我子に世話をやきあみ笠
惡所狂ひをたのむおやじ

卷之四

喧嘩はほだか金百兩包
十三、三ケの津一番の　役者も爰は一分たゝぬ往事
みがいて見てもさびの落ぬ
舞臺わきざし大ぜりふ

金のふぼさにふしつきの口上
十四、新町一番の太夫食事に　料理した丸鯰わい〳〵
思ふたとは各別の評判
不殘名よせ座敷上るり

戀より無常を見たる男
十五、川端一番の大商人　願ひは女のちから草に
引こかしたり材木もく
してもすまぬせんぎ

財布に禿が目印の涙人
十六、傾國一番の御心中　所とて塚にてうもんみそじ
ひともじかりぎにんにくわけ
ぎはしらねど殊勝也千日寺

卷之五

願は垂愛間害じまん
十七、泉州貝塚に一番の夫殺　すきに赤ふぼし善詰の入聟
十一人までもつともひのへ
美そうなる御息女

開帳は本の佛ごかし
十八、見世物の内一番の　おもひいれにて久しい恥を
さらし着た女男は備後の
福山ほどさる錢はもどり

義理よりふかひ蜆川のゆふぐれ
十九、茶尾一番の名取女　幽靈のないことば賞
不殘ながれの身を
すくひ取阿彌陀池大施行

金が敵のすふぐまで語り草
二十、太夫一番の見世破ひ　それでも松梅さまたげ
まいさいふ約束ちがひ
世間に是沙汰のかぎり

卷之六

名殘は班女があふぎ車
二十一、遊色一番難波の新町　四筋不レ殘女郎の名よせ
ならひに内證友吟味する
揚屋茶やの臥藝者かゝみ

萬歳うたに神樂男　龜相は僕が手付がれ〳〵主
二十二、五十三次一番の旅籠屋　人の目にもあまり成夜中の
文作間耳果報は城六内出し
たり鶴亀松竹

御入部伽羅女目錄終

御入部伽羅女卷之一

一、不思儀は神風靜丸

姿は莊(かざる)に艶有、詞はすくなきに愛敬をほし、人常に嗜べきは、兼ての身持行跡に虛實見ゆれば、中庸の境を踏分、佛神の不思儀を知るべし、爰に津國池田の里に萬願寺屋とて、かくれなき根來(ねがい)分限、軒をならべし酒林もむかしより次第に繁り、年中數萬駄の江戸酒積共、つゐに海上にて船損なきは、萬願を神にまかせ、佛に誓ふかき印は、中山寺にて常攝待、不斷順禮の咽をうるほす、ゆへば纔の寄進なれども、茶一滴萬倍の酒に德有、すぎし年、京衆と打見に八丈島の下着きたる順禮、此攝待に立より、せんじ茶に思ひで申、施主の所を尋られし折節、萬願寺屋の手代此場に居合、私主人が心ざし、先年よりの次第語り、商賣は酒屋のよし申せば、彼人信心のふかきをかんじ、それがしは上京一條邊に住者なるが、少づゝの酒も以後は御無心申べしなど、いひずての言葉ちがはず、それより半年も過、京の者とて尋來り、日外旦那西國の節、酒の事

申され候よし、先風味を考がへる爲、すこしながら御念入られ、三十石御積のぼせ、直段にはかまひなし、隨分上諸白との望、手代共合點せず、今の京燒失のあげく、軒端さへまばらがちに、我人拙略を好折ふしを、大名の屋敷はしらず、町人の身體として、すこしの酒鹽分に三十石の酒、近頃のみこまぬ行方、但請酒にても御商賣の御家なるか、よしそれは僉議に及ず、酒京着の節すぐに金子さへ御渡し給はらば、明朝積上すべきの儀、京の手代是を聞、いまだ廿一二の若者なりしが、成程御不審御尤の事、しかし其酒せつかく御登せ候ても、旦那が口に相申さねば、重てのお爲惡し、私爰にて風味をかんがへ、心に入るを望むべきよし、手代共勝手に出、六段の銚子をならべ、皆々酒に相違あれば、六色の内にてのぞみ給へと申ける時、此男片はしより牛盃づゝ味わい見て、二つの銚子を一所になほし、六色とはのたまへど、此二種はひとつの御酒、さけは五いろに相極まつたり、中にも此酒新酒ながら、旦那が口に相應致せば、とてもの事五十石御登し有べし、代銀の儀は只今に渡し置べしと、召つれし男が懷中せし打がへ出させ、此金二百兩有、内算用して御引との見事さ、手代共よこ手打、さりとは不思儀なる御考、酒は成程五段なりしが、御心を引見ん爲、六いろとの虚言、其所を呑分給ふは、つねならぬ御方、殊に十貫目が酒一度に調給ふ御町人、誰樣にやと尋し時、只今是にて名乘にも不レ及、此後は度々五十石百石づゝ申越べし、金子參らず共賴入るの段々、馳走の禮儀をたゞし、此所へ御登せと書つけ見れば、長者町大黑屋宗善と印置、彼手代は京へのぼりぬ、扨其晩より酒を積立、手代兩人上乘してほどなく京にのぼり、かの書付の家形に酒あげ、さて風體をながめけるに、住家位だかく美をつくせしありさま、公家にもあらず武家にもあらず、まつた町人かとおもへばつとめる商賣もなし、軒端高に切石積上、四方のかまへ雪より妬、門々には番の男、一時がわりに夜の寐ずのばん勤るよし、晝は玄關に手代あまた、黑羽二重の定紋あらそひ、上下も折目高に、金拵の一腰づゝにて町人とはさとりぬ、されば此人の事、隣町にて尋けるに、もと此家太閤時代より、今の寶永まで相榮、當あるじまで六代分限、いづれの比より、をのづからこの人のすめる町を、長者町といひならはせしも、本朝

にかくれなく、大黑屋の宗善とて、代々枡かけ切傳へ、四十過より法體きはめ、若隱居して大黑姿、跡取は東西子より勝久と名前をつたへ、十一歳にてふり袖かくし、十三の年半元服、十五歳にて男となり、廿一にて妻をむかへ、先祖よりの定めのごとくに、嫁も十五の初馬生れ、器量と氏は申に不レ及、手跡すぐれ和歌にさとく、琴、歌がるた、打はやし、楊弓、香會、連俳、茶の湯、碁、雙六の外、一ふしの葉歌、聲までを吟味せしにも、さすが都の廣きしるし、大黑屋の祝言前とて、年と月日の相性あらため、毎日五人七人づゝ、れき〳〵がたの息女言入、何れかをろかの氏もなく、姿繪に花をかざりて、此家に市をなしぬ、

第二、美女手車に御隱居一人

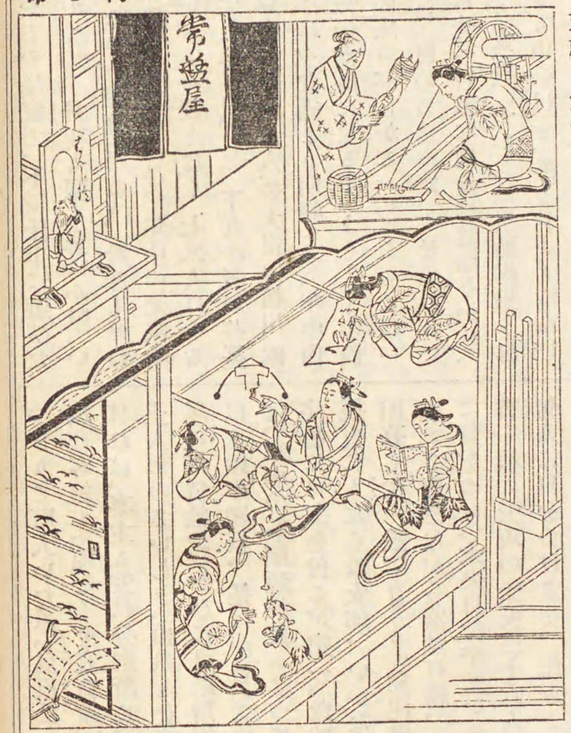
世に言傳し優曇花と申は、人壽八萬歳の時、金輪王四州をめぐりて、海中にいたり給へば、此花現ずるにぞ、實に逢がたきためしに引、すくなき緣には此花の事をいへり、されば大黑屋宗善も、今うどん花の時を得て、其身はや四十三歳、先祖五代の例にまかせ、法體姿にさまをかへ、するはる〳〵との樂、世間體の隱居とちがひ、此家の作法と申は、家督不レ殘請取てより、四十三の暮までは、我妻より外女の手から物をとらず、もとより傾城野郎は猶しもかたき掟をまもつて後、隱居屋鋪へなほると、其儘妾狂ひのぞみ次第に、京中の美女を集、喜見城のたのしび、十四五より廿をかぎつて、隨分器量すぐれし艶女廿五人、此女の役目には二六時中の差別なく、御隱居の仰に隨ひ、皆々立寄お手ぐるま、あるひは祇園會清水まつり、住吉の御祓も過、秋の夕暮淋しき折には、道中五十三つぎ移して、留女のたはふれ事、この外有とあらゆる慰、晝夜ともに勤の外、假にも念佛佛法ばなしと、男ぶりの善惡評判、もとより奉公の目見へすみ、お隙あき出るまでは、男の顔見る事ならず、かやうのことさへ急度まもれば、給銀半季に廿兩、外に御家の定紋大きに四季の小袖、重々かたじけなき勤ぞかし、されば一子勝久も、二九からぬ年つもり、當年はや廿一歳、自然と當流美男、關をかぎつて西の國にはまれなる男あつぱれ大將の器量そなはり、漢朝の書籍、春秋史記などいふ實錄に眼をさらせば、仁義の媒孝の道筋明なる心より、いとゞ詩歌の道に長たり、よつて歴々方より緣をもとめ、婚開（こんぎつく）の言入あれども、勝久さらに

同心なく、下心に出家の望、父母はいふに不レ及、あまたの家來是をなげき、さま〴〵と異見申に、いつの比よりけつか引かへ、勞痎の病性となり、日に〳〵ましに倦薄く、炎にむかふ氷のごとし、依レ之京中の醫家、あるひは大名諸家の典藥、耆婆が術、華佗が醫方も、今ははや賴なきにぞ、いとゞ敷一家おどろき、氏神へ祈誓ふかく、大神宮へはだし參り、八幡への命ごひ、松尾貴船へ御湯をまゐらせ、諸寺靈山の貴僧高僧、護摩を修し檀におどる、中にも三井山、比叡山王廿一社の感應にや、すこし元氣に食もすゝみ、十の物九つ九分迷土者を取かへせば、一家一門出入の男女、くらがりより明り障子、神のお力佛の奇特と、いよ〳〵貴ぶ實より、勝久も今ははやもとの者になり、かつかうつき〳〵に手をはなさせ、庭の花見ひとりあるきも、此病身はたのみがたし、元は氣のとゞこをり、内氣なる男女をほくは思ふ事人にもかたらず、心計にあんじわづらふ、これ勞性のことなれば、若や心に望こと、色の道はいふに不レ及、金銀づくにてなる事ならばと、いとゞ憂親の按じ、ある時宗善手代共を近くめされ、汝らもしるごとく、我此家に生れてより四十三年、かはらず榮華を詠むといへども、いまだ金銀財寶のかぎりをしらず、然るに我今たま〳〵に一子をもてども、病身なるに心ひかれ、子ゆゑにまよふ親の身を、かた〴〵もさつすべし、かれもし憂世のいとまをとらば、久しき長者が家も絶うせ、末代までの恥辱なるべし、かやうに勞性に心をなやむも、元内心に樂なく、こゝろのむすぼれ、第一の小氣なれば、何とぞかた〳〵智惠をめぐらし、彼に傾國遊里を見せなば、大氣にもとづく手だて共成、病氣もゆゝ敗本復すべしと、事を分の給へば、あまたの手代畏り、仰のごとく此御慰肝もんの御計略、且又色里の儀は、末社と申て傾城の道引、御氣をうかす役目の者御座候、それらをよびよせ申ふくめ、御小氣の療治致さば、まのあたり御本復と目出度吉左右、父の宗善御機嫌よく、さあらば其道引を片時もはやく呼集、吟味せよとの仰にしたがひ、京中にふれをまはし、末社太鼓のあつかはなるをかぎりなふあつめける、

第三、智惠より根引冬木櫻

物には時節到來、有馬の湯女と太鼓持を夫婦にして詠めたし、第一に酒よう呑で、唯人より物をほしがり、取しめもなふわやくやな氣で、不斷仕事に遊びたがる癖、無物を着たがつて、月夜も闇も鼻に小歌、いかさま京江戸大坂のきさじ媚商賣とて、吟味もせねば家主へも其分、相應に家賃を拂ひ、年中の米味噌薪も、春秋二度に買がゝり一錢もなく、七八人口ゆるりくはんすに不斷茶をたぎらかし、下女小者が茶臺にて奉る程の末社、京中に八十七人、皆大臣の情川露のいとなみ、虛を上手に夕食過より明朝まで、年中内にねぬ商賣、こんな男の女房になる事、よく〳〵の因果、ふだんひとりねの床さびしかるべし、こちとは一夜にても夫の留主には、目のあはぬ癖、くせのわるい事もあるかと、半分は先へ行氣な地女は道理ぞかし、すべて末社につれそう女房、大かたは引船鹿戀うれぞこ、内證は勤の内より申かはせ、酢も甘いも喰ぬけての女房、中々人のをもはくとは各別、されば近年京中の人奢といふは、大體よその物にて商賣仕廣げ、せんせいを第一に、身分より風體すぎれば、をのづから曾我殿は猶世間の付合角を崩さず、をつとつての一腰金目貫に鮫鞘、中は何にもせよ、町髮結さへ是をさせば、氣のはるもことはり、されど過し大火より、めつきりと町人いたみ、島原はいふまでもなし、祇園八坂に客絶て、隙なくせ長命草いやまし、酒樽に蜘の巣はれば、亭主も爰は分別所と、清水燒の下地を拵へ、土人形のさいしき、山衆もをのづと是を手傳、隣の茶屋には賃紬、むかひには紙屑籠張、是に目鼻を書、げほう頭の鑑板、是はかわつた思ひ付と商賣の品を聞ば、京中の茶屋顔が長ふなつて、内がすいたといふ判字物には氣を付るが第一、此時島原の迷惑、さし當て振賣にもならぬ女郎、いかなる家にも十四五人づゝ明暮と欠の數、ちり〳〵の貂泥書より田舍土產、京屋雲井とて鹿戀ながら器量打越、松梅ならねど此度の隙に氣をつけ、太夫目付字といふたばこ入の仕出し、奉書一枚に大坂の太夫三十六人を歌仙に作り、是を一句人に目をつけさせ、此方より其目付字をあらはすの口傳也、總じての祕密事、其品を聞傳受得てこそ、心安くは思はるれ、其元を仕出し工夫、編るは一人前の智惠にあらず、其折節江戸材木屋の何がし登都の砌、一文字屋の小倉に見參の比、松山といふ引船、彼目付字の慰せしを、大臣見てより次第をとへば、其女郎のちゑといふにぞ、見ぬ戀の海ふかふなつて、其翌日

首尾を調へ、一座の愛敬しめやかなる心底、初會より身請して江戸櫻とはなしぬ、是自然と唯居せぬ冥加なれば、是からは懐紙らうそく、髪の落にて人形の頭、繪ごゝろ有のは櫛に蒔繪、數珠をつなげば佛に縁あり、何をなさるゝも身のお爲、人のしる事にあらずと、世智の宇八といふ末社、太夫にまですゝめしは、此折太鼓のがつたり城六といふ男、是も類火にあひの町、燒屋鋪へせめてはと、灰かく男に打まじり、一日二百の日用賃、此銀の緒にとりつき、一日二日こそ人も知らね、三日めより力仕事は、ならずものと此場もはぶかれ、それよりは何がなと、元手のいらぬ商賣、巾着切も命



が物種、荷ひ賣は肩がきかず、手先に覺し職もなければ、今といふ今分別きはめ、妻子を態と北野へまゐらせ、いさぎよく身づくろひせし處へ、友達の宇八來り、お内儀はといふ下より、彼細引に氣を付、是は城六合點がゆかずと、あたまからせめとへば、何をか包まんかうした所存、只今留られても、今宵をば待ぬ心底、いち〳〵道理尤にして、其元とへば是御覽せと、質の札三十三枚、つまり肴に鍋釜まで揚、男が是でたとふかと、小粒程な涙をながせば、宇八ねめつけ、さりとては白人藝、すべて我等が身持と申は、人手にあるを露に請れば、もとより我がものといふはなし、今の京こそ是なれ、二三年も待絶へ、王城には

ふしぎあつて、しせんとの悅び來る、三月より内裡御普請、何程だらついても、つかみ取とは此事に、我等爰へ參るも、苦は色かわる缺落也、次第といつぱ、去年の春より宿賃積りて三百廿匁、此外飯米薪屋紙屋、愛宕様の御佛餉米さへ、二斗三升語喰、爰をもつて身體不レ殘渡すと申手形ともに、廿匁がものあるなしさらりと仕廻ふての、今思へば此世は假の宿、唯今拙者參らぬ時は、御身も此場で死る覺悟、引かへせしは佛の方便、幸質札三十三枚、とても人手に渡すにあらず、是を順禮觀音へ打納め、重て此世に生れても、此札に縁遠く、唯今の此身引かへ、大臣にむまるゝ願ひ、おもひ

立日が吉日と語れば城六悅び、とてもの事におひづるの拵へ、宇八顔ふり、それは本まの順禮拙者らは是程に借錢を背におひづる、佛は見通し、先一番に札樂やといふ上の句は、一度那智へ參詣の男女は、質札の冥加につきさせ、永き辛苦をやめさせんとの御歌爰をもつて札樂とぞ申よし、二番に紀三井寺とは空大臣の異名、是も我等が吉左右、よし田に居る誰もかれもと、同末社十七人、時は寶永七年のはる、花の都を跡に見なし、伏見の方へぞをもむきぬ、

第四、飛駕籠に乘て希代男

夫變易生死と申は、佛神の願力或は助力により、惡事も善に替る姿の末社共、大佛海道稲荷も打過、はやく

夜舟に法の道、いそいで出しやと口々にわめく所へ、四五枚肩にて歴々の御駕籠、扨はお大名の早追なりと、皆々よけて是を通すに、先立男夜舟をさがし、京より俄に缺落同前の順禮衆は居給はずやといひしな宇八を見て悅、件の駕籠へ三つ指にて申上れば、内よりしかつべらしき男此舟に乘移り、さも慇懃成口上、拙者儀は長者町大黑屋宗善家來、藩架四五右衞門と申者、しかるにさんぬる比より若旦那病氣に付、近比おむつかしながら御相談申儀あつて、今朝より御宿所へ相尋候所に、此段承りかくの仕合、何も御苦勞の御事ながら、これより直に旦那方へ御越くださるべしとて、京橋の駕籠十七挺借是非をいはせず、駕籠かきは大きに悅び、船頭は腹をすへかね、一たん乘せし上は六十づゝの船賃、銀になほして十四匁、京の人が病氣なとて、此方の舟は頭痛もせずと片肌ぬぐ時、京の手代一角出して船頭に渡せば、波風たゝずに十七人、寐耳へ結構な仕合飛入、乘事はのつたれども、どうやら是は夢かとおもはれ、ころは二月中旬なりしに、何も取合ぬ裝束をかし、はや二條の室町邊より、先ばしりかくとつげれば、彼家形には大門開せ、萬燈あざむく大挑燈、隣町より軒端につゞかせ、迎の手代十四五人、御大儀の卷舌のぶるに、かゝはゆさ大方ならず、漸々玄關よりにちりあがれば、次の座敷へ手代道引車座に割膝、處へ十四五成小姓四五人、裏付の上下折目高なる茶臺の持ぶり、幽齋時代の寰碁盆、十計もをなじ模樣な唐金の大火鉢、是も揃へて十人前、氣を付る程箔な僉議、しばらくあつて奥の方より五十計の位高き男、是なん長者宗善かと思へば、此家の家老職森岡源右衞門とて、萬端此男支配のよし、一禮ぎゝと絶て後、勝久どの病氣の次第、元少氣より勞性さし出皆々手に汗握る折節、各がたの配劑にて、傾城町にかよひそめられ、世間にほしがる金銀を蒔るゝ程の氣出來れば、親旦那儀は申に不レ及、家内の者出入の男女、およそ四五百人皆浮みあがる事、まして御自分方の御内證年中の儀は宗善請取、此家あらんかぎり疎略に致申さぬ儀也、但大氣になられ金銀を蒔るゝ儀は、何程にてもかまひなし、をの〳〵にも力次第、隨分と騷をくわだて、所の者悅ぶやうに心をつけ給はるべし、然共此事はまだ若旦那には申きかさず、何も方のやうすも聞、其上と存ずる事にて、

先ひかへ置候得共、しゆび見合申きかせ、同心のいたされなば、諸事引廻し賴度口上、うけ給はりし中にも宇八申樣、仰のごとく勞性と申は醫家のしる處に無二御座一、もとより針灸陰陽師たとひ身をくだくといふ共、それらが手にも及がたし、先は十人の内九人までは、我等が家より療治いたし、御機嫌に預りし御高家大名數をしらず、しかれども其御病人、見ぬ請合も成がたし、御勝手次第に御脈をうかゞひ、其上の儀と申上れば、四五右衞門笑をふくまれ、御尤の御事、明日宗善にも申聞、よろこばせ申べし、先をろくにといふ下より、八九人の美少人、光かゞやく膳部廻り、つゐに御げんにいらぬ料理、さまゞ〳〵馳走の數もをはり、今宵は爰に御一宿と達ての御意、そむくは恐れ候得共、又明日も參上再拜、敬て憚なく、以後は旦那の御影、先お暇と申出れば、大の六尺十七人、七の圖までうしろをしまず、一人前づゝ大挑灯にておくらるゝに痛入、身も小そふなりぬ、

御入部伽羅女卷之一　終

御入部伽羅女卷之二

第一、僉儀は花崎二枚手形

それ太上天皇の尊號も、漢家には太公の舊躅といひ、本朝には草壁の王子と摸するも、皆是作文物語の意也、されば十七人の末社のこらず、東山松林庵に寄合、此度の壽きつゐに圖のない行方、尤長者の一子なれば、大臣にして慥な事鬼に鐵棒、すかさず此方より御見廻可レ申や、またあの方の一左右聞までもなふ、親の身として子に惡性をすゝむる慈悲、是を背く子はあるまじ、殊更夜前の樣子手代共を窺ふに、京に住ながら島原さへ覗ぬ者共、めん〳〵の身のためなれば、よつてかゝつて世話をやくべし、此方より手をさす事、十に七ッのよはみ、あなたからの使をまてと、けふの料理も此當、一盃呑とはや氣もがふとく、めつたに肴の數あらし、三右衞門が六ほうづくしの八郎殿氣になつて、おさへた間をむりいふ處へ、長者町の手代荒川藤右衞門と申者、御見廻申よし、慇懃に手をつかね、先以夜前は遠方より御來駕の段、宗善承り大

悅いたし、則悴勝久にも申含め、其身の養性一つは又親一門への孝行なりと、あまたの手代とやかくまうせど、曾て同心いたさず、是非なき仕合、先は昨日御禮の爲、少微ながらと金拾兩、框(ず)にのつしりと、宇八申は、此御禮に及ばせ給はず、さりながら御白人がたゝめつたにすゝめ給ひしとて、御承引なきはことはり、先何事なふつれまし出つゝ、彼女の風俗より、道中などにて地女のせぬ詞づかひ、しせんとの妙あつて、人界へ生じたる者、此伽羅の香に曦(なせ)ぬもなし、何ぶんにも我も今一度お脉をうかゞひ、道引の守りをさし上てのうへ、樣子御覽給はるべきよし、此手代顏をふつて、いかな〳〵命の堺め、大事のすゝめにゆだんなし、御出入の醫師針立能役者など口を揃へ、世界の遊樂凡夫心法の魂ひうごいて、大聖普賢菩薩の御住家まで敎へ申、道中のすがたゑみせてもいやましの病氣つのれば、出入の男女もあんじめぐらし、燒鯛さへ火がおこらず、殊に此比まで下京ながら、筋目歷々方の息女、大かた婚禮相極りしも、返替のしゆびまでかたれば、此上は是非も涙を十七人はら〳〵ながし、よう御出といふもそこ〳〵、まづ金子の符を切、當前づゝ配分の處へ、宇八が家主町衆打つれ、十四五人かけこみ、うむなしに宇八をとらまへ、是爰な大膽者、借家かして表屋(おもや)盜人、年月の情をわすれ、爪に火ともす油銀三百廿匁、外に京中の買がゝりは二段、大事といふは島原一文字屋の鹿戀、花崎といふ女郎をそゝのかし、金五拾兩ぬすませつれのきたるよし、曲輪よりはや御公儀へ申上んとのじや〳〵馬、轡に口をし膝をかゞめ、とやかくとの侘、殊に各々の御かいほうにて、此宇八をかくまはれ、見れば金子を引ちらけたやうす、御法度の博奕と存るよし、それは後日の沙汰、先此男と金拾兩は、町中への預りと宇八が小腕引たつれば、みな〳〵あきれ、一もとらず二番めに此仕合と、涙片手に大勢の者家主に取つき、段々御尤、しかしながら其金子は、我々配分の金なれば渡す事成申さず、殊に宇八儀も、はやをの〳〵がたの手に入し上は、網にかゝりし鳥、しばらく待給へと、彌四郎といふ末社宇八にむかひ、花崎事合點參らず、其金子の事いかにとへば、宇八顏あげ、最早此上包におよばず、四五年前よりふかひ中は、稻荷樣も御存なし、乍ㇾ去此儀にをひては騷ぎ給ふな、かへつて此方

より一文字屋へいひぶん、ありやうは花崎事、去年の春年明手形をとつた上に、勤には不思儀や、いつともなふしまつ留(たまつ)て、二三兩づゝ親方へ預け、しなよく身揚もせぬ上郎、積た所が五拾兩の預り手形、印判慥に何時にても出時急度渡すべしと、これより言葉に花を咲せて親方が戀風、女郎にしみ〴〵口說かゝれど、此宇八めにきつふ立臼、たとひこもをまいてものかぬ心底我等にきかし、金の事折々せがめば、空吹風耳にもいれず、とかく埒の明た年に、爰は分別手形があればわしが金と、戸棚の金五拾兩取出し、氣儘な親方いかなもがりも、後がしれずと我等が方へ落つき、年あき手形金の手形、是爰に二枚共に、後日の爲にと取いだせば何も悅び、是さへあれば逆ねだりに金五拾、兩方御前へ出ても此方が勝栗、伊勢屋海老右衞門といふ家主機嫌をなほし、つね〳〵虫もころさぬ人、めつたな事があらふとは存せず、扨其金五拾兩はとゝはるゝ時、花崎が身に付てゐれば、只今はどふもならずの森山、近くに親里あつて、是に居申よし聞分、此上は何も樣にも、友達のよしみに御出あつて、彼轡とせりふ賴申、よし〳〵我等に御まかせと、身ごしらへする時、亭坊松林罷出、今朝より勝手にて承れば、扨扨入ませたる鱠のごとくにあへて、曲輪方には申分こざりますまい、扨今朝片旅籠御酒共に、三匁七分膳と仰られしゆへ、其通に仕りし處に、畫何樣(どなさま)かりつば成御客御一人、御酒のみぎり吸物三度、夕飯も御あつらへゆへ最早出來、御酒御望にまかせ、上々諸白壹斗五舛代、何か二百九拾七匁五分の外に、先刻どやくやと致せし時、何方かは不ㇾ存、去年堀川の道具屋善右衞門方にて、壹兩二歩に相調へし肴鉢御破り、廿人前揃ひし皿五つ、唐津燒の茶碗二つ、是らも半分直にして百四拾五匁、合て四百四拾貳匁五分、御算用下されませと、亭主が後には丸山中の男廿四五人、すはといはゞ打なぐつても取べき行かた、道具そこなひながら、堪忍とも爰はいはれず、もとより喰たものが侘言もならねば、皆々泣顏して、金子七兩壹歩二朱耳を揃へて渡ししなに、せめて金の相場六拾目がへにまけ給へと、わびしき形して皆々宇八が町へぞ歸りき、

第六、戀風引込唐津茶碗

舌の劔身をはみ、慾の熊鷹にとらるゝ、是しせんと和風神國の印、假にもいつはる事なかれ、されば島原の

轡大勢、又宇八が町へ詰かけ、一昨日申通り、いよいよ明日御前へ罷出候よし申せば、五人組かた〳〵寄合、御尤至極の所、しかし宇八が家主、今朝も七つより尋に出られ、いまだ歸られぬ内は御返事成がたし、とかく今晩相談極め、明朝此方より御返事申までは、ひらさら御待達てたのみ入所へ、宇八を友なひ家ぬしの外三四十人、血氣勇入みだれし人を見れば、皆々末社、中にも宇八、かの女郎屋の膝元へどつかとすはり、聞ば拙者を盗賊に致され、金五拾兩盗ませ、花崎をつれのきたるに付、則御前へ出らるゝよし、假令其方出られずとも、此方より出る覺悟、爰にては申事なし、花崎をともなひ、早々明日言上申間、其方も早く參らるべしと、天窓からりん〳〵といふ事胸にこたへ、根がしかけし大膽なれば、此期にいたつてめつきと蹴落され、いかにも〳〵互の事は御前が鋭と、どうやら弱ひ日元へ家立寄て、宇八申さるゝ樣子を聞ば、花崎は去春年もあき、則手形に太鼓程な判有樣に申され、金子のことも同前、五拾兩の預り手形、神明の妙罰八十末社をかけ、宇八虚でないと申が、手形を書た覺えはないか、事によつて大切な命がものだねと、扨も落着たせんさく、時に花崎が親かたおしうつむき、成程此段私が惡事、まつぴら御堪忍下さるべし、其手形二枚共に、いかにも花崎に相渡し、金子も不レ殘かれが物、五拾兩のあやにはあらず、恥を捨ねば理屈くだらず、私内々花崎に行がゝりのわやく、是非もきかぬむりをいやがりぬけ出し、やうすきけば二枚の手形、宇八どのへ預けたるよし、又宇八殿は伏見の夜舟にて、蕎麥切に兩爪ををわすれ、目まひしな川へ落こちの、死骸さへ見えぬと聞、扨は手形も水屑となれば、花崎は我等か者と、人の憂を悦ぶ罰今身にこたへ、大の男泪ぐめば、根が戀ゆへににくげもうすく、家主も道理をふくみ、われらも若ひ時あつて、女郎の一つも買た身なれば、ほかの事聞やうになし、爰は拙者宇八殿へ佗言、一たん盗賊の惡名付ども、聞ながしに堪忍なされ、子細は拙者が銀共に、諸事買がかり一貫九百匁、此借錢に古疊三でう、鍋釜も破たと懸かへ、こなたの常器と折敷二枚、花よりといふ千話文十四五、是をさらへて十九匁二分がものを、身體不レ殘渡とのむごき書置、まんざら疵がないでもなし、こなたが爰へ戻たを幸に、負せ方中へ人を廻し、皆々

宵より勝手になれば、此言分を致さるべしと、肝心の事わきへなれば、花崎親方すゝみ出、宇八どのも永々の窮、貧のぬすみに戀の歌とは、我等とあなたと荷ふて御らふせ、たちまち棒の折る中、直りに宇八殿借錢一貫九百目、後とも申さず拙者相立申べし、是にてお町内にも、我等が惡事御堪忍給はるべしと、尤のいきかたを宇八腕まくりして、是一文字屋殿、人は一代名は末代の惡名を十貫にも賣事ならず、とにかく明日御前といへば、殘りの末社も口々に、爰は宇八が申ごとく、我々が商賣はいきかた一偏のしよさ、盗人の名を洗はぬ内は、傾國にて酒が呑れず、爰はお町衆御苦勞ながら、是非々々御前へ賴と申せば、轡方にはいよいよもがき、其段は如何樣共、御一人分の立樣に、一札を百枚なりともみ手の數々、又家主宇八にむかひ、とにかくかうしたふしやうはある事、今日をの〳〵の踏わられし肴鉢唐津の茶碗も、元あのかたの無實より出たけがなれば、けふの入目七兩壹歩二朱、御合點かといふ間もおそしと、此金子から耳を揃へ、外に壹貫九百目、波風もなふ町へ請取、其上に添いとの一札まで、重々禮いひ、轡は西の里へさらり、こきやこの鷄鳴時相濟、跡は大酒、宇八が面北、町衆の悦び、雨降地かたまるとは、是爾念彼觀音力なり、其故は一端西國と思ひかけ、夜舟までに乘りしが、眞に宇八川へはまらば、花崎もめいわくいたし、二度由輪へ歸り花、又町衆も負せ方中も損といひ難題といひ、口の葉にか、らぬめいわく、伏見より戻りしゆへにぞ、かゝる幸、金十兩の路銀もあれば、是を中間の遣として、是非西國今一度と、彌四郎城六すゝめたつれば、又をの〳〵是にきはめ、宇八が宿にて旅の裝束、此度は表へ慥にかしや札三枚張せて、管の小笠股引脚絆、最前より形もよく、京の町をはなれきつて、苦薩の道に賴母しき心底、いまだ伏見で日も高く、殊に宇八ははまつたといふ噂をいやがり、いそがばまはれ淀堤をありく時、今入船の畫下り、人の楊梅積だやうに、足手ものばされぬ貪慾な乘せ樣ぞと、大坂市の側の手代らしくわめけば、備前衆と見え、とつくりと見さだめて乘ふことぞ、ふりまはしもあぶないといへば、紀州の人の聲して、密柑は波がうすい程うまいが、此舟も板の薄がよいかと惡口に船頭腹立、あり樣は廿五文で十里、とゞして行事が結構すぎての佞言、あの歩行を

行人を見やれ、下り舟に乘らぬ南氣と、登舟に乘たはけらしい、十七人づれ大坂へゆくわろそふなが、今から天狗程あよんでも、橋本より先へはゆかれず、隨分旅籠安い分にて、一人百六十五文づゝ、それも外に女郎買ふて、銀壹兩づゝ氣をはれば、喰物も大かなれど、極めた通旅籠の分では、朝食は腹誥させず、いとしやこはひ牧方にて、晝食に百文づゝ定し、明日は雨なれば、あの足もとでは草鞋もたまらず、一人まへに五足か六足、六七四十二文が物、八軒屋までゆかるゝ内に、隨分しまつして三百十六文づゝ、其方衆は廿五文で、夕陽には大坂へ着、夜見世見よふと新地へ往ふと、算用して物を云やと、大音にてわめくを聞、十七人目と目を見合、身にこたへて道理をかんじぬ、

第七、鳩の峯高御奇瑞

太鼓持の西國といふは、鬼に衣よりすさまじい殊勝な心底、此うちに一人もなく、皆々都の身過にはなれ、似合ぬ是はおもひつきと、上京の八ぱといふ末社、今更氣がつき、殊に拾兩の金十七人に割付れば、一人前に三十三匁七厘づゝ、今の船頭が積をきけば、大坂までさへ銀壹兩、あてもなふてうか〳〵、五十日にあまる道、よし別儀なふ下向してから、京で當處の槌もなしと、ほろ〳〵涙を彌四郎見て、是はとうじやと問ふに、つらさを一々かたれば、拾六人も心ぼそく、此道は順禮歌とて、不思儀なる方便あれども、いかな事此内に、六角堂の歌さへ覺ず、はやけふも七つまへ、城六もちつとあるけといへば、内證が六原でないといふ、實に尤、京の支度が爰まで鳩胸ではないはづと、八蟠樣に氣が付、何も爰に參詣して、男山の風景松の葉色も常磐山、綠の空も長閑に、君安全に民あつくめぐみ給ふ御神なれば、宇八懷中より石筆を取出し、行末安穩の爲、且皆々末社なれば、願文を書奉らんと神前に噂踞、

歸命頂禮八幡大菩薩、抑我鄙先祖と申は、後假寢院に仕奉、無官大臣之末葉也、年久敷も傾國の譽高、而も眞金澤山なる事、海底より高峯に續、至レ茲て愚親可レ惜瓦石のごとくに是を投、あゝ悲諸國遊里にて、寶船金櫃と貴まれしも、何而末社となり、雨露霜雪のしのぎあやうし、依て涙湖のごとく、露命又短夕たり、爰にかけまくも御當山の牛房は、是和藥第一に用ゆる處、たとへば六味八味の地黃にも

まさり、是を腹して女廓にむかへば、鬼女產女の外、龍女といへ共一陣にせめよはらす事、神代より今に爾り、伏して願は、腎たつぷりとをぎなひをくだし給ひ、二度世に出、大騷文作する事を一時に決し、勝久魂いし替て、傾國虛氣の疲病さづけ、末社が代となさしめ給へ、因レ茲願文如レ件、

願主橘之光胤無官從大盡七十五代
杉平宇八郎善房

と書、我身をはじめ十七人の太鼓持共、紙入より鬢櫛鑷耳抓などを取そへ、御寶前に納め申せば、はや日も入相の鐘つく〳〵宇八申やう、今宵は御神前に一夜をあかし、明なば難波へおもむくべしと、笠を枕に跡さし合、いとゞあはれの旅姿、所へ不思儀や山鳩一羽、かの願文を引くはへ、御内陣へ入かと思へば、忽この鳩容顏の美女と現じ都の方へ行、比は二月廿九日の夜半のことなりしが、彼長者宗善屋形へ、南方より光物落、其音雷公にまさつて、雷音良鳴やまず、勝久驚き夢中に身汗ひたすといへ共、家内の男女知者なし、時に西施も面を恥、龍女も艶顏かくすべき女性勝久が枕によりそひ、汝此年比佛ぼさつの妙體を貴み、題目數遍骨相をうがつといへども、眞の佛心眞實の蓮臺をしらず、凡如來出世の本意は、凡聖一如善惡不二と說、是則煩腦ぼたい、三界唯一心の源、善といふも惡、あくといふも善心、そのゆへは汝先祖より五代六代七萬財の寶、數の深藏におさめをけ共、他門の憂へを歸り見ざれば、實報花王の樂つくべし、子細といつば、天は父地は母、ともになんぢが病身に心をくるしめ、佛神擁護の御手を待、是親として子をあはれむの常、子其恩のほどこさゞれば、不孝の罪忽八方地獄に墮、是をあはれみ報身の姿をあらはし、汝を不死の菩提にいたらす、はやく心をひるがへせよと、勝久が手を取給へば、拜と答て夢はさめ、是より忘然として本心なく、只美麗にまよひ、戀しき俤立てもゐても、戀路の八雲たつ足もなふ、御振袖のかごとをわすれず、一家老の何がしを召寄、夢のやうす艶女の姿、年比は十八九、御紋は慥に丸に八の宇、かきけす樣にうせ給へば、此外はかたるに不レ及、いそぎ此比家形へ來りし末社とやらを不レ殘召寄、御姿を尋させよと、けしからぬ仰を蒙り、手にあせ握て百人ばかり、又末社を尋に行人、としやおそしとこれは〳〵、

第八、吟味は乳母が詞一種

女の腰より上は阿彌陀が峯といひ、裾を鳥邊野と名付しは、戀も無常の緣によつて、都女のやさし姿も、西方より迎が來れば是非もなや、十三四より十六七なる娘ざかりを、けふりとなし歸る道芝、刹利も首陁もかはらぬ處、つゐに行道とはかねて聞物ながら、常なき風にけふもくれ侍り、爰にあはれをとゞめかねしは、都六條烏丸にやんごとなき人のするあり、敏達天皇の後胤因幡守行原の一子、藥師寺治郎左衞門尉行賴に、九十三代の末葉富岡民部と名乘て、年久敷も榮花をきはめ、財寶つもりなき内にも、息女をぎんと申せしは、今年十五の春風も、いとひそだてしをちめのと、上中下にいたるまで、姫君にかしづきまいらせ、諸道諸藝皆此息女一人に縮り、御器量又人間の所爲にあらず、三十二相の容色なれば、去年の秋より、彼長者勝久殿への緣娶さま〳〵との吟味に、年比兩家互に不足なく、先以相究、富岡殿悦び息女の果報、母の親も日本一の長者を聟にとつくりと定り、たのみの日限四五日といふ内に、俄に返替申來れば、一家一門はつたとおどろき、息女も是に心亂、神も佛も憂世になしと狂亂、心實覺悟をきはめ、今宵夜更ば鳥邊野に行、さつぱりと此髮剃にて、心もとをさしぬきあしにて、ひそかに出る身拵へ、誠に此事去秋より談合、勝久美男のよし、女心にいとゞうれしく、心の内にてちかくなれば、大佛樣に祈誓かけまく、いよ〳〵此首尾成就いたし、私夫となし給はゞ、鐘の緒は申に不レ及、下帶錦の模樣はお望次第、幾筋成共命の限り、朝から晩まで拜詰の大佛樣、是はむごひなされやうぞや、同じ口で小そうても嵯峨の釋迦樣か善光寺の如來樣をたのんだら、もはや急御夢想請て、今時分はひとつの夜着に寢る事もあらふに、佛神賴むも初より見立が大事、乳母や腰元共が咄をきくに、何によらず大きなものがよいといふにぞ、まことゝ思ひ隨分大きなこなさまを吟味致、今の浮めを見る事と、前後もわすれて泣出さるれば、お次にありし腰もと中居、數十人はしりよつて、これはおぎんさま、こはいゆめでも御らうじましたか、やれお腹をさすりおろせ、先まじないに金袋圓よと、あたりを人々とりまき、寐ずの番ゆへ今宵は本望とげられぬ邪魔につれ、いつとなふ寢入夢路、現ともなふをぎん枕元に寄そひおこす

者あり、夢心に枕をそふき是を見れば、十二三とおばしき鬢づら結ふたる童子、唯今用事有、大佛へ參れとの使なり、夜中の事なれば、女の道おそろしかるべし、某と同道せよとの佛勅宣れば、如何樣の御用かと、打つれ大佛に蹲く、御佛宣ふやう、汝召寄事別儀にあらず、すぎし比より朝夕勝久方への緣を願へど、元より結ぶの契りにあらず、總別妹瀨の緣といふは、前生現世未來まで、三世の因かさならざれば、例令一旦契るといへども、憂ひ重なり、禍おほし、今凡眼より見る時は、勝久に愛着なせども、眞の妻となりし時は、一生はむらの種、末の程を詠むべし、女の鼻の先もしらずに、それがしを兎や角恨、殊に夢想の沙汰がないとて、嵯峨佛善光寺よりおとつたとの言分、近比都育には愚なる女ぞかし、むかしより京中の男女、幾千萬ともかぎりなふ、隨分六ヶ敷祈誓かけれど、一人も願ひかなへざるはなし、去ながら其者が寐間へ行、夢想の告はひとりも致さず、見るごとくにかかる大きな身を持、ひとり〳〵夢想にありかば、先京中の町をひろげ、家々を建なほさねば、中々出入する事叶はず、是ゆへに最前のごとく、何方へも佛勅たつるぞ、泣子も目あけと清水や、祇園は身の取まはしもかるいによつて、一廻り過ぬ願ひも、夢想にあるきかせがるゝゆへ、北野をのけては肩をならぶ神體もなし、殊に其願百人が九十人は立身を第一に、次は器量の能娘、あそこの妹爰の後家、或は横に車つかひ無法な男は、人の妻さへ日參して祈る者あり、かやうなやつには面も合さず、却て大きな憂ひ事か損をさするか、百雙倍の辛苦をさづく、されども男は罰をしれり、只おそろしきは女の心根、夫ある身の願ひ事、たとへば小判の耳塚をついても、此大佛は非禮を受ず、願ひの日より、百日には、其女房の命をとるか其家の緣を切てろとうにたゝする、一年とはこたへさせず、且又汝が願立、鰐口のないを知て、鐘の緒とは聞へぬ、中にも下帶は望むれど、是もよくつもりをしていふべし、鼻の穴へさへ傘さして這入ど覺えぬ程な鼻に氣をつけ、腰のまはり吟味して見よ、ざつとした紬でしても百疋は入ぞかし、一疋五十目當にして、一筋五貫目が下帶、是を錦にての綾にてのと、高が口先ばりの願立、眞に是を地相念入し、金襴一筋百貫目でも請合がたし、總じての願賴む時の地藏顔、かなへた跡では尻

くらひ、大佛はじまつて以來、數萬人の矢數武士、射懸る時はめつそう矢八に我を祈り、天下成就の上は國に歸りましても、朝夕七五三の御膳をあげまし、一生命の親より主より大切にと信心こらせば、爰は一力指の先添、あつぱれ高名させても、七五三は扨置、重ていひ出しもせぬ、侍さへ如レ此、まして汝若い女の下帶に氣のつく事、虛にもせよ心指、千筋萬筋してくれた同前、よつて勝久に十雙倍の仕合男、なりにして臍を卷と、大きな我を賴んだ替りに、內證の徳分夜な〳〵思ひ出すべしとあらたなる御告、聞人うらやみ侍りき、

御入部伽羅女卷之二終

御入部伽羅女卷之三

第九、水損のない牧方小判

抑是は八幡の宮に仕奉る神職の者也、されば當社と申は、往昔欽明天皇の御宇かとよ、豐前の國宇佐の郡蓮臺寺の麓に、八幡の宮と顯はれ、八重旗雲をしるべにて、洛陽の南山高みくもらぬ御代まもらんとて石清水、いさぎよき靈山と現じ給ひしより、實に久堅の榊葉も、榮へさかゆる男山、青幣白幣とり〴〵なりし靈驗の內に、夜前不思議の神勅をかうふりしより、彼字を封じ、通夜せし人にあたへばやと存候、やあ見れは是に假寢せし旅人あり、神勅の人は是にてあるべし、夜の明たるもしらま弓、引おこさばやと、神前の板どう〳〵と踏給へば、皆々一度に目を覺し、とひやうもない顏付、時に禰宜殿言給まふ樣、をの〳〵は勿體なくも、爰に一夜を明せし人か、如何に凡身なればとてはなはだ無骨の事也、それ當山と申は、八幡疫神十二の末社ましますにより、千話やぶる上方者はいふに不レ及、遠國鳩のよぶ聲までも、老若そろひて、

ひといふ神勅しらずや、いにしへより御神前にて、僧俗ともに通夜する事、曾て明神嫌はせ給ふ、是皆神慮の御あはれみなり、子細といつば十二疫神の內に、身躰破滅明神とて、わきておそろしき宮有、是は野郎傾城のほか、揚屋轡茶屋呂白は各別、落着た有徳の人には、かならず此疫神見入給ふに、忽心のしまつをわすれ、めつたに傾國野衆に亂、はやきは一年おそきは三年、假令金銀海山に積おきても、さらに其留所なし、是を菩薩かなしみ給ひ、もしわすれても通夜せし人には、其疫病切違の守をさづけよとの神勅なりしに、夜前は結句其疫神の守を、かれらにあたへよとの靈驗、是ぞ弓矢八幡逆鱗ましますの印なり、をの〳〵覺悟を究め、此守を受られ候得とさしいだし給へば、中にも宇八、しばらく御待給はるべしと、手水にて嗽を清め、頓て請取二三度四五度禮拜、地にふして忝ながれば、神主もあきれ果、扨氣形の振廻、いかなる衆にて貴まるゝぞ、宇八承はり、是には子細ありやうに申儀は、重て御禮に登山の節申上べし、まづ唯今はお暇申、皆々麓へさがり着て、扨此守を受し上は、西國も無用の事、是よりすぐにとつて返し、勝久家形へ是を投込、われ〳〵が息をつがんと、はや城六先にたてば、宇八彌四郎袖をひかへ、かく神慮にかなふ上は、下向せし後如何樣共致やうあり、先日伏見より引かへせしさへ勿體なきに、又ぞや此度歸らん事、各々は如何樣共、此彌四郎にをいては、是非觀音をめぐる氣ざし、能々思へば朝がほの夕日を待ぬ露の命、此十七人如何に身過なればとて、人の身體破却させてもつかはす事を第一、其親兄弟身になつて御らうぜ、われ〳〵をうらむべし、まして朝夕かる口文作より外、後生の道は是がはじめ、終て後我何に名人とて、彌四郎ぶしにて閻魔も見目も、わるい事の帳面はけすまじ、殊に親の日にも大臣が肴、はさむに精進しては銀にならず、勤め女と太鼓持は、罪の深かいに今氣が付、何も泪ぐみ、八幡西國めぐらぬ內は二度歸らぬ心、いつとうして大坂をさし行道、佐太牧方にもゆるせ色とて、顏に石灰澤山なる大振り袖、順禮とは見ぬも道理、大坂より內裏樣への大工衆には、色が白く手足が花車なり、字か光かかへす賊灰には、古ふても淺黃羽二重、隱し紅裏合點ゆかず、道づれかと思へば、おなじ中にも此寒いに紙子の解分、澌々木綿の古す

ぎたる袷羽織、しかれども帶は、折節京の大臣衆が仕て通る幅廣の纉織、わしらが一年の給分七拾目では、出來かぬる帶なれば、耳とつて鼻かむやうな衣裳、月夜を當に行人そうな、あんな客は留めやんなと、手をもぎちぎる程引とめる、牧方中に一軒も呼こむ所なし、はや町はづれとある茶屋に入、一膳めしたべうといへば、五十四五成女車延をやめ、しばらく十七人がやうすを詠め、芋の煮しめに香物そへ、一膳が十八文、肴がお望なら此燒物にて廿五文、七文には田舍衆は高いと思へど、爰の女郎衆百一切にあはしては、身に付ての德分、きつしくな事なれど、箸とらぬさきに廿五文づゝ、人別につきならべてから、まいつて下されと、さりとは見立た女めと、宇八たまりかね、懷中せし八九兩を、嫗此内なるよい小判を見ごりにして、錢とつりかへてたもといへば、此女がてんせず、こゝらにて小判といふものははやりませぬ、錢がなくば御無用と、片はじから膳を引そうなる氣しき、みなみな顏棄すなとて、早道なる小錢を見すれば、女氣をゆるし、是よりちよぼくさ、何と皆樣女郎衆は御嫌ひか、爰は脇詰御法度にて、皆々大振袖、十七人壹貫七百の口、拾文や廿づゝは、一人前にてまけも致す、酒まいれば外にそれは、をの〳〵さまの手柄次第に、五つなりと六つ成共、川端なれば水損のまいらぬ女郎衆、錢程の事はありと、二段をばすゝらす積り、宇八おかしく、是も床入せぬさきに、錢六十づゝついておけば、死ぬ先の引導、二人百、あてがあらばよびもいたそが、今の小判より外、早道も紙鳶に錢持、相談すべしと何も大笑して、京ちかくにも小判見知ぬ人も有にき、

第十、飛脚は月にお三度大盡

千人よれば千差萬別、大坂者の肝のふといは大海も一足、飛そこなふて高が此身、おそいかはやいか是非灰となす、元をさとつて西國商、播磨灘にて大南つのる程に吹ほとに、船頭さへ氏神住吉船玉へ命を乞に、大坂男はちつともさはがず、生度島の風景より鳴門脇の海面どうもいへずと、此場でさへさはがぬ奴と、針の先でついた事も、蚯の穴へはいる樣な、京の者のせばい氣と、雲泥萬里もへだてず、たつた十三里の事にて、ちよつと片町の入口より、はや人心各別に、家作りも大幅に、金銀かまはぬ材木の竪横、何れを見て

213638

もおろかな事はないといふ、宇八は元大坂生れ、殘りの末社せき心にて、さりとは不帥大坂藝かな、すでに古人も危きを見ずと宣ふ、我命の終べき程の大風に、左樣の戯言つくす奴、たはひといふも底がしれず、又家作りが大きなりとて、是を結構といふは、最前の茶屋の嗅が、小判より錢を貴み、女郎より地女の幅廣なを悅に等し、京の家作りは詳にして、書院さき床脇のいたり、蘭菊花香の數寄屋作りとて、餘所の國にしらぬ事申せば、宇八も是に口をとぢ、それより京橋に來り彌四郎申は、我々此姿にて、八軒屋より堺筋にいたらば、まさしく當地の朋友見のがしには致まじ、谷町を南へ天王寺より堺に拔んと、何も此道にいづれば、兩脇に人立つらなり、心まかせにありきもならず、各各不思議、此群集は何事にてと、髮結らしひ男にとへば、されば此廣い大坂にも珍敷、今年の春よりむめ川といふ新町の女郎、籠入してより久しい事じやが、不思議なるかな手足爪さきあのうつくしさ、髮のゆいぶり、いつにても爪をかくすは、猫の返化にうたがひなし、こなた衆も國へ土產に、女郎の道中といふものを見ておきやれと、爰にても見立られし處へ、槌屋のむめ川、それや來たはとて、人の山高きがゆへに貴からず、器量をもつて貴人、數萬の中を八の字もどきゆりだし道中、黑雲あざむく袍投島田は、葉山市岡が油煙をしまず、面形猶鷄卵に白粉ぶんたる薰、又鼻中をくじかせ、素足に錦の金剛、打見には此折さへ苦のないやうで、時々に笑刻々に泪有と、水海法師か名言此時に思ひ出し、見る程京にてきゝ及んだる女郎の噂、先當地の西國へ打込と、見より新町東口の門をはいれば、林都といふ見通しの座頭耳をかたぶけ、此足音は京の末社、しかも兩足三十四相、さとつたりとつぶやく手を取、とてもの事にだれじやときけば、七年以前に越後町扇風方にて、橋の下の菖蒲はたが生たと、足拍子踏時、皆までいふな、いかにも其折、助どのといふ大臣にあはれし太夫、肴をつまみぐひして、骨たてられし時、いたいとの鯛どのと、はやしたてた宇八なりと、是より打つれだち、越後町におしよすれば、扇屋伊兵衞是を見付、扨もお久し、まづこなたへと奥にともなひ、四方山の咄やめて、先むめ川事座頭に聞ば、いち〳〵次第は北濱に萬年といふ大臣、十年前まで肥後讃岐まへ、此家一見して買込程の大氣、はや丸

飛丸といふ北まへ船に、千百石づゝ恙なふ梶とりまはし、四五年前に四五百貫目設たきほひに、此里へ魂丸を乘込、いかなる惡風横雲にもゆるがぬ舟と、憂世小路つり金といふ末社高言せしが、茨木屋の野風樣に吹たてられ、爰は大事と百貫目の金碇、二軒まで家質を入てもいよ〳〵の大風、飛丸早丸の外居宅までさらり、それよりかよふ千鳥町といふ所に店借、男世帶はついへのない物に感付る、まかない女に内をまもらせ、其身は不斷旅寐する、飛脚は月に兩三度、土器程な眼をもつて、夜晝ねぬ商賣は草のたね、またもとの物は案じるが損なり、四五年のまに見事ないきかたをならぶる大臣もなく、扨此度は梅川どのへ乘かへ馬の手繩見事に、彼君を身請の沙汰かくれなふ、女郎の借錢五十六兩二朱九分七厘まで、こせつかぬうなり濟で、其後はなんの氣もない此里へ、兩人の御僉議、寢耳へむめ川の水が涌込、それよりは曲輪中毎日寄合、五十七十百人あまりの人を出し、此兩人を尋るもとは、彼萬年といふ男、江戸日本橋兩替より、京の店へ登金千百兩餘の光も椋も、梅川殿には御存あるまじ、しかしあなたはおなじ居所、河内の國高安の事まで咄最中に、りつぱなる中間、京長者町大黑屋宗善手代、御見舞のよし奥へうなれば、未社ども合點して、それ此方へと座敷へしやうじ亭主を呼、御引合の下より圓右衞門申さるゝは、昨夜半の比より、にはかに勝久まづかやうの事申出され、はじの程は熱病かと、夜中ながら奥村玄正、伊川春庵兩人の手にもあまり、よく〳〵きけば夢の内にかやうのお女郎、紋は丸に八の字より外覺えとめたることもなし、各々がたに賴み入、此上郎にあはせとの一言ゆへ、又家内の者百人ばかり、中にも拙者は振御鬮、大坂へと下させ給へば、先御當所へ早籠駕打かけ、漸々と只今の仕合、近比毎度御大儀ながら、又今晩夜舟にて御上りを賴めば、十七人同心せず、先日さへ勿體なくも金銀づくにてかわれぬ後生を取はずすとぞんじながら、人をたすくる此方とらが商賣、せつかくよりしかいもなふ、又當地へ下りし我々、此度は存もよらずと、一同につよ弓ひけば、圓右衞門重て、佛のかほも三度目にはお腹たつよし、此度でいまだ二度、あなたへの申分には、當所より名代賴むと、金五十兩亭主に渡し、登舟まで萬端とのおたのみ、伊兵衞も爰は中酌取て、何も

樣もお道理ながら、今一度の御心法、大事の前の諸事氣をつければ、十七人も是をしほに又乘かくる寶舟、夢違は御座るまいかの、

第十一、濁を洗ふ下女緋縮綿

美女は都に極めて、諸國の人無性にゆかしう思ふは愚也、京なればとて振からの惡女は、一皮むけるほど手入してもいかな〳〵、此前伊勢御影參の節、江戸の大分限者、十九に成一子家來あまたつれ、參宮のつゐでに、内々京兩替町越前屋爲右衞門とて、歷々の息女幼少より美女の聞え、大形今の世の紫式部、和歌の道さへおつとつて、萬水湖月をもどかるゝ程と聞、手みやげ相應に、此度東武へむかへる覺悟にてゆかれしかば、娘の親達たわひもなふ悅び、馳走といふは詞に不レ及、先江戸男の器量よく、聟にとつての幸、殊に十六になる大事の娘、朝夕みがき入し上に、此度は猶大事と、三日が間母親の手入、大勢の女共隨分此子の姿つくつて、江戸の父子にあはせけるに、どうやら氣にすゝまぬ顏付、其晩に江戸の親一子に、此息女の事とはれしかば、一生女房持ぬとても、此娘はいやといふ、尤なり年寄た親の目にさへ請取にくしと、翌日緣を切江戸へ下りしなに、彼の親氣を付、草津の姥が餅屋へ内證をふくみ、見世のこかげを借て、筋目は大形にても、器量年がつこうさへ氣に入たらばと、十九人の主從以上廿五日が間、朝から晩まで十二三より五六を限て吟味せしに、第一京の娘大ぶんに參詣、つぎに大坂、此外は西國の分不レ殘、丹波丹後若狹美濃路の娘、一人もるゝはなけれど、さりとはおもふはまれに、たま〳〵有ても京大坂は心ばへしやれていやなり、面形位高くおのづからの位有て、打見にぼつとりと、底心發明にして物ごし落付、肉合中分にして、瘦もせず肥もせず、白身骨合たほやかに、一つも望に違はぬ女、然も木綿の衣類八人づれ、笠の書付見れば、長崎糸屋町萇菪屋仁介娘、年十四といふにちがひなく、是より十九人長崎へ下り、是非とも貰ひ請江戸に下り、翌年長崎の兩親兄弟まで吾妻に引請、今に樂々淺草にかくれなきよし申せば、大坂天滿の者是を聞、それはあながち京の息女がわるひでもなし、長崎の娘がよいでもなけれど、妹背の道は緣が恥し、此前西國方の御歷々々、有馬へ湯治あそばしつゐでに、京御見物の折から、御跡ぞなへに供せられし、御家老

脇奥野山外記といふ人、つくづくと分別ありしは、いまだ御男子ましまさねば、御家の跡目如何、此度幸色よき妾女を御目にかけ、御機嫌に入なば、國元へかゝへ下らんと、思案もお家大事に思ふ忠臣、御用聞の御服所へ内證をきかし、京中の此事望娘、十五六より廿を限て、其日六十九人、彼呉服屋が家形にて、なんともなふ御目通を徘徊させ、様子まで御意に入ても、御心にかなわせ給はねば、彼御家老脇力をおとし、假令御子さへとまらば、大夫天神など、中道の者にてもくるしからねど、彼等は又御目にとまつてから、懐胎なければせんなきとの仰を、此家の亭主聞、左様の者にてもくるしからずは、私島原へ御供致、太夫天神御目にかくべし、懐胎の事地女にかはらず、ちつともお氣遣被レ成まじ、遊女の分には水銀をあたへ、あるひは唐人の卵を吸すなど申事、皆虚の臍より下の沙汰を、今時ぬからぬ女郎僉議しても、是ばかりは心にまかせず、さるによつて島原にて口すぎをする、とり上姥に似たる女幾たりともかぎりなし、是をことづくく紐をとかば、年季の内には五人六人づゝ子をもたぬ女郎は候まじ、ひらさらとおすゝめ申せば、主人を引唱奥野山島原に行、夕霧柏木などいふ太夫をはじめ、天神不レ殘御吟味あれども、御氣にすゝまず、京女にえんなき事、是器量悪敷にあらず、只前生の戒行とて、爰大坂中島に俵屋といふ米屋の下女、人の目には横びらたく、毎日鏡に向ふ度に、鼻のひくいがなげかはしく、今さらつまみ上ても、廿四五から高ふ成たためしなし、ある日下女前なる川端にて洗濯の折節、此家の内儀のゆもじ、いまだ萌立ばかりの緋縮綿、洗へとの仰畏て、川はたへ出けるが、此下女つくづくと思ひけるは、人は氏よりそだちといふ事、誠にはづかしい物かな、我も親達は下しうもない人と聞しが、生れてからつゐに人のこのもしがる處へ、絹のゆもじ拜ませし事はなし、殊に二季の出替り盆正月の養父入も、小宿へ行ぬ女はなけれど、我ばかりはならぬ親二人ともに息災なれば、人の長生行するはしれがたし、一跡に一人娘と、父母の力あしも近年よはく、とやかくおもへば大事ぞと、我此年までつゐに男に肌をゆるさず、一年に漸百十匁の給分、内百匁を親元へ送れば、殘る十匁にて男狂ひもはづかしく、小宿狂ひの付屆、一錢にても親達へとおもふ氣から、去年の春思ひ

切て、二匁九分いだせしゆもじ、地がそんじるとおもへば、つゐに洗ひし事もなきに、いまだ二度ともなされぬ此緋縮綿、洗はせ給ふ氣にくらべ、さりとは恥かしき我が心、此時洗はんとおもひしかども、外にかはりもなく、さればとて川端につくばひ居て、ゆもじかゝぬも武士の脇指さゝぬにおなじ、轉方一生のおもひ出に、しばらく洗ふ間此ひぢりめんかし給へと、心の内にて内儀にことはり、彼ゆもじと引かへ、暫時の全盛是見よがしにまくり上、洗濯せし處へ、彼京にて妾御吟味の御歴々、御近習あまたにて、段子の幕打たる、御舟にめされ、爰御下りの時、御大將ちらと御覽じどころは書に不レ及、さて器量よい女と仰られしを、御家老脇承り、頓て緣をもつて彼兩親ともに、御國本へ召供せられ、歡樂きはめし事もあれば、人は皆緣づくといふ時、最前の男それは親孝行より出し所、神明の加護なれば、尤それに似た詞に及ばぬ仕合は、日外大佛様の御告ありし富岡式部娘は、宗善方の緣ちがいひしより、兩親殊に是をなげき、朝暮辛苦に致されし、を娘さまぐ、いさめ、恙なふ親子まじはりまいらすこそ幸なれ、人のならひは老少にかぎらず、死のわかれ致すもありしに、さのみ御心をなやみ給ふことにはあらずと、おとなしく申されしが、過し比やんごとなき御かた、伏見より御上りの時御覽あそばし、御奥様になし給ふより、此息女には御子も出來たが、今の緋縮綿様は不産（うまず）ではないかの、

第十二、氷室の二字が一字萬金

須彌山の圖に、日月地より去事、四萬由旬とかや聞ては其分なれど、隙な醫者に尋給へ、あそこ爰つまんで聞ても、人間一生六十年には聞とめがたし、されば大黒屋勝久家形へ、末社此度歸りし段、あまたの手代はいふに不レ及、父母ともに不レ斜、一子が爲命の親とて、十七人を屋形にかくまへ、是よりは御嘶相手、先勝久末社にむかひ、此度の難波下り、いかなる故ぞと尋給ふ、さん候西國順禮と心ざし罷下りて候、其佛身におもぶくかたぐ、何とて悪所へは立よられ候や、されば此新町のいはれと申は、江口神崎よりはるかむかし、仁德天皇の御代よりして、今に絶せぬ目出度里ゆへ、我々遠方におもぶく時は、先この所へ立よつて、後扨心ざすかたへ參候事、大臣末社の習ひにて候、しばらく御慰の爲、此里のいはれをかたり候べ

し、むかし仁德天皇、此難波高津の宮にましませし時、いまだ新町堀江にならび田畠たりしが、一とせ旱月をかさね、五穀實のらざれば、民憂ひにしづめり、天皇あまりになげかせ給ひ、武内大臣を召れ、此うれいをすくふべしとの綸言ましますに時に、大臣おぼしめすは、かく五穀ゆたかならぬは、龍神いかり水貧(とはしき)より、民憂處なれば、一水甘露に似たりとて、冬の氷を取て春夏まで藏置たまふ、これを氷室と名付、五月の比此氷室を出し、多くの田畠へ露のごとくに打たまひ、扨其地を業ずる男に、はじめて太鼓といふ物を拵、打せて龍神に雨をふ乞、龍王氷までをかくしをく心をあはれみ、忽雨水五穀を養ふ、今の雨乞此御代よりはじまり、初て太鼓といふ物百姓に持せ、武内大臣氷室を露のごとく打給ふゆへ、露給はるを大臣と名付、貫ふ者を太鼓と名付、それよりして天皇在位八十二年めに、かの田地をならしめ、遊君のおかしむゆへ、あたらしい町といふ儀を、今に久しき新町是なり、一年貫之此里御ぞめきの時、正月の初買に、

袖ひぢてむすびし水の氷れるを
春立けふの風やとくらん

あふぎやの太夫返し、

氷室山このもかのもの下水も
君の仰にいかでもるべき

かやうの古歌きこしめされ候やと申せば、勝久はつたと手をうち、さて〳〵さけばかりそめならぬ靈地、我此度はじめての遊宴、貫之だに春立けふと詠じたまふ里なれば、其新町にて加減が見たし、いづれも如何にとのたまふ時、末社一度に口をそろへ、よふ御座りましよ、自體本間は新町よりつかひ出し、島原が二段目とものはいひなし、いつぞや宇八に島原よりむじつをいひかけ、こゝろよからぬをりふし、さいはいなる此仕合、ある日父の宗善、宇八ばかりを奥にめされ、先日よりたのみ存る勝久、大坂にての遊覽、近近に支度をすべし、しかしおもんぱかるに、つねならぬ我財寶、ほつきやうに思案あるべし、天窓からくはつと出かけ、むかしよりはいふにをよばず、今より千代經る後までも、傾城買の司とよばれ、一子が名も上んとおもへば、其方の博學賢才、一を打て萬を知れと、日外の氷室の由來、新町のいはれを聞、下にをかれぬ貴殿なれば、急ぎ二階へあがり、如何なる書物も

考へ出し、旅立月日の目出度を吟味あれとの仰、畏て申様およそ儒佛神の三つと申は、智惠一人の男は大かた覺ゆる事にて候、然れども此宇八、目は右三廣の外、詩歌官職變易の道に長じ、天地の事はむねの内三寸の舌に候、まして是程の事、書籍吟味におよばず、唐本萬年暦を窺ひ見るに、納とあるは妻愛の道をいみ、もし酒などを此日つくれば、家内滅亡の歌も候、開とあるは吉日にて、嫁どりも申分なく、只上々大福日と申は、とるとあるにましたるはなし、此日夫妻に逢初め、隨分中よくする時は、天福來て壽命三浦の大助日をかたれば、宗善きこしめし、とるとは何の事ぞや、さ候とるとは梵語とて天竺の詞にて候、和朝俗語に申時は、床入とも相莚踏とも、夫妻のまじはり共行ふなどゝいふも有、皆是同じ麓なる水涌所の異名にて候よし申せば、扨おもしろしと御機嫌よく、彌取日に相極まり、供の人數は明日にても、勝久と相談あられよ、扨各々も心こしらへ望まかせに、衣類わきざし其外の小遣金、先當分百兩づゝ渡すべしと、圓右衞門に仰付られ、是よりして末社姿の花をかざり、勝久に其段申せば、如何様ともをの〳〵次第、先父上にも對面致、御禮を申上んと兩親にむかひ給へば、今ぞげに堅固の顔付、御盃事千秋相濟、おともまはりも各別に、しかつべらしき手代はひかへ、態と子小姓松島永井、針立久庵、座頭のさよ市、ざうり取、御髪揃、六尺五人、是は毎日一人づゝ、大坂の首尾申越べし、此外には色里の品、主人家來のわけへだて、巍々としては可笑からず、内證には其禮深くうやまひ、上むきは隨分つくして、只金銀をおしむべからず、第一は床入つゝしめ、勝久若き者なれば、あやまつては短命なり、五日に一度六日に一度、是も其わけなきにはしかじ、猶其女間夫狂ひの外、目にあまる事大目に見なし、皆勝久がなぐさみなれば、堪忍を一として、次の大事は酒と食事ぞ、料理人付てだせば、彼と諸事申合、酒は池田の萬願寺屋清亂酒を常に用よ、此外には宇八彌四郎に別ての御頼、以上供人三十一人、隨分身の廻り諸事美をつくせとの仰一々畏り、我おとらじとの身揃へ、聞さへ目を驚かしぬ、

御入部伽羅女卷之三終

御入部伽羅女卷之四

第十三、喧嘩は裸金百兩包

衞門の榮華、宇治拾遺も、不斷めなれてはおかしからず、唯いつにてもわつさりと門松の心地、舌鼓打おもしろきうはもりといふは、彼宴遊の中にも日本第一の御里、新町の九軒と申は、九品の淨土を爰にかたどり、一代狂酒の御名高程落目はやく、諸事氣を付見るほど、餘所にない大氣な事、昔阿波の鳴門と云底のしれぬ大臣、木屋のみはし馳走に、熊野浦より鯨の生捕を取寄し事、世に噂高く、阿波大臣と名はあげたれども、穿鑿してはたはひもない虛人、此入目半分なりとも、其女郎の爲にしてこそ、其後北濱の天五といふ男、此阿波が噂を聞、丸屋の奥州に小判で歌がるたを拵、しかも繪は長谷川等雲、歌はさる御公家樣の手筋たのむに、大分の物入おもひ入花車にして、あとのすたらぬ進上なれども、是も又手重し、そのあとへ山本與次兵衞、吾妻がよひの夕ぐれ、蚊のない里もがなと禿がすさみふびんにおもはれ、揚屋中へ家形袋とて、紋紗の蚊帳を四方に取まき、金銀の高しれぬ事も、其樣に名は發ず、唯かさびくでも椀久が松山、大年の夜一歩一升づゝまきし事、堆ふ人もしれり、かやにすさまじき事目なれ聞ふれし里、大かたにてはおもしろからずと、宇八が思案宗善に吹こみければ、しかるべく御たのみ畏て、此度の御荷物簞笥長持三十二荷、何も覆は緋縮綿に大黑の墨繪、一掉四人持の六尺百廿八人ともに、段々筋の日野島紅鹿子の股引脚絆、一荷に一人づゝの催料、尤裏付の上下たゞしく、此跡より千兩入の金子、箱數五十ともに金の蒔繪、壹箱兩人づつにさし荷はせ、右同前に催料、つぎ〳〵の荷物あまたすこし引さがつて末社長持十七掉、蒔繪に神鳴を畫き是を下すに、八軒屋より新町まで爪もたゝぬ見物、流石此津の名代分限、天滿の金屋藏、北濱の三谷石、うつぼの神喜、鮏堀の北國丸など、舌をまき目を驚かせば、まして四國西國の大盡、きのふまでは大きな顏も、此荷物着といなや、新町橋に棣札高く、揚屋中に宿札打て、外の客は覗手も絶、表には盛砂をたゝへ、九軒ともに俄普請、御來入來六日と此里にかくれなければ、曲輪中揚屋に來り、千秋萬歳をどるやら笑

ふやら、蜻蛉がへりをきゝつたへに、太夫天神鹿戀も不レ殘、太鼓中間出入の座頭、端女郎も身祝ひとて、葭原の五分取まで、六つゆびにて、かいどりこずま、俄かに曲輪は祭のごとく賑ふ中にも、吉田やの喜左思案はしの邊りまで御むかひ船の事、皆々尤にして、とてもの事當地繁榮の大臣なれば、船檀尻の粧ひをなし、揚屋はあげや巻はくつは、太夫中間は女郎同士、三組にわかちて、牧方まで其組々のおもひつき、是御慰第一なりと、すぐに御むかひ船御馳走の番付、第一番揚屋中より大御座三艘結ひて、是に芝居の舞臺をしかけ、嵐三十郎が得手狂言、なまぜ川尼ころし、舞臺にて水船へ飛入處を、すぐに淀川に飛入り、三十郎さま〳〵の所作有、二番は巻中より是も船二艘ならべ、竹本儀太夫座をのこらずやとひ、上るりは御望次第にそれ〳〵の人形、大ぶんの衣裝積かさねての御馳走、第三番は太夫中間より、一人前に禿五人づゝ出し合て、百六十三人美々敷大名出立、殿樣はお葛籠馬、口取四五人つれ歌にて小むろぶし、轅てつぽう臺笠竪傘、家老馬乘あとぞなへ、皆それ〳〵にかぶろを仕立、いろ里御入部風流大名、これ第一の御見物なり、既に其日になりしかば、我一と美をつくし、網島より舟を仕立、牧方おもてへむかひに出ぬ、かゝる所へ勝久は、大勢の末社を供せられ、わざと歩行にて御くだりの折ふし、かのむかひ舟橋本にて待請ければ、大盡御悦喜あさからず、やがて大名太夫舟にうつらせ給ひ、其めん〳〵こなたへと、揚屋をはじめ次第次第に御祝儀の目見へ金、百兩包は數しれず、三組の人人都合二百九十七人、一人づゝの目見へなれば、時うつり日はかたふけ共、諸藝の事はほかになし、船ぢうは小判の鳴音、八軒屋へ舟は着共、目見への人いまだ濟ねば、どやくやとやくたいもなふ、我一と目見へをせりあひ、後には一人して二度三度づゝ目見へをしたがり、喧嘩を仕出し、つかむやらたゝくやら、五人七人づゝくんづころんづ、川の中へふみをとせば、女形も丸はだかで、畫中ににげ行ありさま、十七人の末社もあきれ、これは旦那もたまらじと、まづ乘物にだきのせまいらせ、供人はあとや先、九軒をさしてどや〳〵〳〵、

第十四、太夫も萌す鼈料理

扨も曲輪の馳走舟、慾の熊鷹またゝきの間に、一萬兩

にあまる小判を、三組の船へ分ちらし、めつた無性にとり勝の有樣、旦那の前ともはゞからず、無禮きつくはいなりと、御小性松島永井利屈の一言、御尤と揚屋の男女落着から堅い穿鑿、宇八さらりと是をもらひ、まづ花園の間に罷出、大盡を守護しまいらせ、けふの樣子を窺ひければ、一入の御遊興とて、御機嫌ことにはなはだ敷、面に笑をふくみ給へば、曲輪の衆中力を得、さま〳〵御馳走料理の上にて、揚屋の亭主宇八をまねき、太夫樣がた殘りなく、宵より相つめ居給ふよしにて、御目見への事相談の處へ小性來り、宇八どのを召といふにぞ、畏り座敷にいづれば、御大將のたまふやう、今宵は曲輪の諸役人、下々までも船遊興のもてなし、かれ是との心づかひ、さぞ妨嫌やおもふらめ、對面の人あらば明日の事に致、まづ今宵は休息すべし、殊に源七金六兩人、けふのもてなし三組の人人、我前にて無禮有しと、募心おもてに見えたり、それは色香をわかつ屋形にては改たむべし、かやうな里はその無禮慮外こそ、遊興のたねぞと有がたすぎる御一言、次に宇八を近くめされ、何かは知らずさゝやき給へば、かしこまり勝手に出、揚屋の亭主に申やう、此度大臣御入來の印として、太夫天神は申にをよばず、端々までも殘りなく、當月中は揚おかるべし、且又今日より三十日は、其女郎の心まかせに、曲輪を出し遊興さすべし、もしすぐにかけ落人、戻らぬ女郎ありとても、轡への失にはさせじ、その女郎の高下にまかせ、價にてつぐなふべし、殊に此度はじめての御祝儀として、曲輪の衆中へ露打給ふ書付のおもむき、太夫一人前に金百兩づゝ、引船に三十兩、天神に五十兩づゝ、同鹿戀に三十兩、小天神に拾五兩當、二朕女郎より分までにおしなめて拾兩づゝ、やりてかふろは高下なしに五兩づゝ、轡の内儀へ百兩、揚屋も同事に、茶屋の内儀へ五拾兩、外に又金子千兩、揚屋くつは茶屋にかぎらず、下女下男にいたるまで、おなじ程づゝわり付の御祝儀、右の外三十日の揚代、明二日より十五日まで、殘らず渡し申條、金子の儀は女郎の分、自身請取に參らるべし、序ながら大臣御慰のため、一人〳〵その器量、道中なども御覽あるべしとの御意、宇八慥に申きかせば、皆々つぶりを疊へ摺込、悦の聲天に響き、地は又小判でせばきほど、ひかりかがやく太夫達、我一と姿を粧ひ、揚屋の座敷に詰かけらるれば、花園間には御大將、さも大やうに腰かけ給へば、右には御近習中小姓、御家人あまたひかへたり、めてには末社十七人、中にも揚屋伊兵衞は、長上下に立烏帽子、金銀の麾をつとつて、宇八がとへば一一に、名乘や名寄太夫職、先一番に出しほの目ほつそりすはり柳腰、風流に見えたる御君は、何方のよねさまぞや、さん候此お子は、色もにほひもかくれなき、花の兄てふ梅咲や、天職なりしお身なれど、十八公とあふがれて、仇も情も押照哉、難波さまとぞ申也、二番に色艶打すぐれ、いともけたかき君いかに、されば候是も又、今咲出る花山樣、隨分御酒もなれようて、人の戀死ぬ姥まんぢう、三ばんに早川の瀨にやよとみて深澪標、ゆるき立ほとうつくしきは、木屋の御子にみはし樣、次は鄙ぶる國の名を、越前さまとよびぬれど、都そだちや花車風俗、五番にずんど打勝れ、ほんのお公家の御息女と、拙者が眼には拜まるゝ、御影初開なお子いかに、さん候末廣く、榮えあふぎや若紫樣、次にぼつとりふたかはめ、見る客ごとに魂をわすれ、氣虛に人參をもり取かへすつしま樣、こなたは客に三千年さま、扨八番に春もすぎ、夏も半の御はだへ、衣ほすとや香久山さま、麓よりかも峯續き、繁昌は今ぞ柏木さま、さて十ばんに扇屋の、妻いとふこがしたる、ふりも情もみだれ髪、ゆふにやさしくおもほえて、誰も心を足曳の、深山さまとぞ名乘ける、十一ばんは三國さま、名はひろけれどそれに似ぬ、せばい處が有馬山、いなにははあらぬ鶴崎樣、したるい目付かもんさま、是が槌屋の大黑なり、扨車屋の奥州さま、まはる扇風の要には、屋しま樣御一人、次は吉野屋小倉樣、花の盛ぞ茨木屋、若倉樣の御威勢を、遠國まであづま樣、なまり聲なる江戸大臣、見とれてなづむ主殿さま、そこが金子ぞ金五樣、扨二十一ばんに丸屋の奥州黑さまとて、乘心よい名馬の聞え、あつぱれお上手比類なし、扨これよりは茨木屋妙了内に名も高く、聞え給へどしづかさま、諸藝の分は殘らずも、萬太夫樣小太夫樣、半で柏子半太夫さま、三五さん薄雲樣、長いがおすき長門樣、おつと金とつりがへの、金太夫さまの御全盛、扨野風さま霧山さま、ずんとすぐれし名木や、かほるさまこそ今美人、いやそれよりも今ぞ實、さかりと見ゆる花崎さま、あつぱれ西國四國まで、名取のお子や屋しまさま、扨跡備は御兩人、

是ぞ此津の醫者もどき、いかなる勞痎病ほうけも、見はらし命を延るとて、大野さまとは申也、扨喚子鳥都鳥、是らはなゞて傳受とて、其次なるを名乘らねば、宇八城六せきたつて、此お子きかねば夜が明ず、さつても御器量美くしと、ほめそやされて伊兵衞は、おおさも候、此君は日本一の美人とて、吾妻路樣と申お子、乍ニ慮外ニと大自慢、扨其次は一天の君の皇后とあふぐなる、忝も由城さま、水の清きにいとゞ猶、雪をあざぶく白妙さま、扨三十九番には、人の心もうららかに、蝶鳥までもたはぶれの、花里さまと申なり、扨其次に御一人、はるか北座にうづ高く、おもはせぶりの御女郎、心にくしと尋けり、さればとや此君は、お客にあふてははりつよく、口舌さま〳〵積りては、つよい往路を立山の、雪のはだへを名によそへ、越中樣とぞ申ける、大臣はるかに聞こしめし、扨名乘たりおもしろし、いそぎ是より女郎の分、宇八に申付しごとく、望にまかせ遊興させよと、猶奥ふかく入給へば、太夫より端ばしまで、俄に籠の鳥の雲ゐにかけり、網の魚の大海にはなれて、水をくゞるにことならず、めん〳〵の心々に、毎日生玉天王寺、芝居へ行女郎もあれば、こんな時笠をぬげと、新地堀江の料理茶やにて、鱧のかばやき丸鍋まいる太夫も有、伊勢參宮愛岩參り、五人七人手を取くんで、町中を見物すがた、前代未聞のなぐさみなりき、

第十五、安い戀より高い命毛

世界に金銀程かたよりのするものはなし、ある處にはいやがうへに、ない處の貧家を見るに、燈眞買力なふても、闇細工の子種おほく、いやがる家には年子をならべ、上つかたは御家大事と、妾女あまたあてがいたまへど、是にさへお子とまらず、此もんちより今の世に澤山な遊女、津々浦々にかぞへがたし、わきて難波の大湊、茶屋一軒に女三人ならしにして、茶屋數二千八百十七軒、女合て八千四百五十一人、晝夜五人ならしの客代、毎日百三十貫目の内外、揚代のけて此金高、年中に四萬六千八百貫目餘也、つもりもなき大きな事、大坂見ぬ人は虚言ともおもふべし、疊屋町、太左衞門橋、六軒町、道頓堀川裏町、同土檀町、南堀江北堀江竪横筋かい、新地曾根崎蜆川、中町よこ町、安治川新河、兩むかひの外蘆分橋の邊まで吟味せしに、いかなる茶屋にも、ふたり三人五人ならし、客をつとめ

ぬ女もなし、此度勝久新町御遊興の内に、しのびて茶屋御見物しかるべしと、宇八がすゝめにまかせの兵吉城六彌四郎、わづか四五人供せられ、日の入より島の内、外介といふ僕に手がるき行廚、六尺にさきをはらせ横堀をさがり給へば、兩脇に明間もなふ、紺の布子に大ふり袖、四五寸まはりの紋と顔と、しろ〳〵とくらがりより出、行來の男をとらまへはなさず、大臣是が見はじめなれば、いかなる事ぞと尋たまふ、宇八うけたまはり、さん候都にても夜發とて、東河原に徘徊致、お足にまかすといふ義をとり、當所にては足嫁と名付、すべて濱々横町小路に、幾千萬ともかぎりなく出合、此材木のこかげ枕に、何程なりとも數をかぎらず、曉の鐘を相圖にめん〳〵が宿に歸り、先山朴の煮出し皮にて、其身をあたゝめ候傳受まで申上れば、いとあはれにをぼしめされ、猶此筋をさがりたまふに、爰にても件の賣女、船頭らしき男をとらまへ、是非にちよつと、材木を力草、引づり入れんとひつつかめば、男は同心せぬふりにて、もぎはなすをはなさずと、猶ちからこぶいだすひやうしに、彼材木引たほれしかば、あはれやそばにいねぶりせし牛藏とて、此女の親かた、がつふりみぢんと打くだけしかば、數千の足嫁牛男かけつけ、とやかく介抱なすを見ずてに、是より道をかへ、程なふ太左衞門橋片端より見物、萬人のぞめき、綿屋高津屋雛屋などゝて、此處の名代茶屋、大臣まじり詠めあるく、中程にてちよつとおはひ入あそばせしとて、無理に客には致さぬ、よし〳〵是も御なぐさみと、是非なふ大臣を守護しまいらせ、奥座敷といふもつらし、あふぎや伊兵衞座敷さへ、此度あらため普請せし、御大臣宇八をめされ、又材木の氣遣せよと、横堀同前におぼしめすおかしさ、女六七人座敷に並びしばらく顔見せして勝手に飛入、跡には味方計の處へ下女罷出、今の女郎樣方の内、お氣に入しを仰せられませ、まづ爰に居給ひし、春のひくい目の大きなが小船さま、次にゐたまふ鼻のひくいほうの赤いがおやすさまとて、すつきりあの方から面疵もつて出る、口上きくに不レ及、有だけよんで酒事いたそと、九人ともに座敷にならべ、こちとらは備前の牛窓、あかり見ぬ田舍者ゆへ、珍敷はやり歌、新しき咄がのぞみと、まことしく海男になり、酒も國の手作りまいれと、僕にもたせし行廚取寄、提重々々のも

のずき、女どもびつくりして、つゐにたべつけぬさゝの味ひ、口あたりの能にまかせ、此茶衆達おかしい事の數々、是を肴に大臣も一つあがれば、末社ども悦下より彌四郎が一ふし、都の一中古今新左にさへ傳受する此男が聲、隣なる貝塚屋にひゞけば、鈴木辰三、荻野八重桐是をきゝつけ、不思議や京の彌四郎樣ぞと、いつさんにこなたへ來り、是彌しう樣、そうはいはづの事、今こそ餘所に聲のみはきけ、むかしは鹿も樣子ある中、殘りの末社も心やすく、まづは當地へ下りし段々、つゐでながら勝久どのへも、御目見への儀式たゞしう、宇八彌四郎申上れば、幸の近付得たり、近日芝居も御一覽の御約束、座に百兩包兩人へ、一つまいれと我君の御肴、玉の盃めぐりすめば、茶屋へもくわつと宇八が捌、すぐに今宵は南島に御一宿あそばしましても、けしうなき竹田が座敷、からくり等も御なぐさみとて、達て八重桐御馳走申せば、勝久公機嫌よく、如何樣とも末社まかせに、是より出雲の大社へ大臣御行く、はや堀中にかくれなく、開傳へに役者のこらず、座元よりの進物島臺、馳走の山を一夜にぞこしらへぬ、

第十六、財布に禿が目印の男振

所とて男女のなりふり、男は役者女は茶屋風、自然と帶のむすびめまで、實々色の手習ひ場、いろは茶屋とて仕出し辨當、風味も各別、肴は京よりあたらしい仕組とて、嵐半四郎、片岡篠塚、早朝より御目見へ、宇八彌四郎取次申せば、急度した御露、内場な事嫌らはせ給へば、百兩づゝ露にぬれる役者の分九十八人、三日が間芝居をやめてわつさりと座敷狂言、四芝居ながら一座になつて、得たる程の所作をつくせば、御機嫌殊に、當暮よりの金本、四芝居ともに請合給ひて、其外狂言かはりめ何かに、不勝手の事あらばと、宇八まで仰わたされ、四日目は寺社御見物、まづ千日も此里にて、千日寺を緣喜にとつて、太夫子の分不レ殘御供、爰ぞ無常の卒都婆の數、あまたの中に風流めかしく、牡丹の丸違琴柱、或は梅開、戀といふ字を丸に彩色、一つ紋の石塔多し、大臣是をとはせ給へば、宇八かしこまり、是は當地の心中塚とて、まづは茶屋ものはし女郎、金銀の刹那に行つき、あるにあられぬ浮身故、兩人ともにさしちがへし事、三勝以來數千の命、さきであふやらあはぬやらと、一中ぶしをすぐにかたれば、

實にさることは都にて、小姓共が咄聞しぞ、根は惡からぬ情の露、消行人よりあとに殘りし父母のあはれをもよをし、御泪をうかべ給ふ、片邊には竹立て、幼少石塔地藏のお姿猶あはれに、此下には疱瘡はしかのなげきあまた、さいの河原もせばき程、去年の病瘡勤め女の十六七にて、此二つにとりまかれ山も見えず、かりそめながら見えわたりし塚二百十七、爰のみならず梅田よし原、姥瀨杯に葬りし茶屋もの、塚には殘る露のたましゐ、三年すぎてもわすれやらず、そばに有し湊屋小吟と有石塔へ、最前より入かはり立かはりし男、十二人まで皆々しうたんの色ふかく、いひかはせしこと反古になつても、涙とともに水をたむく、扨は此女の全盛、死だあとまで各別ながら、百人あへば百人ながらへ、嬉しがらす商口、しれてあつても愚なる、男の氣を宇八笑へば、佐野川花妻そばに居合、それは虛でも外の男、其座になければ尤にをぼすも斷り、私どもが虛と申は、まんざら見えすく、年四十になつても、大振袖に物ごしうつし、十七八とおもはせぶり、座敷にてのはづかしさも、先樣にがてんながら、床に入てうしろむく時、おもへば毎日朝時へ參り、佛にむかひかうする時分に、身すぎなればと大笑ひして、すぐに長町に出、天王寺へとさがり給へば、西がはの宿屋にて、十三四なる少女の聲して、慥にそなたじや、證據は紋にしるしあり、先此人をとらまへてくださんせと、なげきさけぶ聲につれ、家内のひとゞ〳〵あたりを取卷、順禮棒を手に手にひかへ、あの子が申口ぶりにては、先爰がいなされませず、是非御身にくもりなくば、帶とひてすゝぎ給へと、立かさなつて口ぐちの時、此男懷中より日野島の財布を取だし、近比面ぼく次第は段々、拙者とてもこうした事、まつたく慾に致すにあらず、樣子有て久敷浪人、老母一人妹一人、七十九に成譜代の家來、三人ながら當地に預けて、生國藝州へ是非にゆかねば武士がたたず、此本望を達して後、急度返辨致覺悟、それゆへきのふ見えがくれ、わざと跡よりしたひ行、あの子が家名は車屋、所は新町三丁目の南がはまで見屆けたれども、今になつては武門の惡名、其書付も中に有、金子の儀はきのふのまゝなり、武運つきしあとを賴とおしはだぬき脇腹へつきこむ處を、此人々をしとどめ、御尤いち〳〵次第、武士の落めある習ひ、相違

なくいだし給へば、あとはまたお侍、さまぐ〳〵すがつてこれをとゞめぬ、大臣まつしやもきくに、あはれ金づくにての命なれば、爰は見のがすとこにあらずと、御めんこうて内にいれば、かぶろ財布請取てより、五十兩の包を見れば、此比曲輪で露に打給ふ金子、くるまやの小和泉といふ狀までひらいて、金子の數何べんか讀合せし後より、文をよめば大かたならぬ女郎の心中、

すぎし比より打たえまいらせ、わざと文して申も上ず、ことさら二通の返事、ひかへましたはおためをぞんじ、きこえぬ我身とおぼし給はゞ、御かよひ路もおのづからうすきは、當分するゑながく、何とぞ二度御世に出し、此里ながらもながめまいらせば、我身一生の本望、此度不思儀と京より見事な大じんさま御くだり、くるわ中への心情に、わが身もあづかり候金子五十兩、すぐにおくりまいらせ候、此かねにて内々の御本望、さうをうにこしらへ給ひ、いそぎ江戸へ御くだり、御奉公御かせぎあそばし、めでたきやうす、追付むさしより御きかしねがひ〻〻、我身かやうにいぶせきすまひも、人こそしらねみなそもじさまゆへの御事、きしかたゆくすゑおぼしめされ、はやく東へ御下り可レ給候、但し此金少も色あつて請得し小判にても無三御座一、もとより筋道くもりなき出生にて候まゝ、慥に思召、かならずうたがひ屈にども御出御無用の御事、くわしき儀は、此つま彌に御きゝ下され候得〻〻し、

くるまやこいづみより

長尾氏さまへ

まで御覽あつて、大臣も手を打給ひ、最前の御浪人へむかはせ給ひ、御老母御はごくみの爲、當分の惡心ながら、もと孝行より出し處、御望達し給へと、五十兩すぐに進上、宿屋へも露を同前、禿のつま彌は西へおくらせ、猶大臣は先へ生玉天王寺へぞ參り給ひぬ、

御入部伽羅女卷之四 終

御入部伽羅女卷之五

第十七、願は十八めの蒔錢

いにしへ嵯峨の天皇は、忠仁公をえらびて、御子を預け給ふ事有、是世を治給ふさかりに、聖王ならしめんとの御計ごと、今の都宗善は、たはひなしの末社ども、隨分あほうの司をえらんで、一子勝久をあづけしかば、いまだ廿日も立ぬうちに、めつきりと智惠をくもらし、金銀は天から降やら木になる物やら、底のしれぬ大氣男、あほうかと見れば、ごこやらによいとこあり、色好かとおもへば、すきと床にいらず、只大將に相極り、京よりふだんつけとゞけ、大坂よりも日に日に飛脚、朝夕の事申のぼせ、御酒も今朝はをりべに二つ、今夕が又床入の御番、一昨日よりことにおこゝろすぐれまいらせ、茶屋なども御順見遊ばし、ずいぶんぬからぬ我々、御大臣にと仕入もりたて候ゆへ、わづかなる日數の内に、見かはす程の御顏色、今程は五斗俵もあげ給ふべき御ちからづき、もはや慥に此世に取とめ候條、すこしも御氣遣被レ成間敷候といふ狀、家老圓右衞門まで、宇八かたよりのぼせしかば、あまたの手代大きに悅び、宗善まへにて讀立ければ、機嫌と申は大體の事、まづ氏神上御靈へ三寸を上られ、伊勢神明への御禮まいりも、手代どもに仰付られ、いよ〳〵息災延命にて、女郎狂ひ致やうにと、兩宮樣へ太々神樂、百廿末社へも不レ殘壹角づゝはらりはらりと、いねぶりしてゐ給ふ安禰宜達肝をつぶし、土の箔をきしんちうかとおぼしめすはことはり、當年廿一に成京の男、末社樣がたのちからによつて、病氣本ぶく仕りし御禮、壹歩のぶんは都であらたまり、入あいさつして手代は下向致しぬ、跡では禰宜達寄合給ひ、日本初つてより此方、毎日數萬の參宮人、せめて小宮へ人別に一錢づゝなげれば、たかまがはらに生魚をたやさず、雨風の日は爰へ出ずに、天の岩戸に引こもつても、八百萬の事くらい事なし、此前長崎の大船屋娘なりとて、錢百文づゝのべに包、兩宮の小宮へ不レ殘、女には珍敷と中をあけて見れば、賴〻〻との書付、扨は戀かと跡にさがりし下女にとへば、さん候長崎にて一番切のひとり娘、去年阿蘭陀より上りし唐人の若衆に戀をして、八千貫目の跡しきすて、

あつちにてそいたいとの望、親達一門あきれはて、日本より唐への縁組、ちくらが沖氣遣なりと、兩親是を呑こみ給はず、そんなら日本に留置、智にしてとの願ひ、只今其談合最中に、おもひ立ての御參宮、皆唐人の若衆ゆへにと、下女さへ吹こぼす程おかしがりぬ、其後泉州貝塚より、有德成人の息女とて、壹匁づゝの小粒まかれしなのねがひはきこえず、是も跡なる下人にとへば、されば私の在所は、四國西國の船づき、せばひとこでもあるじはつゐに藏の内見ぬ大酒屋、碓さへ九十、唐日本にはまれなる身體よふても去年の秋旦那三十一にて、無常に趣かれし、ともに九人迄の人智、皆々二年とはこたへず、やせがれての病氣、相手はあのお内儀一人の料理、いまだ廿九なれば、十人めを僉議すれども、いかな〳〵十五の年よりころし初、五十里四方にかくれなく、此度は平戸の船頭が肝煎、後藤の鰯屋の息子、首尾成そうで、先は大坂見物がてらに、女房も見てからとの事、然ば雲に汁が付たと、是ゆへの御參宮、何程金銀蒔れても、神も請合給ふまじ、せめて夜計の御用ならば、品に寄て五年はこたゆべきかと、大坂堺の賊がらし、巾着切よりましかそんかと、算盤入ての評定にも、晝過より身をとつて、夕飯喰ふ間もせはしなく、朝食の出來た時、漸々おきて人並に膳にすはれど、どうやらかみづりになり、胸づかへせしにも命は食にありと、あまたの菜をせゝり仕廻に、箸下に置たばこ呑んで髪を結、すこし肩骨際とおもひ、腰の廻りをふところから、手を入さすりかゝれば、はや旦那殿々々と自身によび立られ、いきとむない顔すると、入智のかなしさ、これでまん二年こたゆる物かと、雪踏なほしさへがてんせぬ女房を、其身金鐵にてはあるまじ、和泉の土にならふより、所にて鰯の得食になりをらいでと、麥まのやうな男さへ尤の一言、それより二年過、いづみの貝塚と有ぬけまいりが笠をひかへて、此事を尋しかば、彼男が申せしごとく、其入智は祝言してより九十三日目に、哀や此女房の顔を詠め、だまされたと最期の一言、十一人めを今尋る最中といふにぞ、おそろしさ身ぶるひして、烏帽子を落せしこと今にわすれず、其後は人もせちにて、十二灯さへまくはなきに、金子壹歩づゝ請ながら、祈念せぬも勿體なし、そのおやたちの望の通り、ずいぶん色狂ひに理發になり、幾久しくつくすやうにと、百廿末社の禰宜たち、それより朝夕勝久あほうの祈念しげくいのり給ふ印にや、一日ましに分里の品よく、大臣姿ぞつのりぬ、

第十八、開帳は本の扳參

金銀もつてをもしろいといふは、人の命さへ自由自在に、金でならぬ事五つの外、無間地獄も眼前に極樂となす此威勢、先達てかゝる大臣くだり給ふと、生玉の萬歳樂助、勝曼の德屋、清水利兵衞門方にも、浮瀨の中をみがいて、松むしといふとなりの娘に、着までうたはすがてん、誕生寺の御開帳、圓光大師の御影あらたなるは、此方の寺にて中將姫の曼陀羅をり、則憧はむかし當麻で織らせ給ふ、しやくせん段々つもりしゆへに、當寺へ先年質物に置ながし、結縁のため拜み給へ、三錢づゝの心ざし、まんだらに織りこみたまへば、いづれも冥途へおかへりの時、六道錢がおゆるしと、大芝居の木戸のごとく、大音に人くづれして、六道錢三文なれば、目に見えて半分德と、爰でも慾を第一の仕出し、毎日錢の山をかさねて、百四五十貫二百貫づゝ、何事も此津の大きさ、猿の狂言、鬼の生捕、鐸はもどりと鑑板を見まはる中に、大きなる枕繪書、女はふり袖、生國は備後の福山、れき〳〵なる人の娘、參宮の道で仕ぞこなひ、男は廿五、見ぬ事はなしにならずと、ゑいや〳〵の大見物、またまんだらよりひときわすぐれ、若い女中のながめにあかず、あるは歴々桁の娘子、お袋らしいがさきにたつて、こんな事も見たがよいと、助兵衞といふ手代ぐるめに、さし合もいとはばこそ、宇八彌四郎も此見せ物は咄の種と、むりに大臣いざなひ見れば、堅島の大夜着へ、むす□□□を上にして、片ほとりに參宮の手みやげ、見る女中の分、いづれか上氣せぬもなく、うたてといひて見かへすめもと、是をおもへば都にまさり、ずいぶんといたづら顔と、見る程の女に讃付、すぐに勝曼清水拜し、天王寺の七ふしぎも知れて有、西門の額小野の道風、釋迦如來の縁起のこらず、おかへりには谷町北へ藤の棚の御望、妹脊町の西がはにて、まつた喧嘩と町中どやくや、晝中にきやうとい、今年は寅の年とてはやい事と、家々の内儀むすめ、くりわた片手にはだしで飛出、鼻つき合さゝやくを宇八きけば、中にも家持らしい女房、皆樣も内にあらふが、ゆだんのならぬは女の下地、いかに印がならぬとことて、夫の目

をばしのぶずり、かりぎする身で密男は、家ぬし借屋の男表家を取ても、堪忍は致さぬとて、只今御前へゆくになつての身でしらへ、直打のしれた三百めであつかへば濟事ながら、ないかねはほつても出ず、おもへばやすい命といふ時、宇八きゝ、其家を渡すといふに、堪忍せぬ理屈はいかに、成程御尤の御不審、三間口で漸く二百九十匁の家質に、去年より入て有、ことに當二月切の約束、すぎれば先様よりせがむ最中、漸漸町内のあはれみ、一月暮しの家を持て、めんぼく灰賣商賣なれば、ほこり程の手だてもなし、去ながら此春より當町に密夫五人、それ其となりな米屋を御覽せ、家財かけて十五貫七百九十五匁の身體、よしこのほとりの那波屋なれど、裕貧乏は是非なし、毎晩百づゝが米買女房に、おもひ懸商は伯母にさへせぬ男が、彼女房に鼻毛をのばし、わづかづゝがかさなつて九匁七分、せがむ片手にくどきかけ、ちよつとしゆびに帳面けすはづ、先月の五日の晩に、此女房のかへるに付行、横町の門のあはひで帶までとき、落着た最中にやらぬといふ男は則、利屈崎辨野右衞門とて薩摩浪人、まづふたりをば引しばり、此町への屈きびしく、明日御屋しきへと申に驚き、扨三百目のあつかひかゝれば、此男いとゞ腹立、武士の女房を直打する、町の年寄めを相手と、横に出る車を留かね、一貫目より段々あがりに、あの家渡して事が相濟、明後日から入かはるはづ、筋むかひの鳥屋には、鼻が嫁を埒もないせんさく、ことゝ〳〵く吟味すれば、町内半分のうへ、おかしい事ども大臣も聞召され、其米屋はすんだ事、けふの男が命もらへと、宇八彌四郎に仰付られ、二兩二歩にてことをすましぬ、

第十九、義理より深い槌屋の梅川

五月雨は難波堀江の澪標と、忠季卿のよませたまふ、蘆屋の里見てまゐれとのおほせ、かしこまつて宇八申は、さん候蘆吹こやの軒端と申は、只今の阿彌陀が池より西のかたを申よし、子細は古歌にも、

人かよふ難波の蘆は海ちかみ
　　あま乙女らが乘れる船見ゆ

と讀候よし申せば、實にさもあるべし、いそぎ其里御見物とて、末社不レ殘お家の定紋、ひちりめんに大黒ぬはせ、西口さし御出の時、かけまくもつちやの梅川、くもりなき其身の仕合、佛神の御加護にて、世間

ひろき御めぐみに、あひに相生の松よりすぐれしはやり女郎、都へかへる名殘とて、あなたこなたへいとまごひの折ふし、勝久此むめ川をほのかに御覽じ、宇八をめされ仰けるは、いづかたの女郎なるぞ、扨愛敬ありきりやうよし、けふは名所も引かへし、まづあの女郎と一座をなし、堀江はかさねて見物すべしと、これよりまた扇風かたへかへらせ給へば、あまたの末社よろこびいさみ、さあ我君の戀はじめ、あのよね樣は御果報仁、へんじもはやくいざなひ參れと、扇風かたよりつちやへの人橋、かつて是に取合ぬ梅川の水、すいちやうかうけいにかしづかるゝこと、さら〳〵にのぞみなし、我は待人ありそ海の、底しんよりふかき心中、やあらいさぎよき御女郎、鶴は千年龜は忠、目出度壽命萬年までもかはらぬちぎり、色里ひろしと申せど、三箇の津に是程の心中女、いまだためしにもきゝえず、十七人の末社ももがき、宇八彌四郎つちやに來り、梅川にげんざん申、君御思案の瀨戸は爰也、勝久こゝろにしたがひたまへば、一生大黒屋の御奥樣、おそらくは京江戸大坂に、我等が旦那にかたをならぶる町人もなければ、まのあたり生女來、年中遊び給ふが役めなれば、のら如來身のら如來と、そゝつてもすかしても一念みだれず、卽身上々きつすいのわけよし勤め、をんなのうぶすなはち手本なるべし、宇八彌四郎も道理をふくし、勝久へ申あぐれば、是非も情を知た女郎、此里にもありけるよと、此戀さらりとやめぶんに、また色もあるべし、先此比おもひ立し、彼名所を尋んと、又堀江さしおもぶきたまふ、しかるにふしぎや御池の邊にて、晝中とおもひよりなく、にわかはたそがれ時の鐘つきし風、身にしみ心ぼそき折しも、虛空にあはれなる聲のみきこえ、いかに勝さま大臣さまとよぶ音きこゆ、宇八彌四郎何者にやと急度白眼ば、そのときいとやさしきこはねにて、さん候われ〳〵は、此世をさりし心中女で候ぞかし、過し比千日寺にて、御ことさまのあはれみゆへかりの御禮、ことに又茶屋女の浮身申さば、くるわのごとく御情あつて、死下地のお山たちとまらるゝ、此うれしさ十萬日の御廻向よりふかひ功德、まつしやさまたちたのみますといふは、天滿屋初が聲、其跡へ親父の幽靈、はづかしながら私儀は、いつぞや横堀にて打くだかれし、足嫁が親かた牛藏と申者、世界に色の道

柴おほく勤め、女はあまたながら、夜發にました無常も情も、しつた男はよりつかず、大かたは西の宮尼崎の海老じやこ船頭、木津難波の芋助か、扨は鍛冶屋檜物やの弟子にむしられ、冬の夜は雪をしとねに、茶碗酒一膳そばきり、親かたの目をぬすみしとて、つらくあたりし其報ひ、今は三途の川ばたにて、此世のまねび思へばかなし、姉も妹も貧よりをこるつじ女、母親伯母のわかちなく死なれぬ命、客なき時は難波のはまを夜すがらあるきて、あかつきがたはじやこ場のうを船、鳥貝舟の磯をせゝれど、損料がりの身のまはり、錢百文をまうけかね、かなしき泪が雨となつて、ぬけるほどふりやまず、是非なくかり物ぬらしてかへせば、又二匁のまどひまで、其身のあぶら紅白粉、此ほかの入目も候、あはれ茶屋より先へまづ、足嫁のぶんに御情といふ、こゑともに夜が明見れば、ふしぎやあみだの池堤、これなん佛の御おしへ、幸この地に高札打て、大坂中の茶屋白人呂衆椋やへ金十兩づゝ、夜發のぶんは鳥目ひとりに十貫づゝの御情、一日一夜にふれをまはし、明卯月の朔日より八日までの御きはめ、あみだが池にやらひゆひ、大半切四五十斗に小判をうつし、ぐるりには御家來末社、かさねるやら包むやら、小判の山を目前にながめ侍りき、

第二十、金が敵の末々までならぬ行儀

鶯の花にねぬは、色香をふかふしとふゆへなり、人のなさけもはじめ終、就中はたがひに打とけ、いやなこと見たり聞たり、まことに色遊びのおもしろいといふは、親のせつかんつよひにつのりて、ぬけつかくれつきうり切、せんさくまへより座敷籠にて、きしかたゆくすゑおもひめぐらし、金やあらん、銀やむかしのかねならばと、不自由なうちにも、猶その敵衆を戀わぶるこそ命なれと、めつそうの甚吉といふまつしや、大臣の聞耳もしらずに申せば、飛あがりの雲八といふやつ、雲をつかむやうな返事に、貴公が粹言五體もほとびる程おもしろし、さりながらおなじなぐさみなら、その不自由はいらぬ物なり、今の旦那が身に拙者一日ならば、まづあの太夫のぶん不レ殘、太平記にある無禮講は手ぬるし、晝中にゆもじもとらせて、その風景ながめ〳〵、歌がるた勝た女郎のぶんから、さきへゆもじをゆるすなぐさみか、扨はふりわけ貧乏鬮とて、女郎の數ほど寶引繩、との樣御近習立傘臺

がさ鑓もちの僕を書付、其役人の繩取あたりたる女郎を、やつこにしてつり鬢、尻を七の圖までからげさせ、樓櫚箒を鑓にしてふらす事、大わらひの隨一、かやうの曲座も一日二日、それすぎたらば皆々請出し、東山靈山近所か、又は六原安井のほとりに、清盛の例にまかせけつかうに家形をしつらひ、祇王祇女が舞ををしへ、其身も朝夕髮けづるもむつかし、入道して平相國清松となりとも名乘て、ふだん京中を一目に、此艶婦にながめさせ酒を呑ば、つみもむくひも火に入事も、大佛やかねば氣遣なし、是凡母の胎内けちらかし出しよりの樂、貴方が舌辨吹こめと耳をたたけば、甚吉虛空によろこび、されば天地も廣いやうでせばひ氣から、智惠があれば末社役、愚(とろ)ければ大臣、足手そくさいならば、いづれしたい事して見たし、むかしの道長はかくれもない太政大臣、家形には八十七人、振袖の艶女を並べ、明暮との遊興、つもる年五十四にて剃髮、このよろこびとて石清水へ參詣の時、都の遊女を不レ殘めされて、淀川にて舟遊山、上下五十餘艘の内、十八艘は遊女舟たり、此外御一世の内、あるとあらゆる御たのしびも、皆々好色ひとつにきし、赤染衞門の作文四十卷の物がたりは、此道長の榮華をしるせり、長生のむかしさへかくのごとし、まして今のわれらが旦那、四十二の役までは請合がたし、そのゆへは床入不得手、是内ぢんの血氣すくなく、短命のしるしなりと、影口をきこし食過るとそのまゝ、宇八彌四郎をめされ、明日のなぐさみ、晝まへより太夫のぶんのこらずよびよせ、ゆもじはづさせつい松とらせよ、なんぢらも打まじりに、それがしも見物すべし、扨明後日になりしかば、寶引繩三十六筋と、しゆろばゝきを用意いたせ、子細は其時申付べし、扨又都の六原へんに、四五町の屋鋪をもとめよ、是はまづ追ての事、歌がるたのこと吟味せよと、藪の中から棒とまうそか、とひやうもない御仰、先かしこまつて次に出、十七人鼻つきあはせ、何とも是はけしからぬ御望なれ共、先亭主人談合すれば、伊兵衞も是にはあぐみ、どうがな智惠のほぞにも落入ず、末社とともに内證たのめど、口きゝの太夫たち深山三五吾妻をはじめ、是は皆々ゆるし給へ、いかに金で賣身として、夜でもあるか晝中に、をの〳〵樣の粹役には、わしらにきかさぬさきに、申上よもあらふ事と、實めい

ての返報、爰はをの〳〵尤にして、我等が身になりたまへ、此御のぞみ醫師といはゞ付る藥もなふ機嫌そんじ、おもしろからずとのぼらるゝはしれた事、さすれば我等大せい身あがり、親旦那も腹立あるべし、爰の手相かしこの不首尾、さつし給ふが高職の御役目、なる事をかなへ給ふは、小豆粥のもりさまし、にやついたことときかぬ男と、宇八彌四郎急座出れば、揚屋の亭主中にたつて、おふたり樣の仰も尤、爰はわたくしもらひまして、世間へ沙汰する事にあらず、是非太夫さまをれたまひて、君の望をかなへたまへ、ゆもじの事は其場になつて、御あいさつもあらふ事と、兩方とつての下知にまかせ、このうへはどうなりともと、四十餘人の太夫、そのあくる日はだかになつて、大臣まつしやうちまじりに、ゆもじのぶんもをゆるしなく、雪をあらそふ膚あらはに、よしない處のをくまで見えすき、物はかくすこそ命なるに、げぢ〳〵がねぶりさし、五色の黒痣灸の數々、いやな事お目にとまり、この遊宴さへほかになれば、ましてほうびきなはもばらりと、三五の十八御思案ちがひ、身うけのことはさて沖より吹秋風、そろり〳〵御身にこたへて、此里の興つきしは、太夫さまがたしぞこなひ、ひよんなことを見せ給ふ事の、

御入部伽羅女卷之五終

御入部伽羅女卷之六

第廿一、名殘は班女が扇車

すぎし比加賀の梅田といふ大臣、島原のあげまきによみおくりし名歌の内、おなじ心によりもあはなんといふ事を、宇八勝久へをはなし申せば、かぎりなふきげんよく、いそぎ都の遊里を見んと、あまたの末社に仰付られ、御荷物金箱ともに、四五日まへよりおくり出せば、くるわ中なごりをしみ、赤子の母をしたふがごとし、時に勝久宇八にむかはせ、此たびはじめて天滿の御祓に見物せし檀尻（だんじり）といふ物、京の山鉾より乘心おもしろそうに覺ゆれば、又なき仕出し、我是に乘八軒屋まで歸るべし、咄相手は太夫の分不レ殘其檀尻にのせ、めん〳〵得られし程の諸藝をのぞむべしとの仰、宇八承り、太夫達にたのみければ、何が扨君の御所望、いかやうともとの御請合、是をきゝ天職鹿戀はし女郎にいたるまで、御見おくり申度よし、幸のことなりと十八軒の揚屋中、扇風方へ寄合の上、其役々をわかちつゝ、檀尻をぞこしらへぬ、扨太夫の分は、不レ殘だんじりに乘、下髪にて金もとゆひ、あふぎをかざし諸藝の役なり、引舟の分は一だん下のかまへにて、太鼓鉦をひかへ、はやし方の役也、天神の分八十餘人は、だんじりの先へ四十餘人づゝ、兩方へ立わかり、尤是も下髪銀もとゆひにて、行列の品禿一人づゝつれられ、銀の團（うちは）にめん〳〵の定紋を付、禿後よりあふぎまはらす也、鹿戀の分は、八十七人の末社達と相役にて、たんじりより先へ散錢箱を指荷ひの役也、其跡より小天神の分は、太夫衆藝づくしの番付印持役也、猶はし女郎かげの分は、たんじりの綱引也、同横町よし原などの月女郎と申は、檀尻の手木つかひ也、此外分と申位の方は、勝久へ御目見えもこれなきゆへ、此度の見おくりも御ゆるし、殘りの分だんじりの役目に出給ふ程の女郎を爰に記なり、但し太夫達此度扇をかざし藝し給ふゆへ、名の上に扇と有は太夫、はやしと有は引舟、團と有は天神、箱と有は鹿戀、印と有は小天神、綱と有はかげ女郎、手木と有は月のかはり、諸事合紋に氣を付給へかし、

大坂新町四筋不レ殘女郎位付并内證友吟味役人揚屋茶や諸商人の外藝者鑑

越後町二丁目南がは　茨木屋妙了内

太夫の事也
扇　しづか　拍子　やくも
同　萬太夫　同　とやま
同　うす雲　同　おのへ
同　さんご　同　高つ
同　ながと　同　かはち
同　かほる　同　もんど
同　東路　同　いくしま
同　大野　同　大はま
同　花さき　同　見つはし
同　きり山　同　津川
同　初ぎく　同　かしは木
同　のかせ　同　かしはぎ
同　金太夫　同　しづま
同　半太夫　同　あかし
同　山しろ　同　しな川
同　なには　同　市はし
同　土佐　同　朝づま
同　しろたへ　同　問つま
同　小太夫　同　はせ川

引舟の事也
常春みまかり給へども殘念ゆゑしろし侍る

天神の事也
團　小いづみ　鹿戀の事也　箱持　やちよ
同　よしだ　同　わかやま
同　やまと　同　ながしま
同　あり原　同　いとせ
同　山のゐ　此家の出見せ、通筋一丁目南もは見せ女郎の分、
同　見ふね　印持　みやこ
同　八へぎく　同　みやま
同　ながはし　綱引　みや崎
同　こもんど　同　きく川
同　小井筒　同　いづみ
同　あやめ　同　しな川
同　たかだ　同　うき舟
同　きよ原　同　しらぎく
同　いくせ　同　大さき
同　かりう　同　はきの
同　いなば　同　みやぎの
同　とこへ　同　和こく
同　くもゐ　同　わかくさ
同　きんざん　同　もなか

團　きぬがへ　綱引　わかくら
同　八重ぎり　同　みつしほ

同町南がは　茨木や治右衛門内
扇　あづま　拍子　のざと
同　わかくら　同　しげ山
同　きんご　同　わかの
同　とのも　同　とさき
團　をほね　印　きりかへ
同　ありま　同　きり山
同　やしう　綱　とよさき
同　もんど　同　つやま
同　つねよ　同　みつね
同　九重
同　はつ山
同　やつはし
同　八重崎
同　たかま

此家世々つたへて、太夫しよくのほまれおほし、そのかみのあづま、あるひは天職やしら木の間の事など、しるべの揚屋にてたづね給へ、第一女郎出世目出度家也、

同丁北がは　吉野屋勘左衛門内
扇　をぐら　拍子　野川
同　ゐづゝ　同　はや川
團　八重ざき　團　宇川
同　かりう

同丁　茨木屋大八内
扇　大よど　拍子　のせ
團　さほ山　箱　八くも
同　さがみ　綱　かしう
同　いろか　同　みちのく
同　みさほ　同　大はし

同丁　京屋妙知内
扇　花づま　拍子　もくら
印　玉かしは　綱　水木
綱　きよ山　同　八くも
同　ふじ山　同　せがは
同　ふじさき　同　はな山

同丁南がは　高島屋花内
團　佐渡　同　わかむら

團　あふ坂
同丁　さかひ屋半平内
綱　たきの　同　きくのせう
同丁　備前屋惣兵衛内
綱　あやめ　同　花の井
同　ぬふてふ　同　あさづま
同丁　桔梗屋半左衛門内
印　山しろ　綱　八重ぎり
綱　やまぢ　同　み山ぢ
同　山きし　同　まつざき
同　やまと　同　さがみ
同一丁目南がは　いづみや次郎右衛門内
扇　越中　拍子　あふみ
印　長太夫　綱　のかせ
同　やしう　同　大野
同　はつね　同　大はし
つな　大くら　同　をぎの
同　八ちよ　同　きん五
同丁　藤や兵左衛門内
つな　松さん　同丁　のまや六兵衛内
てこ　ふじさき
同丁　天王寺屋庄兵衛内
つな　もろこし　同　なにはつ
同　みさを
同丁　かゞや清兵衛内
つな　かつやま
同丁　かしはや城右衛門
つな　をとは
同丁　京屋安左衛門内
印　とみざは　つな　みやこ
つな　つまさき　てこ　かつ山
同　しきしま　同　たみや
同　わかむら　同　みさを
同丁　あふみや玉内
てこ　つま川　てこ　はせ川
同　まつ川　同　さもん
同　はつせ　同　つまさき
是迄越後町の分也、扇廿八人、拍子同事、團四十一人、箱五人、印持十一人、つな引六十三人、てこつかひ九

人、〆百八十五人、
是より新町通筋
あふぎや伊兵衛内
扇　若紫　團　はつせ
同　つしま　同　わかの
同　みちとせ　同　こづま
同　かぐやま　同　にしほ
同　かしはぎ　同　よづま
扇　よしの　團　大いそ
團　みかさ　同　そのはら
同　ともへ　同　みちのく
同　つま川　同　つまさき
同　よし崎　扇　大さき
同　みよし
同筋　扇や四郎兵衛内
扇　みやま　つな　をのへ
同　大くに　同　つまぎ
同　とよ川　同　よしをか
同　やまと　同　はつさき
同　みさほ　同　藤やま
はやし　かづまし　同　かつらぎ
同筋　つちや理兵衛内
扇　かもん　はやし　大はし
團　ふじ川　はこし　がつ
同　からさき　つな　かよひぢ
同　大くら　同　よし川
同　むつら　同　まんさく
同　大がく　同　はせ川
團　大ぶ　つな　まんしう
同　花せん　同　わかを
つな　今川
同筋　車や庄左衛門内
扇　奥州　つな　ちとせ
印　小いづみ　同　△こが
同　つまぎ　てこ　かづま
同　しぎの　同　かつやま
はやし　かつらぎ　同　こふぢ
同筋　ゑや吉兵衛内
團　あげまき　印　たき川
同　大はし　つな　はや川

同　みさほ　同　むめがえ
箱　きくの　てこ　やしぢ
印　八へぎり　同　まつ山
同　をきの　同　今川

同筋　丸屋九郎左衛門内
扇　するが　はやし　せんよ
同　奥州（常春身うけ）　つな　まつ山
團　ふじ山　つな　かづらぎ
同　松なみ　同　ちさと
同　をほすみ　同　くもゐ
印　はつ花　同　かるも
つな　わしう　同　なるせ
同　もろこし　同　花づま

同筋　あふぎや清月内
扇　つる崎　はやし　いせき
團　をぎの　つな　野かせ
同　せやま　同　松ざき
同　いこく　同　金ざき
同　八はし　同　はつせ

同　かしはぎ　同　みさほ

同筋　扇や三郎右衛門内
扇　やしま　つな　△つねよ
團　あやめ　同　せやま
同　みまさか　印　つまさき
同　くめ川　同　たげんた
同　ふじさき　同　よしさき
はやし　いさご　同　うねめ

同筋　もつかう屋吉右衛門内
印　とみちよ　綱　八ちよ
綱　みなと　同　をぎの

同筋　伏見屋半六内
綱　さもん　同　新づま
同　すみのへ　同　きぬ川
同　かよひぢ

同筋　木屋長右衛門内
扇　見はし　はやし　はや川
團　はしば　同東の出見世
つな　たき川　同　こかは
同　ゐづゝ　てこ　山川

同筋　大和屋彦左衛門内
團　かづらぎ　つな　くに山
はこ　さつま　同　みくに
印　あふみ　同　やまと
同　みかさ

同筋　山城や二郎右衛門内
團　ちよとせ　印　せやま
印　とよら　つな　わかさ

同筋　ご石や彦右衛門内
團　かせん　つな　よづま
印　九重　同　みつやま
同　さはなみ　同　かしはぎ
つな　とやま　てこ　いくよ

是迄太夫天職の有所、先一書出す、是より通筋ひがしはし女郎の分不レ殘、次第不同は字八心いれあつての事なり、

通筋一丁目南がはの分

河内屋十左衛門内
つな　松ざき　てこ　なまは
同　さくら木　同　さもん

伏見や新右衛門内
印　むさし　つな　ゑもん
つな　かせん　同　あづま
同　のせき　同　かづらぎ
同　なほえ

あふぎや萬右衛門内
印　みちのく　つな　あづま
同　うかは　同　花里
同　もしほ　同　山のゐ
つな　みつしほ　同　和こく

伏見や彦左衛門内
つな　△高はし　同　松かせ
同　たかつ　同　山のゐ
同　よし岡　同　大ぶ

大和屋忠左衛門内
つな　花むら　つな　わしう
同　つやま　てこ　かせん
同　よしだ　同　大はし
同　とさ　同　たかはし
同　はせ川

南がは二丁目
田中屋三右衛門内
つな　大　ぶ　　つな　よしさき
同　よしの　　同　大さき
同　大くに　　てこ　むめがえ
折屋加左衛門内
つな　のさは　　同　八そしま
同　さがみ　　同　かしは木
同　なかはし
あはぢや仁兵衛内
印　なるとせ　　つな　わかむら
同　たかせ　　同　せやま
つな　ともへ　　同　かつらぎ
同　しゝくら　　同　ふじさき
同　わかさ
吉野や妙ゑ内
つな　萬太夫　　つな　はなさき
同　いづも　　同　うきやう
同　よしの　　同　きん太夫
山崎屋久兵衛内
印　とよ川　　てこ　ふじ川
同　はせ川　　同　つま木
つな　花の　　同　よしの
てこ　とさき
田中屋三郎兵衛内
印　もんど　　つな　いもせ
同　みまつ　　同　きん五
つな　をぐら　　同　みはし
同　花の　　同　さもん
同　梅がえ　　同　やよひ
天王寺やていじゆ内
印　ぬふてふ　　つな　つねよ
つな　大ぶ　　同　大さき
同　ちとせ
松屋七郎兵衛内
つな　をぎの　　つな　きよふね
同　とさ　　同　きよ川
伏見屋彦兵衛内
印　とよ川　　つな　すみのえ
つな　八重ぎり　　同　山川

つな　みはし
大和や宇兵衛内
つな　松さき　　つな　高はま
同　八重やま　　同　ちよはし
同　たきなみ　　同　きん五
同　大がく　　同　大くに
車や庄兵衛内
てこ　松かせ　　てこ　みづ木
同　さわだ　　同　はや川
同　八ちよ　　同　みふね
通筋一丁目北がはの分
ゑや善五郎内
印　花かづら　　つな　大はら
つな　たかを　　同　はせ川
同　あやめ　　同　かつ山
同　かづらぎ　　同　よし川
ゑなみやしゆん内
つな　かつ山　　てこ　よし川
同　つやま　　同　つま川
伊勢やようあん内
印　ちよとせ　　つな　あやめ
同　ちよはし　　同　こむらさき
つな　花やま　　同　松やま
伏見や喜兵衛内
つな　よしさき　　てこ　たき川
同　きりしま　　同　せがは
同　あづま
くしろ屋きち内
つな　うきやう　　てこ　とさき
同　大ぶ
つち屋甚九郎内
印　たかだ　　つな　きぬ川
つな　大すみ　　同　よしの
同　のむら　　同　あさづま
はりまや吉内
つな　かつやま　　てこ　よしの
同　をかやま　　同　もがは
同　いづみ
伏見や小四郎内
印　すみのへ　　つな　わか松

つな　花さき　てこ　つ山
同　大さと　同　のかせ
くしろや喜兵衛内
つな　やまぢ　てこ　大はし
同　大ざと　同　いくよ
京屋長左衛門内
印　きよ原　つな　あつま
同　やしう　同　ふぢをか
つな　いづみ　同　きしなみ
ふしみ屋妙かう内
印　と　さ　つな　小源た
つな　△大　ぶ　同　きりぬへ
同　すみのへ　てこ　ていか
住吉や長左衛門内
印　おだまき　つな　なかば
つな　すみのへ　同　大ふね
同　はつせ　てこ　いさご
同　つまさき　同　小ざくら
つたや市郎兵衛内
印　わかまつ　つな　さん五
印　わかくら　つな　大さき
つな　みはな
あふみや勘右衛門内
印　玉ちくさ　つな　玉よ
同　玉づま　同　玉ぎり
同　玉むらさき　同　玉ちとせ
つな　玉ふね　同　玉ちよ
同　玉のせ　同　玉ぎく
同　玉むめ
もず屋權左衛門内
印　しげ山　つな　小ざくら
同　山しろ　同　まつえ
つな　こさつま　同　さもん
同　をかやま　同　むめがえ
あふぎや伊左衛門出見世
つな　あふ坂　同　よしをか
同　さわだ
伏見や太郎左衛門内
印　きよはら　印　きよはし
つな　高はし　同　ちとせ

つな　見ふね　つな　△めいざん
同　わこく　同　はし
京や後家いし内
つな　きし　つな　ちよとせ
同　かせ　同　ふぢがえ
大坂屋半右衛門内
つな　きんご　つな　たまの
同　かつやま　同　△かつの
東屋庄右衛門内
つな　ふじさき　つな　ふじやま
つな　小ぎん　てこ　まさ川
同　くにやま　同　まつがえ
是よりあはざ東より一丁め南がは
伊せ屋ようあん出見せ
つな　わかやま　てこ　さはた
てこ　きく川　同　みちのく
かみや岩まつ内
つな　あやめ　同　はせ川
同　のかせ　同　みかさ
同　はつしげ　同　もんど
同　ふじ川　同　かはる
同　さはなみ
いせ屋清右衛門内
つな　しきぶ
花田屋平兵衛内
つな　大はし　てこ　みはし
てこ　ねづゝ
丸や九左ゑもん内
てこ　かしは木　同　をぎの
同　まつえ　同　一のせう
同　きりがえ　同　大さき
同　のかせ
丸や嘉ゑもん内
てこ　たまよ　同　玉をり
同　あやめ
しほや六右衛門内
印　こながと　つな　ふじなみ
同　こむらさき　同　見かさ
同　をぐら　てこ　やまと
同　よしの　同　はぎの

同　あやめ　同　なみえ
つな　こしば
是よりあはざ一丁目北がは
松原や作右衛門内
印　かよひぢ　てこ　あやめ
つな　まさ山　同　もなか
てこ　とやま
錢屋長左衛門内
つな　とさ　てこ　はつせ
てこ　なるせ　同　くめ川
同　た川
かはちや孫ざゑもん内
てこ　八重ぎり
ひろしまや源左ゑもん内
てこ　しきぶ　同　きり山
やまとや吉右衛門内
てこ　みやこ　同　からさき
すみよしや與左衛門内
てこ　さこん　同　松山
同　さもん

京屋九郎右衛門内
つな　もりをか　てこ　みやこ
同　むめがえ　同　たかを
てこ　あふ坂
是より吉原東より
永樂屋甚左衛門内
てこ　とよまき　同　ゑち川
同　やま川　同　まき山
さかひ屋六左衛門内
てこ　のざは　同　なみぎし
同　なみえ　同　うこん
同　そめ山　同　小げんだ
よし原東より爰は南がはばかりの町也
やはたや清右衛門内
團　をはら木　てこ　みよし
てこ　きよはら　同　花がき
同　こさつま　同　くめ川
びぜん屋惣兵衛内
てこ　きよたき
いばら木や伊左衛門内

てこ　そでしま
此度檀尻に乘、藝づくし太夫の分四十壹人、はやしかた引舟同前、行れつ天神のぶん八十七人、散錢箱もち鹿戀十一人、印もちしほのぶん五十七人、つな引かげのぶん二百八十二人、てこつかひお月樣百十二人、總合六百三十一人也、此内さんせんばこ持十一人にて、役めつとまり不レ申ゆへ、つな引のうちよりきりやうすぐれ諸事端めかず、行れつ役にもにくふないかげのぶん、勝久どのめきゝにて、六人まで御やとひあり、さんせんばこをたのみ給ふ、此女郎のぶんには、△かうしたる合紋名の上にあり、此衆中へは勝久さかづきまでをくだされしかば、あつぱれ見せながらも一世一代のほまれなり、此ほか揚や中檀尻の御供、但しめん〳〵口への座頭に、三味小弓のほか得たるほどの藝をつくさせ、其身は長上下に立ゑぼし也、
九軒町揚屋の分東より
かみやとよ五郎　ざとう　つ　屋　都
川口屋彦左衛門　同　城　つね
井筒屋太郎衛門　同　高　都
京や新右衛門　同　つ　ね　都
吉田や喜左衛門　同　城　猶
住吉や喜太郎　同　さき　都
山口や勘兵衛　同　若　都
住吉や定右衛門　同　城　介
八軒、塀や市左衛門と申揚や今はなし、
越後町あげや
あふぎや伊兵衛　座頭　林　都
いばら木や二郎三郎　同　藤　山
折や伊右衛門　同　城　つぐ
高島や作右衛門　同　慶　春
をりや妙智　同　八　十　島
茨木や萬五郎　同　城　吉
戸那や彌左衛門　座頭　他　行
いよや長右衛門　同　斷
あはざ揚屋
山崎や甚右衛門　同　城　民
大和屋吉右衛門　同　慶　しん
新町四十軒かぶ茶やの分東口
南よこ丁　京屋　利右衛門
同　かはちやつね

同　木や平三郎
同　ひのや久左衛門
同　ひのや長右衛門
同　森口や長右衛門
同　さぬや市太郎
北よこ町
同　まつや小まん
同　ならや九兵衛
同　三木や七兵衛
同　平のや吉右衛門
同　大いそやつや
新町筋中のよこ町
同　天王寺や善兵衛
同　姫松や仁左衛門
同　八木や宇兵衛
同西南よこ町
同　住吉や宇右衛門
同　かはちや惣兵衛
同　みなとや長兵衛
同　ふなはしや武兵衛
同北よこ町
同　白粉や利右衛門
同　住吉や清九郎
同　いずみや市左衛門
同　佐渡や町
同　ゑびすやきち
同　へいちや甚左衛門
同　住吉や榮壽
同　中村や八郎兵衛
同　ふかえや德兵衛
同　ゑちごやきよ
同　さかひや吉兵衛
同　天王寺や伊兵衛
同　すみや宇兵衛
同　高せや利兵衛
同　つの國やしも
同　あはざ町
同　大和や市左衛門
同　松原や源兵衛
同　古橋や長右衛門
同　八木や八兵衛
あはざ丁西
同　川口やきよ
同　京や八兵衛
同　しまや惣兵衛
同　ゑちご町
同　久ほうじや彦左衛門

同　池田や二郎左衛門
同　大黒や利左衛門
同　平のや清兵衛
此度勝久當里に遊興の内、諸事御用聞
金銀のかけ屋、天王寺屋淺右衛門
呉服所　かしはや治郎兵衛
同　あふぎや二郎右衛門
諸事こま物　京や甚兵衛
同　てんまや伊左衛門
同　てんまや太郎兵衛
萬紙類　一はしや藤八
儒者　御廚玄正
醫師　明石三盛
同　小林養安
同　藤井壽仙
針師　村上藤左衛門
同　桂伊慶
茶の湯指南　江村旦正
同　玉棠奈仙
手跡指南　孫澤きち
拍子鳴物指南　林杢右衛門
うたひ指南　伊坂小左衛門
大臣とうりうの内御やとひなされし髪ゆひ
同　くま
同　ふり
同　さよ
同　庄介
此四人はつねにもくるわをめぐり、女郎かぶろの髪ゆひ也、
右の女郎不レ殘八軒屋までおともの次第、御さんせんばこ二行にならべ、宇八彌四郎は鹿戀にまじり、のこりの末社は神主出立、いづれもけちえんのため松梅のため、心ざしをなげ給へ、けちえんとは五匁どり、松梅とは松むめ、是はむかし百濟國にて、無間の鐘をつきぞこない、日本へかけおちの末孫、當地の遊里をつくしあげ、これより都の西州、かの君達の腹へあがると、おりしまひが遠島といふ儀を祝て、島原と申里へすぐに御行の大臣とわめけば、下地大氣な大坂者、何かはしらず嵯峨の釋迦、善光寺の御かへりにひとしく、ばらり〳〵と蒔ほどに打こむほどに、めつそう

にありがたがり、我一とふみあひせりあひ、漸爰で思案ばし、東へわたつて八軒やより、大臣末社は乘のふね、いづれも姿の見える間は、さらば〳〵といふかげとをく、是より皆々遊里へ歸れば、大臣は都の方へ御のぼりのよし、さきだつて飛脚到來に付、長者町宗善かたより、家内の人々廿五人、ふしみまでおむかひ乘物、末社駕籠十七挺、大黑屋にかきこみければ、父母自身臺所までかけ出たまひ、勝久どの手を取て御本腹の御悦び、まつしやも不レ殘奥にめされ、此度の御禮だん〳〵見事成御さばき、すなはち末社十七人に、五軒口の御屋しき、普請勝手は望次第に、宗善どのより御まかなひ、此ほか勝久命のかぎりは、年中に百兩づゝ、人別に御助成との證文をいだしたまへば、何も是はかたじけ有馬の藥師様へまいるもあれば、八幡様へは宇八彌四郎、城六はない〳〵天照大神ぐうへ、立願こめしねがひ事成就いたせば、先第一に御禮參宮をいたすべしと、おもひたつ時は晝の八ツ過より、かの證文をまもり袋の内外ともに、其身のきたうと只一人、長脇ざしさいた心地は急度して、馬駕籠もよける氣の前後は、追分よりはやほのぐらく、池の川の針屋も見せさしもうくらふても、八丁までは是から九丁と、走りゐの水打越見れば、大津の方よりはやしかた二三十人、挑灯を星にまがへ、かやせ〳〵の太鼓鉦、天にひゞかせたづねまはる、城六是を詠、扨は大津にも高い鼻の人有、天狗につまれての仕合ならんと、たづぬる人々の中にやりてかぶろらしきが、太夫様をかやせと、泪のかず〳〵がてんゆかず、かの小女をとらまへ、城六むりにやうすをきけば、柴屋町にてかくれもない、井筒屋の大和様とて、唐土にもないはやり女郎、此月のはじめつかたに、淡路島の大庄屋様、八丁どまりの夕ぐれ、夜見せ御見物より、かの和洲様に御なづみ、替名を二番様とて、たばこやといふかほりのある揚屋にて御あひあそばし、五六日も御逗留の上に、身請までの御望事、願ひの通に相濟、金も井筒屋へ御渡し、もはや明日あさつてに淡路へつれゆき、不斷でこのぼまはしてたのしむべしと、二番様の御よろこび、乘物までけつかうに出來し夜は、一入に酒おもしろふ、あげやにて御あそびの時、いつにない太夫様、ひよつと取はづさせ給ふより、これをはづかしうおぼしめして、裏の藪がきおしわけさせ、何

くへやら御出、くるは中のさわぎ、けふ三日になれど影も見えず、かの大臣様御なげき、たとひそうした音、毎晩にても出物はれ物、柴屋町じやとて所をきらふやうはなしと、此入めも皆二番様、御氣をはらせられてのことまで咄せば、城六聞、それは殘おほひ、とりはづしにはそれじやとおもはせぬやうに、ぎし〳〵といふまじなひ有て、京大坂の女郎衆はしつての事じやに、流石やさしくも大津とて、御存ないといへば、かのかぶろ、そのまじなひは柴屋町の女郎さんたちは、度々のことゆへ、三味線より大事にかけて、覺てゐ給まはねば勤まりませねど、此太夫様は不器用に御ざんすといひずてにして、又かやせ〳〵、

第廿二、萬歳うたふ神樂男

飛鳥川淵にもあらぬ我が宿も、瀬にかはり行物にぞ有けると讀し歌は、むかし大和守繼蔭がむすめの伊勢、宇多帝に仕へ奉り、行明親王を產、後は七條能因町にやもめ住せしが、子細有て住なれそめし家を賣ける時よめる歌なり、きのふは衰へて賣けふは榮へて家をもとめしも、天性神明の利生にかなひ、城六は目出度も參宮を相勤、下向には隨分夜をこめいそぐみち、ほどなふ草津の入口より宿を望めど、ひとりは御法度きびしく、いづかたにもがてんせず、是非なふ宿のまん中ほどにて、よしや今宵は此椽にて、一夜の夢あけてもくれても、高が此世は人間皆かりの宿と、さとつたる油單をひらき、せめて御祓様を椽よりうへにと、戸ぶちなる釘にかくれば、内より女の聲して、たれじや大津の吉藏どのか、とまりならむかひへやつて、今夜は二階も座敷もつんだと、見もせずに當推おかしく、城六聲をやはらげ、ぬけ參の男一人、ひとり宿御法度ゆへ、宿取かねての仕合、今でも大津へ行人あれば、つれ立てまいる者、しばらく爰に情をたのめば、此女戸口に出、かします分はくるしからず、おしたくをなされましたか、おひとりは法度なれど、おはらひ様にお氣がつけば、たしかなお人まがひなし、先こなたへはいり給へと、風呂敷も其身持、おひもじくば御勝手次第に、居風呂もあとなれど、あついぶんがお德くりと、食にも氣を付汁もあつう、どこもかもつまつてあれば、ひそかにしてこゝに御寐なれ、奥座敷は武家がたなれば、ひとりとめるはかくす事、次は皆々御家來衆とさゝやいて蒲團をかせば、臺所

の片脇に、神明様のをかげとうれしく見れば、三人の萬女はたらきしまふて、たばこ一ぷく呑やのまずに、二人はすこし顔色つくろひ、お竹往來たのむといへば、寐過しやんなとおもてへ出た跡をしめるは、廿三四ふとり肉にて色赤、黒髪のちゞみ一しゆの女、引切枕ふとんかぶりしな行燈吹けすと、水上山の百足もをよばぬ鼾すさまじ、處へそろ〳〵人音、這寄しなに行燈にあたれば、女これにうなりを留、たれじやとは鑓持の角内、裏口での約束たがへず、これは露の心ざしと、錢五六十渡す様子、女うけとり手の内でよみけるにや、是は六十五六匁もあるべし、十九の年から七年のはたごや奉公、つゐに百よりうすい錢見ず、今三十が御太儀にもあらこけれど、あすの燒物杓子にて心すれば、まんざらのそんでもなし、殊にこうした雪よりしろい太股、むりにとは申ませんと、すこしせかすに僕もがき、三十や四十は後ほどに次手もあるべし、先爰をとふとんへはいるを、はてさてくらがりのあきなひ、それ見ませいではわけがたゝず、おいやならこの錢そつちへ、寐あたゝまつてほこ〳〵する身を、つめたい石屁の女郎衆とはちがひますと、さりとはぬからぬ商口、僕もこれにたまりかね、そんなら其錢はそこにをきやれ、三十文とつてまいると、そろり〳〵とはひもどる、茶半ぶくも呑まにやあらん、ついそろ〳〵とさぐる手を、女とらまへどれ錢はと手をさしいだせば、角内は物もいはずにわたす錢四十四五匁、あり明がなふても是ほどはいとしさがちがひまするとと、無言行義に唯鼻息とすだく音と、しばらく深田をかけちらして休むてい、さう所へ最前の本の角内、堂にまよふておそなはり申た、三十文有といふ時、女むくとおきあがり、ねてゐた男をとらまへるをと、角内はびつくりして、これやどうじやとさぐり、とらまへし帷子はにせ男が袖口、引はなしにげんとすれば、角内はなさずと、こい非切すりはさせめとぎしむ時、女聲かけ、わしは爰にゐます、にげいといはしやつても、懸の殘り六十一文たりぬがあれば、是をとつて跡は夜明までもといふに、角内氣がつき最前の錢もどせといふ、女は後の男にたらずまへくせといふ、くらがりにてとんづはねつ、つかむやら女はなくやら、亭主が聲して飛でくれば、二階の客も有明片手に、しかつべらしい男下り、夜中の事御りやうけ

んあそばせといふをしなに、ふたりのやつこは奥へにげゆき、女はそこらまきちらかせし錢あつむる時、城六は片隅よりおきれば、はや夜もあけの日は京へ登、勝久どのへ此僕が咄申せば、大笑ひの種蒔錢代、金子の山かさね〳〵露を請、千秋萬歳の門松繁り、妻女は則伽羅姫君、兄あかし殿御入部の時、宗善方へ立寄せ給ふ事は、京中にかくれなく、目出度御代に相生ぞうたひ龜、

于時寶永七寅九月中旬

板本　老松喜作兵衛

御入部伽羅女卷之六終

富宮筍

比は寶永三年夏のすへつかたより、いづことなくふと富といふ事をはじめけるが、しだい〳〵はやりもてゆきて、かなたこなた都鄙ともに、いぶせくもてはやし、神無月の初比より、都のかたも家なみごとに行通ひしが、いかさまふしぎや、平安城の威德に神もめで給ひけん、おほくは都のかたへなんつき合されてぞ歸りける、中にもいとふしぎなる事は、其内わけて富の小路通り、上京下京の者ともおゝくとりけるも、誠に名は實の賓といふかゝるしるしにや、いととうとむべきことならめ、扨かの所に行つけば、我おくれじと札をかけけるが、あつまり聚めて上より下を見おろせば、爪をたつる計の地もなく、おしあひへしあひ、はな紙袋こしのまはりの用心して、いまやいまやと待ける中、太鼓のをともしきりにとゞろきわたりて、とうから〳〵とてかう〳〵となるをとの心よさ、おりふしやう〳〵つきはじめける、此よみあげのおもしろさ、面々こゝろ〳〵のいわ井の入札、さてさて腹をかゝゆるばかりなり、よしさはとらぬとても、此氣ばらしのおもひでは、くわんじん能大關が相撲などは、誰もなか〳〵いそと見えけらし、七八千の入札ごとに、おゝくはこれやうのことならめと、悉く開とゞけ侍らぬこそ、いと殘多きわざならめ、わづかに六七十枚のうちだに、餘り腹背をよるばかりなる事どもなれば、これなん見ぬ人のつとにせばやとおもふて、こゝかしこ耳にとまりしこと共、かきつけてぞ歸りける、富小路がよくもあたるといふぎゐんにや、富小路富の町富屋の富助といれて、又あたりしもおかし、これをとつたら鱧と鮹とにして、酒かふてのもふよといふもあり、當世發句にや、ついたりなきりのあがりやあざ天下といふもあり、突ぬればくるゝ物とはしりながら、なをよろこばしく歸るさの袖、此たびはたんととりなば手向して、もみぢの錦さてや歸らん、君がため保田に出て寄進せし、わが子もち手にとみはいりつゝ、など女房のよみしは、みな百人一首をとりなをしたりと、やさしく見えけり、又はんじ物と見えて、のぼりはしごにいかりをくゝりつけたる札もあり、いかのぼりをかきて糸のするに、金屋五十郎といるゝもあり、おばゝこたつへといふ札は、あたらしやれといふまくらことばなるべし、大經師おさ三茂兵衛とかきてあがりたるゆへ、これはいかゞといづれも不審すれば、そばなるこざかしき人思案して、つかれてのぼされたいとの心ならんといへるも又おかし、わけて腹をよらせし札に、とみはかゝがすきで御ざるさかいで、たのみますとよみあげたれば、數萬の人々どつと一度にどよみしこゑ、天地にひゞきて櫓もゆるぎけり、あゝ〳〵都のはらふくれ、病なしの口のほどゝて、かゝるほうらつなるぞうごんなれども、狂言綺語には、神もいさみ給へるたぐひなるべし、總じてよみあぐれば、ひとしく舌も引あへぬうちに、のびあがり立あがり、こゝじや〳〵と手まねきばかりなれども、又おともなく香ともせず、誰やらんしれぬもあれば、よみ方より料簡していふは、心の内にはさぞやうれしく、とびたつほどにおぼすらめど、だまりてござるは御人體と見えました、札にしるしてはり紙いたしますほどに、後にはみごととりに御出あろふといふは、さすがの人とおもはれたり、扨錢三百文五百文壹貫文、或は貳貫文三貫文等までの札に當るを、尾利（びり）をとるといふなり、此尾利の言葉は、元來傾國より出たる詞なり、いかんとなれば、拾兩より内の女郎をおしなめて尾利といふ、今いふ富のびりも、女郎に對し、ついてとるといふ義あるゆへ名づくならん、こゝに油斷のならぬ事は、與次郎が大勢富場へ出て、一番づゝにて其まゝ其宿へかけつけ、此お家に一番とみお付あそばされ候、扨々お目出度事でござります、旦那樣は夜半より内にはお歸りなされませぬゆへ、まづおしらせのためかけつけました、此よし奥樣へ御申上〻だされとて、其家相應々々にべんぞりとやりおつて、おいわゐをしたゝかにしてくる、又わびしき人相にて、つれもなく、紙子ぐらいには、すぐに御用心のためとておともせらるゝよし、何としてかくのごとく、はやくはうせてとゞくる事ぞ、札數ほどいづかたにても此とをり、御用心々々々、さても慾の世の中とはいひながら、とりかへ賣掛もしぶればこそ、盆の十四日大晦日には、百度もふでほど足をはこび、所によりては東もしらむまで、色々にくちたゝけども、どうしてものこるほどのもふけにくい此錢かねを、たれ乞もせぬに、まづいまはいらぬと

て、古蚊屋かたびら共を取出し、どうしても明日はうけるほどに、一夜の事たのみますと、びりでも手にとつたやうに心得て、持佛堂にかゝり如來までもり出して質にいれ、淺黄のもめん頭巾に紙子きて、頼朝のかうべはいそなるつくねめし三つ袖へいれ、夜半すぎより水ばなたれ、伏見海道さしておしわけつきのけ、行人ばかりなりけるが、すかたんしては歸るさの、ねたみごとこそおかしけれ、篠竹のひきぬきに、一番札とかきつけて、御祓ともにむすび付、いき〳〵とゆゝしげに歩ば、あとよりいふは、あの一番の五十兩宿へ付たら、大勢しうしんのかねじやほどに、さぞ今宵はうめき、屋鳴がしてねられまひ、あすは家内の者どもふるひつき、とりつめひきつめ、かれのこれのと醫者ぐるひでも詮なければ、木藥屋の人參に、なか〳〵五十兩ではたるまいといふもあり、又錢とりたる者どもは、三十貫は馬一駄づゝにのせ、二十貫は兩方に付させ、中にやせたる小男がのりて、おりふし三疋、大勢群聚の中なればいそがれはせず、ゆるり〳〵とゆけば、あとより三尺手拭ほうかぶりしたる者共がくち〴〵に、是は富ついた者でござあると、なが〳〵しくあとをひけば、いづれも口そろへて、さてもこれはよくも見立たり〳〵とほむれば、馬はいそがずのりてはきのどくがり、それよりおりて馬を一足づゝ、あとやさきやとちり〴〵になしたるもいと興あり、また小者丸の内にともへつけたるちやうちんともして、むかひのていと見えければ、これ〳〵そちの旦那は札がいつて、いかふしてやられたが、あまりにうれしがりて、これは夢かやうつゝかと、二こゑ三こゑゆい〳〵こけられたが、すぐに腰がぬけて、三十貫をまくらにして、庄屋のかどに寢ていらるゝが、おれがもどる時には、所の番太がこも一枚きせておいたが、ひへあがりてたぶん目をまはさるゝであらふほどに、伏見京橋のゑんめいさんをかふて、はよふいそいでいきやといふもあり、かゝるおどけごとにうかされ、おもはずしらずいつのまにやらはや稲荷まで來りしゆへ、鳥井の角の茶屋にまづこしかけ、茶をのみやすめば、十人ばかりつれだちたる内一人、鳥井にむかひてのゝしるは、さて〳〵いなり樣きこへませぬぞや、今朝八つに出て、一足もいそぐ心なれども、御前まで道よりして、錢二文しんせ、せつかくたのみましたに、このやうに遠くの所、星をいたゞかせてゆきかへりいたさせ、氏神ともおぼへませぬ、もはやあすから宗旨をかへて、祇園樣の氏子になりますぞといふもあり、五里のあいだの歸るさ、みな〳〵これやうのわるくちばかりにて、おぼへず宿につきにけるとかたれば、もとよりちなみしさる學者居合せて、さて其方も札かけられたるかと問れければ、なか〳〵かけました、さりながらわれらの掛やうは人とはちがひ、かはりたる願ひにてかけましたが、とてもの腹へらしに物語しませう、跡の晦日に宿ちんの一口六夕のかたに、錢五百文うけとりましたゆへ、其内八十文のけて、殘る四百十六文を四十文づゝ十につなぎ、十度かよひて十度の品をなぐさまんと心ざし、さて願ひの掛やうは、此札あたらぬやうに守せ給ひ、もし當りてもわたくしの物にいたさぬ心からは、とても却て世話をいたすでござる、此段聞召分られ、只ひん〳〵のかたへおとさせたべと祈誓し、此札上らば神へ寄進と書付、印板おして掛ましたれば、十度ながら願のごとくに札いりませぬゆへ、扨は諸願成就のしるしと、有がたさ大かたならず、一生是ほどうれしい事は覺へませぬ、其のわけいかゞと、こなたも不審が立ませうけれ共、見さしやるとをり罌粟一粒をまけば、來る年に數萬の實を取かへします、年々かさみては幾千萬億といふ、そのかぎりしれませぬば、今此四十文の錢一文づゝにても、札の落たる方へまはり、都合四百十六文人々の手に渡りたすけとなる、其くどく我子々孫々にいたりてかぎりなき事、恰も罌粟のたねのごとくではござるまいか、此身はともあれ子供が不便にござれば、何とぞして此身こそうかむ瀬なくとも、せめて此度たねをまきちらして、子供が世になりて實をとらせ、出世させたいと思ひまして、かくの通りでござるといへば、學者の答へに、其方けんぶつは尤なる事、一段よき慰み、札かけられたるは似合ざる事とおもへば、さても〳〵思ひよらざる立願、さすがの人の心いれかな、いにしへ聖人のおしへに、陰德といふことを立て、人しらぬ慈悲善根をほどこす人は、天より思ひもふけぬ福力を、あたへ給ふといふ事をおしへ給ひしが、其方ゆくするの繁昌、子孫の出世思ひやられたりと、感嘆に堪られたり、何さま當らぬはことはり、當るはふしぎ、それがしが知

音に、すいぶん手前よろしき人なるが、慰みとて今度五人いひ合せて、さま〴〵結構なる辨當いひつけ、籠にてさゞめき、手替りの爲久助と作兵衞は兩人して、辨當の荷づくろひして、はや棒もさしこみ、わらんじの緒をしめかゝりければ、内の下女たけ、何と心にうかみたるにや、前夜まで何のさたもせざりしに、たすきがけして二階へはしり上り、錢三百文葛籠より取出し、内八文ぬきて棚におき、これ作兵衞どの、おれもことづてますほどに、かけてくだされとたのみければ、作兵衞申は、いらぬ事よしにしや、あが身せんどふとんの引わたさへ、どうわたの目三匁の事でゑかやらず、きのふもふしうりがおとづれたれば、せんどひとつまみそへなんだ、あれかはいやといふて、いそがはしいのに棚もとしさいて、横町へわざ〴〵かいにいきやつたではないか、さてもすいきやうな人じや、おれがわるいことはいわぬ、ものどりてからわめきやつて、今年中ぐい〴〵とあがみにうらみられて、札のかけようがわるさにといやるがやかましい、ひらにおきやといへば、はてとるきではござらぬ、神様への祈禱になりますほどに、たのみますといふゆへ、是非におよばず、そんならいれてやろふとゆいゆい、作兵衞たけがしりつめりければ、たけほゝゑみけり、久助ははや棒しめたにとつぶやき、毛氈のなかへ二百八十八文さしこみ行けるが、ふしぎや旦那衆五人は當らざりしに、たけが札にて三十貫うけとり、旦那たちはこれを世話にぞ歸られける、此度富について思ひあたりし事は、いつぞの頃よりか、すつとんすつとんといふ事はやりけるが、文字になをせば州富州富になりける、州はしうの音なれば、すの音にかよひくにとよむ、富はふの音にてとむともみともよむ字なり、むははぬる音にかよひてとんと同事なり、しかるゆへかなにかく時はすとんなれども、うたふ時はすつとつめねばはづみなし、たとへばつれ〴〵草にてあめりとあれども、よみくせはあんめりとはねてよむがならひなる、同事と心ゆべし、かゝる事も富のはやりもてなす瑞相ならんと、今更おもひあてられける、又きけば過し比伏見の片陰に、一日くらしのやくわん與介といふ者ありけるが、或時米問屋の主人、此與介に錢三百文とらせ、ひらにとすゝめ富札一枚入させけるに、ふしぎや二番の富にあたりて、金二

十兩とりけるが、與介なのめならず悦び、此いわゐとてあたり近所の人々をまねきよせ、酒肴をとゝのへもてなすこそきどくなれ、扨やう〳〵酒もしみけるり一日をくらしかねしわたくしなるに、主人の惠みにてかやうの仕合をいたしたるは、天よりすくひ給へる時節と見えましたれば、明日は髪をそり、教信房になりますほどに、いづれも日比の念比をたがへ給はず、彌たのみますといひけるが、いづれもおどけ言どこゝろへければ、よかろふ〳〵とすゝめけるに、はたして其翌日つむりをごそごそそり、かの念比の衆中へ、へんてつにてまはりけるゆゑ、興をさませし人もあり、扨も思ひ入たりあやかりものかなと、うらやむ人ぞおゝかりけるが、ほどなく柴のいほりをむすび、常念佛のごとくしやうごのをとぞやまざりける、元來此與介といふ者、日比無慾なりしが、かゝる二十兩の寶を得たるこそ天のめぐみなれ、慾ふかき人は、是非とる事と合點して、あたまから札數おおくへいれば、あれでは仕合あらじと思ふゆへ、終に一枚も當らざりける、此等の理を能々考へ思ひ給ふべし、かならず〳〵不義にして富かつ貴は、浮べる雲のごときぞかし、とにもかくにもたゞ其家業を大事にかけ、律義をおもてにたてゝ、朝夕あいつとめ給はゞ、辨才天も正直の頭にやどり給ひて、さいはひ有ぞかし、是すなはち聖人第一のおしへにかなひ、德は身をうるをし、富は屋を潤すの基なれば、ありがたし共中々申かぎりぞなかりける、件の物語我も一座に並居て終日聞しゆへ、これなん自他のをしへと思ひつゝ歸りて、いまだ醉もさめねば寢もやられず、筆をとり灯のもとにて、口うつしをかきたてゝ、ひとりゑみこそせられける、すつとん〳〵、

富宮筍終

諸國心中女序

露の黄昏の物心ぼそう、木枕に重石して、夢てふ物をたのむ所に、色司の若者ども五六輩颯來て、たつ□□□聲世事は氣づまり也、女義一道の噂をつくさんと、ひとふたと數ふるより、浮事安き枯ふくべ、濡には輕き川流れの、流て早き月日のむかしがたり、自の見聞しをも取添、かたみにつゞくれば、艶より始て哀なるあり、賴母敷あり、いとをしき有、にくきあり、五の指を十たび折て、折捨る花にはあらじ、いざ櫻に文字して人に見せんと、咄の題を前句に作る連誹のわけも聞えず、其儘歌舞妓の看板よと笑、通ずや世の諺、何事か狂言を離たる、可笑ひ所こそおかしけれと、いひよぐるもおかし、是が中に殊にはやり男の戀しりは、言毎今樣にかたり、ふくべがごときはげかゝりたるは、其いひ實めなるを、其儘に書つゞくれば、破手あり子細あり、東山の奥西海の底、雪の北水の南、洩て世にしる貞節を集五の卷とし、諸國心中おんなとなふる而已、

洛下　寓居　序

諸國心中女目錄

卷之一

一、ふたつ文字角行牛の時參り　きぶねばなし
　附り、下女かさかしら妻女のうたがひ
二、出しかゞ白河の關風ひきて　松山ばなし
　附り、旅寐の思ひ宿守のなみだ
三、飛こみて情くらべのつゝ井筒　つるがばなし
　附り、醉狂男思ひ死のおんな
四、打かへて浪を鼓の相撲川　鎌くらばなし
　附り、あやしみ夢に起てつゐに夢
五、石清水草の古小屋結び捨　やはた咄
　附り、おんなをもひの出家すがた
六、はちす葉よ我袖ぬらす戀の海　あふみ咄
　附り、とほり娘わけしりの下部
七、椎櫟命ふたつをひろい行　くろだに咄
　附り、たすけすます心中死
八、災は霜に男のぬれしより　あづまばなし
　附り、本妻のねたみ下女がまこと
九、傳通流天雲井に揚る仇名哉　大津ばなし
　附り、柴屋の君が戀をやきつゝ

卷之二

一、寐ぬ夢にみる戀知の里　きたのばなし
　附り、いろごとのはじめはつくり花
二、襤褸に包む心中の情　堺ばなし
　附り、富貴の親を捨て貧賤の夫
三、うで木みじかく頸くゝるめり　京ばなし
　附り、心中はへだてぬかべごし
四、旅の荷葛籠つくり密夫　龜山ばなし
　附り、十五郎がおとこりんき
五、添はぬが二世の契り成けり　洛外ばなし
　附り、眠藏の大黑はびんぼ神の司
六、燧に消る戀のまぼろし　かわち咄
　附り、人の花折るなさけしらず　さがばなし
七、鹽の小路の八重の戀風
　附り、きのふの御所住けふの草庵

卷之三

一、青き火に人間化して狐塚　しゆしやか咄
　附り、過去の心中姿現在の記念
二、名を揚て身は心中に沈とや　なにわばなし
　附り、行ぐれの男待わびの女
三、葛の葉の手のうらがへすよこ雨風　松が崎咄
　附り、無心中の男ちくしやう　上野ばなし
四、木男の心花さく京女郎
　附り、六條の色盡東の髭
五、思ひつゝぬればや殿のみえつらん　たへま咄
　附り、夢にみる前世の夫現に立る心中
六、おなじ枝をわきて桧の青き哉　みやこばなし
　附り、玉の疵戀しらずの若衆
七、三度めや醒る樽井の醉心ち　美濃ばなし
　附り、思ひすてぬ惡性をとこ

卷之四

一、おんな扇の戀を颯らす　江戸ばなし
　附り、筆のたより繪師の戀
二、袖しぼらする栗栖の丶萩　ふしみばなし
　附り、夫の病死女のくびれ
三、筧のかよひ濡のふた道　ひろ島ばなし
　附り、たんき男ののちのくやみ

四、樹神の嫉妬風のたゝかひ　日向ばなし
附り、色かへぬ心中塚のしるし　みちのく咄
五、黄泉のみちびく戀の駒鶴
附り、戀しらずの娘のおや　丹州再河咄
六、戀を吸こむ河童の淵
附り、すまふは戀の取くみ　にしのをか咄
七、命をかけし夢のうき橋
附り、婬慾をはなるゝ觀音の慈

卷之五

一、會稽の垢かく妻のかたき討　相州ばなし
附り、せんだんの實生武の娘
二、大かねのつぶし音なき夕かな　都むろ町咄
附り、親仁が身の油息子が湯水
三、其比の撥に撞木を打かへて　同立うり咄
附り、色小袖のさばき白むくのじみ
四、色所温泉に袖の鹽じみて　ありまばなし
附り、三久里がうたがひ市が實
五、ひとり行二女供する三瀬川　さぬき咄
附り、君が一日の恩妾が思ひ死
六、聞たびに珍しければ伽羅の前　都の四條咄
附り、むすばぬ怨添ふるなさけ
七、世の哀嵯峨が行衞の化野や　さいこく咄
附り、露霜のふたつ有女若衆の朝
八、身の榮氏なき玉のこしぢ山　大坂ばなし
附り、心中のつもり富士の山

諸國心中女目錄終

諸國心中女卷之一

一、ふたつ文字角行うしの時まいり

洛下六條の町に細谷何がしといふ者有、元は信州木曾に住で、大いに富る者の身の榮耀にほこり、寒國をいとひ、妻子けんぞくを率て京にのぼり來ぬ、古郷よりすぐれたるさきくさを切よせ、みつばよつばにとのづくり、いかめしき移住なり、妻女はくにゝて選すぐりて、美女といはれし人成しが、細谷京に住つきて、上がたの風俗言語のやさしき衣服のかざり、なにはにつけて心をつくれば、我妻ほどの女は、かつ手の森の葉出とよばるゝ、子守女童にもおほし、まして都はよしの山、雪かとみゆる花の貌、おもて白くめうつりければ、妻女にはこしかたのやうに、ねもごろにもかたらはすうとかりけり、さりとて都人ははづかしと、えびすごゝろを卑下して、外に行かよふ女とてもなかりしを、妻はさるかくし者をこそかよふならめと、いぶかしくおもふ折から、召つかふ女の口さがなく輕薄をつくりて、殿はそんじやう何といふ妾をかくして、命かけたる御なからい、中々今は御事など覺しもかけず、あまつさへその女うへの御事を妬て、呪禱するなんど聞さふらふと、跡なきそらごとをいひつゞくれば、さればこそあな腹だちや、夫をおかすのみか我身をさへのろふとは、よしやすぢなきつみおはぬまに、こなたより神に祈んと、嗔噫のほのほを戴き、我慢の高あしだをふんで、一七日北野の丑の時まふで、冷まじともいふ計なし、されば神は非禮をうけ給はず、此行みつるまで何のしるしもなければ、甚むねをこがし、神も佛も名のみにて、世になき物なりと、もたいなくさみしけるに、さる者のいふは、それ天滿宮は諸願いちじるくかなへ給ふといへども、わきては無實の横災をこそ能救ましませ、戀に祈るには三輪、玉津島、貴布禰なんどこそ、たとくおはすなれと、あないしりがほに語れば、扨はうれしや物しれる神をたのまんと、それより又一七日、賀茂より貴布禰の二所にまふでゝ祈る、夜毎戌の刻賀茂川にひたりて、七度の垢離をとり、白き小袖に白き帷子を打かけ、木犀の履木瓜の杖、三足の鐵輪を被き三つの蠟火を燈して、賀茂の神前を禮し、きぶねにまいりつく比

を丑の刻と量つてつとむる、きくも身の毛よだち、舌ふるふわざなりかし、かく冷まじき女なれど、にくからぬ所あり、寶前に祈るやうをきけば、かう大願に歩をはこび、氣疎かたちをなす事、神の御めもはづかしく侍らへども、全人の命をたち、あしき病などうけよとはいのり侍らず、願らくはうなひ子のうしろ紐よりむすびをきし情を捨て、新敷花にめづる事の恨ばかり、夫のあだし心より、すぢなき人の罪をさへおふなれば、むかしみし妹が垣ねのあれたるを、あはれとへかしとまでの心をつげてたび給へと、丹誠にふしおがむ、七夜にみてる晨明の朝、幣白やうのきれたる紙に、一首の歌書て玉がきにかゝれり、何ごゝろなくとりてみるに、

うすくともよそにはつまをかさねぬを
いかにうらみん木曾の麻きぬ

とあり、女つく〴〵歌を案じて、扨はしばしわれにをこたりたるのみにて、あだしきたはれはなかりしを、人のものいひのにくさに、かゝるはぢがましきふるまひ、我ながら正體なの事よと又打なきて、かな輪履なんどきぶね川にすてゝ逃かへり、夫に此ほどのはしたなき身のうへを懺悔し、神詠のまさ〴〵しき事をかたれば、細谷もおそろしきをんなのしはざと、有がたき神の示と、ふたつの事の肝に染て、今は不通に餘所めみやる事なく、あし〳〵昔のちぎりにかへりける、是更に神のみそなはし給ふ所をはづるなりけり、又女の心むけをいはば、打きゝてにくきやうなれど、夫を思ふこゝろのせつなれば、心中のいたりといふべしや、

二、出しかど白川の關風引て
心は面のごとし、百千萬にかはるなれば、假初一とせ二年召つかふ小者なんどさへ、その初は先心ざまより立振廻を試む、增て老の後より二世を掛るふさいの中は、能見知てこそ添たけれ、或は貌うつくしく、言最愛らしき女の究て心徒なるあり、嫉妬ふかくはぢがましきふるまひあるもの有、なをいひつゞくればなんなきものなし、只貌色より心中のすぐれたらん女こそ、賴しき物なれとさる男のいひし、實も能たづねけらし、心ざしのあてにやさしき女を得たり、己は年毎一度づゝ陸奥に所用あつて、夏の初より秋の半に行かへりけり、ある年又例の田舍わたらひしける

に、待比過て秋もくれ冬になりぬ、女心ならずいぶかしくて、神に祈佛に詣、巫女ト人に問に、此人は重き病有、死生さだかならずといへば、なをあこがれて行てもみまくほしと思へど、いふかいなき女の身とて思ふまゝならず、人していひやらんとする所へ、文もてのぼりぬ、夢の樣に覺て、まつ人はいかがとゝふに、風の心地にいたはり給へども、御命つゝがなく、今は漸快氣に侍り、京に待わび給はんと、それのみ覺しめすに候、いまだ力もたど〳〵しく候へば、冬のくれか春の初にこそ、御のぼり有べきにといふ、文をみるにげにいふごとく也、都を思てよめる歌あり、

便あらばみやこにつげよ雁金も
われ白河の關にとまると

扨は御命のつゝがなきこそ嬉しけれと、いとせめて戀しき時は、うば玉のよるのふすまをかへしても、かへらぬ人を松山に、いくよ浪こす枕の上、流るゝ月日やうやうに、師走晦日のこよひ迄、おとこの歸ざりければ、さびしき春を待つけて、年たつ日よみける、

まつ人は影しら川に日數へて
年ばかりこそ立かへりけれ

かくてむ月もまち暮て、二月の初に歸登りぬ、只しゝたる人のよみがへりたる心地によろこびしが、げにや人の命計賴なき物はあらじ、いくほどなく去年の違例の立かへり、又身心を惱す、女は有し物おもひの、まだ昨日今日過がてに、此くるしみを見て、身をきるばかりもだゆれ共かひなし、誰かいつし春の色は東より歸來て、冬籠の一花暫の盛だになく、無常の風に散にけり、血の涙になけ共いかゞすべき、からは氣疎野邊にをくりて、むなしき縟のみ殘れば、わく方なくともにしなんとせしが、げにひとり來て獨行黄泉の旅、如何われをともなはん、後の世をこそとはめと、夫の死骨を一體の佛に作り、をのれが向齒を三つ打ぬきて、その佛の胸に納、滴る血を集て經を書、尼と成て一生清淨におこなひくらしけるとぞ、

三、飛こみて情くらべの筒井づゝ
酒ははかりなき物にして、能程の限をしらず、君を恐れず親を憚らず、恥をわすれ損失を辨へぬ類、いふもさらなれと人を笑、我から櫻ちる木の下風に、盞の波を立せ、有明のこゝろこそすれと、戯て引うけたる樂は、淵明が虎溪の犯し、太白が水の月にはまりし、賢